

# Oracle Collaboration Suite for HP-UX

リリース・ノート

リリース 1 (9.0.3)

2003 年 5 月

部品番号 : J06992-02

---

Oracle Collaboration Suite for HP-UX リリース・ノート, リリース 1 (9.0.3)

部品番号: J06992-02

原本名: Oracle Collaboration Suite Release Notes, Release 1, Version 9.0.3 for HP-UX

原本部品番号: B10232-01

原本著者: Platform Technologies Division

Copyright © 2002 Oracle Corporation. All rights reserved.

Printed in Japan.

制限付権利の説明

プログラム（ソフトウェアおよびドキュメントを含む）の使用、複製または開示は、オラクル社との契約に記された制約条件に従うものとします。著作権、特許権およびその他の知的財産権に関する法律により保護されています。

当プログラムのリバース・エンジニアリング等は禁止されています。

このドキュメントの情報は、予告なしに変更されることがあります。オラクル社は本ドキュメントの無謬性を保証しません。

\* オラクル社とは、Oracle Corporation（米国オラクル）または日本オラクル株式会社（日本オラクル）を指します。

危険な用途への使用について

オラクル社製品は、原子力、航空産業、大量輸送、医療あるいはその他の危険が伴うアプリケーションを用途として開発されておりません。オラクル社製品を上述のようなアプリケーションに使用することについての安全確保は、顧客各位の責任と費用により行ってください。万一かかる用途での使用によりクレームや損害が発生いたしましても、日本オラクル株式会社と開発元である Oracle Corporation（米国オラクル）およびその関連会社は一切責任を負いかねます。当プログラムを米国国防総省の米国政府機関に提供する際には、『Restricted Rights』と共に提供してください。この場合次の Notice が適用されます。

Restricted Rights Notice

Programs delivered subject to the DOD FAR Supplement are "commercial computer software" and use, duplication, and disclosure of the Programs, including documentation, shall be subject to the licensing restrictions set forth in the applicable Oracle license agreement. Otherwise, Programs delivered subject to the Federal Acquisition Regulations are "restricted computer software" and use, duplication, and disclosure of the Programs shall be subject to the restrictions in FAR 52.227-19, Commercial Computer Software - Restricted Rights (June, 1987). Oracle Corporation, 500 Oracle Parkway, Redwood City, CA 94065.

このドキュメントに記載されているその他の会社名および製品名は、あくまでその製品および会社を識別する目的にのみ使用されており、それぞれの所有者の商標または登録商標です。

---

# 目次

はじめに .....	ix
リリース・ノートの構成について .....	ix
マニュアルに記載されている名称について .....	ix
最新情報の入手について .....	ix
 1 日本語環境での使用上の注意 .....	
<b>Oracle Collaboration Suite 全般</b> .....	1-2
サポートされないコンポーネントについて .....	1-2
パッチの適用について .....	1-2
Oracle9iAS Infrastructure について .....	1-3
Oracle Collaboration Suite Information Storage について .....	1-3
動作要件について .....	1-3
Oracle Real Application Clusters 対応について .....	1-3
ユーザー名の制限事項 .....	1-3
Oracle Collaboration Suite ポートレットのインストールについて .....	1-3
Web インタフェースへのログイン時に Oracle SSO Warning が発生する問題について .....	1-4
ドキュメントの訂正と補足 .....	1-4
<b>Oracle Email</b> .....	1-5
Oracle Email SDK について .....	1-5
Oracle Email Migration Tool について .....	1-5
マルチバイト文字の使用制限について .....	1-5
Oracle Email Web インタフェースの言語設定について .....	1-5
Web インタフェースの制限事項について .....	1-5
Web インタフェースにおける Netscape Navigator での制限事項 .....	1-6
IMAP サーチの制限 .....	1-6
プロトコル・サーバー管理画面のブラウザ操作について .....	1-6
tnslsnr コマンドの -user、-group 引数について .....	1-6
<b>Oracle Files</b> .....	1-7
レビュー・プロセス機能について .....	1-7
SMTP サーバーの指定について .....	1-7
Oracle Enterprise Manager Web Site での Oracle Files ドメインの表示について .....	1-7
Oracle Files 起動 / 停止の制限について .....	1-7
OID からプロビジョニングされる Oracle Files ユーザーについて .....	1-8
Web ユーザ・インタフェース以外のプロトコルでログインできない場合について .....	1-8
アーカイブ・ファイルの格納に BFILE を使用する場合の注意事項 .....	1-8

Oracle Files Web インタフェースでの日付フォーマットのヒントについて .....	1-8
Web ブラウザのステータス・バーにおける文字化けについて .....	1-8
Netscape Navigator での制限事項 .....	1-8
メール送信機能の制限 .....	1-9
自動送信メールの DATE ヘッダについて .....	1-9
クォータ追加要求メールの内容について .....	1-9
ファイル圧縮 / 解凍機能の制限について .....	1-9
ドキュメントの訂正と補足 .....	1-9
Files ポートレットの制限について .....	1-9
クォータ残量に関係なくコピーできる問題 .....	1-9
<b>Oracle Internet Directory と Oracle Single Sign-on</b> .....	1-10
LDIF ファイル作成時の注意事項 .....	1-10
Single Sign-on ユーザー情報における画像の登録について .....	1-10
DAS からのユーザーの登録 / 編集についての注意点 .....	1-10
ORASSO のランゲージ・インストールができない問題について .....	1-10
<b>Oracle HTTP Server</b> .....	1-12
DAD のデフォルト・ページの設定の必要性 .....	1-12
DAD 設定時ブラウザ画面が空白になる問題について .....	1-12

## 2 Oracle Collaboration Suite リリース・ノート

このマニュアルの目的 .....	2-2
コンポーネントのリリース・ノート .....	2-2
<b>オペレーティング・システム要件</b> .....	2-3
必須 HP パッチ .....	2-3
Oracle9iAS Infrastructure および Oracle Collaboration Suite 用必須パッチ .....	2-3
Oracle Collaboration Suite Information Storage 用の必須 HP パッチ .....	2-4
既知の問題および制限事項 .....	2-4
<b>インストールの問題</b> .....	2-5
インストールの問題 .....	2-5
インストール後の問題 .....	2-13
削除の問題 .....	2-15
<b>管理およびセキュリティの問題</b> .....	2-16
管理の問題 .....	2-16
セキュリティの問題 .....	2-34
<b>コンポーネントの問題</b> .....	2-36
Oracle Email の問題 .....	2-36
Oracle Files の問題 .....	2-36
Oracle HTTP Server の問題 .....	2-37
Oracle9iAS Portal の問題 .....	2-39
Oracle9iAS Web Cache の問題 .....	2-44
Oracle9iAS Single Sign-On の問題 .....	2-45
Oracle Internet Directory の問題 .....	2-46
Oracle9iAS Containers for J2EE の問題 .....	2-47
<b>ドキュメントの誤記</b> .....	2-49
『Oracle Collaboration Suite 管理者ガイド』 .....	2-49
『Oracle9iAS Single Sign-On 管理者ガイド』 .....	2-49

### 3 Oracle Collaboration Suite リリース・ノート追加情報 1

インストールの問題 .....	3-2
コンポーネントの問題 .....	3-2
Oracle Email .....	3-2
Oracle Files .....	3-3

### 4 Oracle Collaboration Suite リリース・ノート追加情報 2

コンポーネントの問題 .....	4-2
Oracle Email .....	4-2
ドキュメントの誤記 .....	4-2
『Oracle Collaboration Suite for HP 9000 Series HP-UX, Linux Intel, and Solaris Operating System (SPARC) インストール・ガイド』 .....	4-2

### 5 Oracle Email リリース・ノート

このリリースでの新機能 .....	5-2
クライアント・ソフトウェア .....	5-2
一般的な問題および解決方法 .....	5-3
構成上の問題および解決方法 .....	5-3
sendmail の停止 .....	5-3
複数の電子メール・ドメインを持つ Oracle Email の構成 .....	5-3
既知の問題点 .....	5-5
コア・サーバー .....	5-5
プロトコル・サーバー .....	5-6
Thin クライアント .....	5-7
サード・パーティ・クライアント .....	5-9

### 6 Oracle Files リリース・ノート

Oracle Files の概要 .....	6-2
対応クライアント .....	6-2
Microsoft Windows .....	6-2
Apple Macintosh .....	6-2
UNIX .....	6-3
一般的な問題点 .....	6-3
Oracle Files のユーザー名へのマルチバイト・キャラクタの使用禁止 .....	6-3
NLS の問題点 .....	6-3
太字/イタリック体の表示状態 .....	6-3
キャラクタ・セットの制限 .....	6-3
Oracle Internet Directory の問題点 .....	6-4
特定のプロトコル・サーバーでの Oracle Files 固有のパスワードの使用 .....	6-4
Oracle Internet Directory レプリケーション・サーバーを使用した Oracle Internet Directory の変更ログの クリーンアップ .....	6-4
クライアント固有の問題点 .....	6-5
Oracle FileSync ユーティリティ .....	6-5
ドキュメントの問題点 .....	6-5
NFS での Oracle Files の使用方法 .....	6-5
NFS サーバーの構成 .....	6-5
既知の問題 .....	6-10
構成上の不具合 .....	6-10

管理上の不具合 .....	6-10
NFS の不具合 .....	6-11
AFP の不具合 .....	6-12
Oracle Files の一般的な不具合 .....	6-12
HTTP の不具合 .....	6-13
Windows / SMB / 印刷サービスの不具合 .....	6-13
Oracle FileSync の不具合 .....	6-14







---

# はじめに

このドキュメントは、Oracle Collaboration Suite リリース 1 (9.0.3.0.1) に付属するリリース・ノートです。

このドキュメントには、マニュアルに記載されている情報を補足するまたは置き換える内容が含まれています。参考情報として、次のドキュメントも参照してください。

- 『Oracle9i Application Server for HP 9000 Series HP-UX リリースノート』
- 『Oracle9i Application Server プラットフォーム共通 リリースノート』

これらのドキュメントは、以下の「最新情報の入手について」で紹介されている OTN-J (Oracle Technology Network Japan) で入手できます。

## リリース・ノートの構成について

このリリース・ノートの第 2 章以降は英語リリース・ノートの翻訳版です。日本語環境固有の情報については、第 1 章を参照してください。

## マニュアルに記載されている名称について

Oracle Collaboration Suite 関連マニュアルは、英語版を翻訳しているため、マニュアル中で参照されている情報には、日本では提供されていないものも含まれます。

- インターネット URL
- マニュアル名
- ソフトウェア名

## 最新情報の入手について

日本オラクルでは、インターネット開発者向けのあらゆる技術リソースを、24 時間 365 日提供するコミュニティ・サイト OTN-J (Oracle Technology Network Japan) を運営しています。OTN-J では、最新の技術情報、オンライン・マニュアル、ソフトウェア・コンポーネントなどを、無料で入手できます。

<http://otn.oracle.co.jp/>



---

## 日本語環境での使用上の注意

この章では、以下の項目について説明します。

- [Oracle Collaboration Suite 全般](#)
- [Oracle Email](#)
- [Oracle Files](#)
- [Oracle Internet Directory と Oracle Single Sign-on](#)
- [Oracle HTTP Server](#)

## Oracle Collaboration Suite 全般

ここでは、以下の項目について説明します。

- [サポートされないコンポーネントについて](#)
- [パッチの適用について](#)
- [Oracle9iAS Infrastructure について](#)
- [Oracle Collaboration Suite Information Storage について](#)
- [動作要件について](#)
- [Oracle Real Application Clusters 対応について](#)
- [ユーザー名の制限事項](#)
- [Oracle Collaboration Suite ポートレットのインストールについて](#)
- [Web インタフェースへのログイン時に Oracle SSO Warning が発生する問題について](#)
- [ドキュメントの訂正と補足](#)

## サポートされないコンポーネントについて

本リリースの Oracle Collaboration Suite では次のコンポーネントはサポート対象外です。

- Oracle Calendar
- Oracle Voicemail & Fax
- Oracle Wireless & Voice
- Oracle Collaboration Suite Search (Oracle Ultra Search)

## パッチの適用について

本リリースの Oracle Collaboration Suite では、製品出荷時点における既知の不具合を改善するための複数の個別パッチとパッチセットが提供されています。これらのパッチには重要な修正が含まれているため必ず適用してください。

パッチは Oracle Collaboration Suite Release 1 (9.0.3) Update Kit CD-ROM に含まれています。

パッチ番号 (Patch#xxxxxxx) は Update Kit CD-ROM 内のフォルダ名に対応しています。

例：Patch#1234567 は、Update Kit CD-ROM 内の P1234567 フォルダに含まれています。

製品ドキュメントには、個別にこれらのパッチに関する記述が記載されている場合がありますが、以下の手順に従って適用することで必要なパッチをすべて適用することができます。

パッチセットの適用方法については、『Oracle Collaboration Suite パッチセット for HP 9000 Series HP-UX および Linux Intel リリース・ノート』を参照してください。個別パッチの適用方法については、各パッチの zip ファイル内にある README.txt を参照してください。

1. Oracle Collaboration Suite をインストールし、必要なコンポーネントを構成します。
2. Patch#2525674 (MANDATORY UM OID PATCH FOR 9.0.3)  
Oracle Email を構成した場合のみ、Middle-Tier の Oracle ホームにて適用します。Oracle Email を構成した Middle-Tier の数には関係なく 1 回だけ適用します。
3. すべての Oracle ホームで動作している Oracle Collaboration Suite プロセスをすべて停止します。停止は、Mid-Tier、Information Storage、Infrastructure の順番で行う必要があります。
4. Patch#2190328 (IAS: AUTO AUTHENTICATION RETURNS TRUE ON SOLARIS WHEN OID SSLSERVICE TURNED ON)  
Infrastructure の Oracle ホームで適用します。
5. Patch#2514005 (CRASH IN KPURST())  
Infrastructure の Oracle ホームで適用します。

6. Patch#2403347 (MARCONI: MEMORY LEAK IN CTX\_DDL.SYNC\_INDEX)  
Information Storage の Oracle ホームで適用します。
7. Infrastructure の Oracle Collaboration Suite プロセスを起動します。
8. Patch#2678208 (Oracle Collaboration Suite Patch Set 1 (9.0.3.1) for HP 9000 Series HP-UX)  
『Oracle Collaboration Suite パッチセットリリース・ノート』の内容に従ってパッチセットを適用します。
9. Patch#2712659 (PERF IMPROVEMENT CHANGES FOR QUERIES WITH PLSQL TABLES)  
Oracle Email を構成した場合のみ、Middle-Tier の Oracle ホームで適用します。すべてのメールストア・データベースに対して実行します。
10. Patch#2725783 (SUMMARY BUG FOR WEBMAIL MINI PATCH 5)  
Oracle Email を構成した場合のみ、Oracle Email を構成しているすべての Middle-Tier Oracle ホームに適用します。
11. Patch#2634850 (NLS:OC4J REJECT WEBFOLDER REQUEST TO UPLOAD MULTIBYTE FILENAME INCLUDING 5C)  
すべての Middle-Tier Oracle ホームに適用します。
12. Patch#2805941 (FILES 9.0.3.3.0 PATCHSET TRACKING BUG FOR OCS V1 RELEASE)  
Oracle Files を構成した場合に限り、Oracle Files を構成しているすべての Middle-Tier Oracle ホームに適用します。
13. Oracle Collaboration Suite の各 Oracle ホームで必要なプロセスを起動します。

## Oracle9iAS Infrastructure について

本リリースの Oracle Collaboration Suite でサポートされるのは、Oracle Collaboration Suite CD-Pack に付属の Oracle9iAS Infrastructure のみです。

## Oracle Collaboration Suite Information Storage について

本リリースの Oracle Collaboration Suite でサポートされるのは、Oracle Collaboration Suite CD-Pack に付属の Oracle Collaboration Suite Information Storage のみです。

## 動作要件について

Oracle Collaboration Suite の動作要件に関する最新情報は、日本オラクルのホームページの製品情報ページにあるシステム要件を参照してください。

## Oracle Real Application Clusters 対応について

Oracle Collaboration Suite の Oracle Real Application Clusters 対応に関する最新情報については、日本オラクルのホームページの製品情報にあるシステム要件ページを参照してください。

## ユーザー名の制限事項

Oracle Collaboration Suite のユーザー名にマルチバイト文字を使用することはできません。

## Oracle Collaboration Suite ポートレットのインストールについて

『Oracle Collaboration Suite 管理者ガイド』の第 2 章「ユーザー・グループ、ユーザー・ホームページおよび管理ページのインストール」に説明のある ocsinstall.sh スクリプトの実行は、すべてのパッチ適用後に実施してください。

## Web インタフェースへのログイン時に Oracle SSO Warning が発生する問題について

一部のブラウザでは、Oracle Collaboration Suite の Web インタフェースにログインする場合に、Oracle SSO Warning が発生することがあります。この場合、Oracle9iAS Single Sign-On のパートナ・アプリケーションのポート番号を、Web Cache のポート番号に変更してください。変更方法は以下のとおりです。

1. ブラウザで以下の URL を指定して、Oracle9iAS Single Sign-On のホームページを開きます。  
`http://<Infrastructure ホスト名>:<ポート番号>/pls/orasso`
2. 「ログイン」をクリックし、Oracle9iAS Single Sign-On の管理者でログインします。  
デフォルトの管理者名は `orcladmin` で、パスワードは `ias_admin` のパスワードと同じです。
3. 「SSO サーバー管理」をクリックします。
4. 「パートナ・アプリケーションの管理」をクリックします。
5. 「パートナ・アプリケーションの編集 / 削除」セクションから、該当する Middle-tier アプリケーションの「編集」アイコンをクリックします。
6. 以下の URL のポート番号を、Web Cache のポート番号に変更します。
  - ホーム URL
  - 成功 URL
  - ログアウト URL
7. 「適用」ボタンをクリックし、「OK」ボタンをクリックします。

## ドキュメントの訂正と補足

『Oracle Collaboration Suite インストレーション・ガイド』に記載されているメモリー要件（512MB）は、3 ノード構成にした場合の各マシンに対する最低要件です。

## Oracle Email

ここでは、以下の項目について説明します。

- [Oracle Email SDK について](#)
- [Oracle Email Migration Tool について](#)
- [マルチバイト文字の使用制限について](#)
- [Oracle Email Web インタフェースの言語設定について](#)
- [Web インタフェースの制限事項について](#)
- [Web インタフェースにおける Netscape Navigator での制限事項](#)
- [IMAP サーチの制限](#)
- [プロトコル・サーバー管理画面のブラウザ操作について](#)
- [tnslsnr コマンドの -user、-group 引数について](#)

## Oracle Email SDK について

Oracle Email SDK (Software Development Kit) はサポート対象外です。

## Oracle Email Migration Tool について

本リリースでは、Oracle Email Migration Tool はサポート対象外です。

## マルチバイト文字の使用制限について

本リリースの Oracle Email では、以下のマルチバイト文字の使用に関する制限事項があります。

- マルチバイト文字を含むメール・アドレスには対応していません。
- 自動返信メッセージにマルチバイト文字を使用することはできません。
- 自動返信を設定している場合、マルチバイトのサブジェクトを持つメッセージに対する自動返信メッセージのサブジェクトが文字化けします。
- メーリング・リストの紹介文や招待文にマルチバイト文字を使用することはできません。
- フィルタで「通知メールを以下に送信する」を設定した場合、通知対象メッセージのサブジェクトにマルチバイト文字が含まれている場合、通知メール内のサブジェクトが文字化けします。

## Oracle Email Web インタフェースの言語設定について

Oracle Email Web インタフェースの言語設定は、シングル・サインオン時に選択した言語により決定されます。

## Web インタフェースの制限事項について

本リリースの Oracle Email Web インタフェースでは、次の制限事項があります。

- Web インタフェースを Oracle Email 以外のメール・サーバー用クライアントとして使用することはできません。
- ボイス・メールと Fax 機能は使用できません。
- 管理者によるユーザーの自動返信設定の解除ができません。自動返信の解除は、ユーザー自身が行う必要があります。
- 管理者によるユーザーの転送設定は使用できません。設定を行った場合、転送解除ができなくなります。
- 管理者用オンライン・ヘルプは未翻訳です。
- Web インタフェースを使用してメッセージを送信する場合、キャラクタセットは UTF-8 固定です。

- TIMEZONE が正しく設定されません。このため、メッセージ一覧の日付フィールドはグリニッジ時間で表示されます。
- 一部のブラウザでは、メッセージ一覧におけるメッセージの並び替えで異常終了する場合があります。
- Netscape Messenger から送信されたメッセージのサブジェクトが正しく表示されない場合があります。
- リッチ・テキスト・モードでのメッセージ編集時、日本語のフォントは選択できません。
- 一部のブラウザでは、リッチ・テキスト・モードでのメッセージの編集、ならびに HTML 形式の署名が使用できません。
- フィルタ設定の「SMS 通知を送信する」はサポート対象外です。

## Web インタフェースにおける Netscape Navigator での制限事項

- 日本語文字列が正しく表示されない場合があります。この場合、次のように設定を変更することで回避できます。
  1. 「編集」メニューから「設定」を選択します。
  2. カテゴリ欄の「表示」ツリーから「フォント」を選択します。
  3. 右側の設定項目で「ドキュメント指定のフォントを無視して、設定したフォントを使用」を選択します。
  4. 「OK」をクリックして設定を保存し、再度アクセスします。
- Netscape Navigator では、ポインティング・デバイスをボタンやアイコン上に移動した時に表示されるパルーン・ヘルプ内の日本語文字列が正しく表示されないことがあります。
- マルチバイト文字を含む名称を持つファイルを添付できない場合があります。

## IMAP サーチの制限

IMAP 対応の一部の Email クライアント・ソフトウェアでは、IMAP サーチ・コマンドを使用して、IMAP サーバー上のメッセージ全文検索を行います。本リリースの Oracle Email では、日本語を指定した IMAP サーチ・コマンドは使用できません。

## プロトコル・サーバー管理画面のブラウザ操作について

Oracle Enterprise Manager Web Site の Oracle Email プロトコル・サーバー管理画面の一部が表示されない場合や、値の入力ができない場合があります。この問題はブラウザの言語設定を「英語」に設定することで回避できます。

## tnslsnr コマンドの -user、-group 引数について

『Oracle Email 管理者ガイドリリース 9.0.3』の 2-18 ページの「2 スタートガイド」、「中間層のためのリスナーの確認および起動」で説明されている tnslnsr コマンドの -user ならびに -group 引数は、HP-UX 環境では使用できません。



## Oracle Files

ここでは、以下の項目について説明します。

- [レビュー・プロセス機能について](#)
- [SMTP サーバーの指定について](#)
- [Oracle Enterprise Manager Web Site での Oracle Files ドメインの表示について](#)
- [Oracle Files 起動 / 停止の制限について](#)
- [OID からプロビジョニングされる Oracle Files ユーザーについて](#)
- [Web ユーザ・インタフェース以外のプロトコルでログインできない場合について](#)
- [アーカイブ・ファイルの格納に BFILE を使用する場合の注意事項](#)
- [Oracle Files Web インタフェースでの日付フォーマットのヒントについて](#)
- [Web ブラウザのステータス・バーにおける文字化けについて](#)
- [Netscape Navigator での制限事項](#)
- [メール送信機能の制限](#)
- [自動送信メールの DATE ヘッダについて](#)
- [クォータ追加要求メールの内容について](#)
- [ファイル圧縮 / 解凍機能の制限について](#)
- [ドキュメントの訂正と補足](#)
- [Files ポートレットの制限について](#)
- [クォータ残量に関係なくコピーできる問題](#)

### レビュー・プロセス機能について

本リリースでは、レビュー・プロセス（Oracle Workflow 連携）機能はサポート対象外です。

### SMTP サーバーの指定について

Oracle Files からの電子メール送信を行うため、Oracle Files Configuration Assistant 実行時に、SMTP サーバーを指定する必要があります。

指定した SMTP サーバーが無効または停止している場合、ワークスペースの作成やクォータ追加要求などの操作時にエラーが発生します。

また、本リリースでは SMTP サーバーのポート番号は標準の 25 である必要があります。25 以外のポートを使用する SMTP サーバーは利用できません。

### Oracle Enterprise Manager Web Site での Oracle Files ドメインの表示について

Oracle Files Configuration Assistant による構成終了直後は、Oracle Enterprise Manager Web Site に Oracle Files ドメインが表示されません。

Oracle Files をインストールした Middle-Tier の Oracle ホームで以下のコマンドを実行し、Oracle Enterprise Manager Web Site を再起動する必要があります。

```
$ORACLE_HOME/bin/emctl stop  
$ORACLE_HOME/bin/emctl start
```

### Oracle Files 起動 / 停止の制限について

Oracle9iAS Infrastructure と Oracle Collaboration Suite Middle-Tier を同一マシンにインストールした場合、Oracle Enterprise Manager Web Site から Oracle Files ドメインおよび各ノードの起動／停止を行うことはできません。

## OID からプロビジョニングされる Oracle Files ユーザーについて

FilesOidUserSynchronizationAgent は、OID サブスクライバ内のすべてのユーザー・エントリを Oracle Files にプロビジョニングします。このため、Oracle Files 上には他のコンポーネントの管理者ユーザー (orcladmin や PORTAL など) も作成されます。これらのユーザーを利用しない場合は、サブスクライバ管理者で Web インタフェースにログインし、ユーザーを無効化してください。

## Web ユーザ・インタフェース以外のプロトコルでログインできない場合について

次に示す URL にアクセスし、シングル・サインオン・パスワード、ならびに必要なに応じて Files 固有パスワードの入力を行ってください。

`http://<Middle-Tier ホスト名>:<ポート番号>/files/app/ProtocolAccess`

## アーカイブ・ファイルの格納に BFILE を使用する場合の注意事項

- Web インタフェースの検索結果画面から BFILE にアーカイブされたファイルを BLOB に戻す（リストア）する場合、「コピー」と「移動」では内部動作は次のように異なります。  
コピーを実行した場合：ファイルの実体を BFILE から BLOB に即座にコピーします。  
移動を実行した場合：ファイルに変更が加えられた時に、実体を BFILE から BLOB にコピーします。
- アーカイブ・ファイルを BFILE にエージングする場合、ファイルが Oracle Text により索引付けされる前に BFILE に変換された場合は全文検索対象にすることはできません。
- アーカイブ・ファイルに対する「ページ」操作では、BFILE 変換されたファイルの実体は削除されません。

## Oracle Files Web インタフェースでの日付フォーマットのヒントについて

Web インタフェース上で日付フォーマットが ""aa/nn/jj"" と表示される部分がありますが、ユーザー・プロファイルの言語設定を日本語に設定している場合、""yy/mm/dd"" の誤りです。

## Web ブラウザのステータス・バーにおける文字化けについて

Web インタフェースでファイル名に日本語が含まれたファイルをマウスでポイントした際、ブラウザのステータス・バーに表示されるファイル名が文字化けします。これは UTF-8 文字コードの文字列を正しく表示できないというブラウザ側の問題であり、Oracle Files の動作には影響ありません。

## Netscape Navigator での制限事項

- 日本語文字列が正しく表示されない場合があります。この場合、次のように設定を変更することで回避できます。
  1. 「編集」メニューから「設定」を選択します。
  2. カテゴリ欄の「表示」ツリーから「フォント」を選択します。
  3. 右側の設定項目で「ドキュメント指定のフォントを無視して、設定したフォントを使用」を選択します。
  4. 「OK」をクリックして設定を保存し、再度アクセスします。
- Netscape Navigator では、ポインティング・デバイスをボタンやアイコン上に移動した時に表示されるバールーン・ヘルプ内の日本語文字列が正しく表示されないことがあります。
- Netscape Navigator では、表示結果の並べ替えを正しく行えない場合があります。
- Netscape Navigator では、一部のテキストボックスにマルチバイト文字を入力することができません。
- Netscape Navigator では、名前にマルチバイト文字を使用したファイルをアップロードできない場合があります。

## メール送信機能の制限

Oracle Files の Web インタフェースのメール送信機能には、以下の制限があります。

- CC に指定したアドレスは処理されません。
- BCC に指定したアドレスは、CC として処理されます。
- マルチバイト文字列をファイル名に含むファイルの URL をメール送信すると、マルチバイト文字列は ASCII 文字列に変換されます。

## 自動送信メールの DATE ヘッダについて

Oracle Files が自動送信するメールには、DATE ヘッダが含まれません。

## クォータ追加要求メールの内容について

サブスクライバ管理者が受信するクォータ追加要求メールに記載されているクォータ・サイズは、追加サイズではなく追加後のサイズです。

たとえば、50MB 割り当てられていた所に更に 100MB リクエストすると、サブスクライバ管理者には「ユーザー xxx から、150MB のクォータ追加要求がありました。現在のクォータは 50MB です。」というメールが届きます。

## ファイル圧縮 / 解凍機能の制限について

本リリースの Oracle Files では、ファイル名にマルチバイト文字列が使用されている場合、圧縮 / 解凍の機能を利用することはできません。

## ドキュメントの訂正と補足

- 『Oracle Files 管理者ガイド』の第 3 章「Oracle Files のバルク管理ツール」に記載されている XML ファイルには、以下が欠落しています。
  - トップレベルタグ (<users> および <workspaces>)
  - DTD の最後の ” ]> ”
- サブスクライバ管理者のオンライン・ヘルプには「ユーザー作成」の項目がありますが、これはサブスクライバ管理者のタスクではありません。ユーザーの作成は、FilesOidUserSynchronizationAgent が行います。

## Files ポートレットの制限について

Files ポートレットにおいて、マルチバイト文字を使用した検索は動作しません。

## クォータ残量に関係なくコピーできる問題

Web インタフェースや WebDAV プロトコルを介して Oracle Files 上のワークスペース ( フォルダ ) 間でファイル・コピーを行う場合、コピー先のクォータが超過しているにも関わらず、コピーが完了する場合があります。

## Oracle Internet Directory と Oracle Single Sign-on

ここでは、以下の項目について説明します。

- [LDIF ファイル作成時の注意事項](#)
- [Single Sign-on ユーザー情報における画像の登録について](#)
- [DAS からのユーザーの登録 / 編集についての注意点](#)
- [ORASSO のランゲージ・インストールができない問題について](#)

### LDIF ファイル作成時の注意事項

LDIF ファイル作成時には、余分な空白が行末に含まれないようにしてください。行末に余分な空白が入ったファイルを使用するとエントリのロードに失敗する場合があります。

### Single Sign-on ユーザー情報における画像の登録について

現在のリリースでは、Single Sign-On ユーザーの顔写真データを登録することはできません。Oracle Internet Directory Delegated Administration Service のアップロード機能（ユーザーの編集画面における Photograph フィールド）の使用はサポート対象外です。

### DAS からのユーザーの登録 / 編集についての注意点

DAS の Internet Directory のユーザーの登録 / 編集ページにおいて、リソース・アクセス情報の“作成”あるいは“編集”から戻るといくつかの項目がリセットされます。

リソース・アクセス情報の設定を行う際は、ユーザー項目への入力を後に行ってください。

### ORASSO のランゲージ・インストールができない問題について

ossoca.jar を使用して SSO にランゲージ・インストールを行う際、Java エラーが発生します。loadlang.csh と langssso.csh を実行することによりこの問題を回避できます。

なおここで、\$ORACLE\_HOME は SSO スキーマを格納したデータベースの Oracle ホーム・ディレクトリです。

- \$ORACLE\_HOME/sso/bin/loadlang.csh のオプション

\$1: 日本語の場合 ja を指定  
\$2: sqlldr のパス  
\$3: SSO スキーマのユーザ名とパスワード  
\$4: SSO スキーマが存在するホスト名  
\$5: SSO スキーマを含むデータベースのリスニング・ポート  
\$6: SSO スキーマを含むデータベースの SID  
\$7: リソースのコントロール・ファイル

例：

```
$ORACLE_HOME/sso/bin/loadlang.csh ja $ORACLE_HOME/bin/sqlldr  
orasso/password host01 1521 iasdb $ORACLE_HOME/sso/nlsres/ctl/ja/wwcja.ctl
```

- \$ORACLE\_HOME/sso/bin/langssso.csh のオプション

\$1: 日本語の場合 ja を指定  
\$2: sqlplus のパス  
\$3: SSO スキーマのユーザ名とパスワード  
\$4: SSO スキーマが存在するホスト名  
\$5: SSO スキーマを含むデータベースのリスニング・ポート  
\$6: SSO スキーマを含むデータベースの SID  
\$7: リソースのコントロール・ファイル  
\$8: 日本語の場合 ja を指定  
\$9: その言語を利用する場合は 1 を指定

**例 :**

```
$ORACLE_HOME/sso/bin/langsso.csh ja $ORACLE_HOME/bin/sqlplus  
orasso/password host01 1521 iasdb  
$ORACLE_HOME/sso/admin/plsql/nlsres/langinst.sql ja 1
```

## Oracle HTTP Server

ここでは、以下の項目について説明します。

- [DAD のデフォルト・ページの設定の必要性](#)
- [DAD 設定時ブラウザ画面が空白になる問題について](#)

### DAD のデフォルト・ページの設定の必要性

mod\_plsql の Database Access Descriptor (DAD) の設定でデフォルト・ページ (PlsqlDefaultPage) に値が指定されていない場合、Internet Explorer からデフォルト・ページへアクセスを行うと大量のリクエストがサーバに送信されます。

この現象を回避するために、デフォルト・ページが不要な場合も、適当なプロシージャ名をデフォルト・ページの値として指定してください。

例えば `page_not_found` という値を指定します。

Oracle HTTP Server 再起動時にプロセスのメモリ使用量が増加する Oracle HTTP Server の再起動を行うと、httpd (Apache.exe) プロセスのメモリ使用量が増加します。

再起動とは以下の操作を意味します。

- dcmctl コマンド使用時  
`dcmctl restart -i <instance_name> -ct ohs`
- Oracle Enterprise Manager Web Site からの「再起動」
  - a. UNIX プラットフォームの場合：  
対象となるプロセスは、httpd の親プロセス及び子プロセスの全てとなります。増加のタイミングは再起動時であり、運用中の増加は本現象には該当しません。
  - b. Windows プラットフォームの場合：  
監視用プロセスとして起動している Apache.exe のメモリ使用量が増加します。restart オプションで再起動されるリクエスト処理用プロセスの Apache.exe のメモリ使用量は増加しません。増加のタイミングは再起動時であり、運用中の増加は本現象には該当しません。

上記問題を回避するには、Oracle HTTP Server を停止した後、起動するようにしてください。

- dcmctl コマンド使用時  
`dcmctl stop -i <instance_name> -ct ohs`  
`dcmctl start -i <instance_name> -ct ohs`
- Oracle Enterprise Manager Web Site で「停止」。停止を確認した後に「起動」する。

### DAD 設定時ブラウザ画面が空白になる問題について

Internet Explorer を利用して OEM Web Site より DAD の新規作成や既存 DAD の詳細表示を行った場合、ブラウザ上に何も表示されない現象が発生する場合があります。

この問題を回避するためには、以下の対処を行ってください。

1. 現在の dadWiz.jsp をバックアップします。
  - a. Unix プラットフォームの場合：  
`cd $ORACLE_HOME/sysman/webapps/emd/ias/oracle_portal`  
`cp -p dadWiz.jsp dadWiz.jsp.original`
  - b. Windows プラットフォームの場合：  
(ここでは ORACLE\_HOME が C:\Oracle\ias902 であると仮定します)  
`SET ORACLE_HOME=C:\Oracle\ias902`  
`cd /d %ORACLE_HOME%\sysman\webapps\emd\ias\oracle_portal`  
`copy dadWiz.jsp dadWiz.jsp.original`

2. dadWiz.jsp を以下のように編集します。

dadWiz.jsp の 25 行目の `<html>` の前に以下の 4 行を追加します。

```
<%
response.setContentType("text/html");
response.setLocale(request.getLocale());
%>
```

dadWiz.jsp は以下のパスに存在します。

- a. Unix プラットフォームの場合：

```
$ORACLE_HOME/sysman/webapps/emd/ias/oracle_portal/dadWiz.jsp
```

- b. Windows プラットフォームの場合：

```
%ORACLE_HOME%\sysman\webapps\emd\ias\oracle_portal\dadWiz.jsp
```

編集例：

変更前

```
(... 略 ...)
<%@ taglib uri="http://xmlns.oracle.com/oem" prefix="oem" %>
<html>
(... 略 ...)
```

変更後

```
(... 略 ...)
<%@ taglib uri="http://xmlns.oracle.com/oem" prefix="oem" %>
<%
response.setContentType("text/html");
response.setLocale(request.getLocale());
%>
<html>
(... 略 ...)
```





---

# Oracle Collaboration Suite リリース・ノート

原典情報：B10232-01 Oracle Collaboration Suite Release Notes, Release 1, Version 9.0.3 for HP-UX

この章では、以下の項目について説明します。

- [このマニュアルの目的](#)
- [コンポーネントのリリース・ノート](#)
- [オペレーティング・システム要件](#)
- [インストールの問題](#)
- [管理およびセキュリティの問題](#)
- [コンポーネントの問題](#)
- [ドキュメントの誤記](#)

## このマニュアルの目的

このマニュアルでは、Oracle Collaboration Suite リリース 1 (9.0.3) の機能について補足説明します。  
内容は次のとおりです。

- Oracle Collaboration Suite の実行に必要なオペレーティング・システムのパッチ
- インストールおよび移行の問題および解決策
- 一般的な管理およびセキュリティの問題および解決策
- ドキュメント・ライブラリ内のマニュアルの更新情報

このマニュアルは、製品の主要なリリース・ノートであるため、次の項に示すコンポーネントのリリース・ノートを読む前に、このマニュアルの内容を確認しておくことをお勧めします。

## コンポーネントのリリース・ノート

固有の Oracle Collaboration Suite コンポーネントの最新情報については、以降に示すコンポーネント固有のリリース・ノートを参照してください。

# オペレーティング・システム要件

## 必須 HP パッチ

パッチのリストについては、『Oracle Collaboration Suite for HP 9000 Series HP-UX, Linux Intel, and Solaris Operating System (SPARC) インストレーション・ガイド』を参照してください。

**注意：** 次を示すパッチには、インストールする必要がある依存コンポーネント・パッチを含むものがあります。各パッチのダウンロード Web ページに移動する場合は、依存コンポーネント・リンクをクリックし、必要に応じて依存コンポーネント・パッチをインストールしてください。

## Oracle9iAS Infrastructure および Oracle Collaboration Suite 用必須パッチ

表 2-1 に、Oracle9iAS Infrastructure および Oracle Collaboration Suite のインストール用に、HP にインストールする必要があるオペレーティング・システムのパッチを示します。

**表 2-1 Oracle9iAS Infrastructure および Oracle Collaboration Suite**

パッチ	クラスタウェア・パッチ
■ December 2000 パッチ・バンドル	■ MC/ServiceGuard
■ PHCO_23092	■ 11.09 OPS Edition
■ PHCO_23770	■ PHCO_23919
■ PHCO_23792	
■ PHCO_23963	
■ PHCO_24148	
■ PHKL_18543	
■ PHKL_23226	
■ PHKL_23226	
■ PHKL_23409	
■ PHKL_24826	
■ PHKL_24943	
■ PHKL_24971	
■ PHKL_25188	
■ PHNE_21731	
■ PHNE_23456	
■ PHNE_23833	
■ PHSS_17535	
■ PHSS_23377	
■ PHSS_23440	
■ PHSS_23546	
■ PHSS_23800	
■ PHSS_23823	

## Oracle Collaboration Suite Information Storage 用の必須 HP パッチ

表 2-2 に、Oracle Collaboration Suite Information Storage のインストール用に、HP にインストールする必要があるオペレーティング・システムのパッチを示します。

表 2-2 Oracle Collaboration Suite Information Storage

パッチ	クラスタウェア・パッチ
■ September 2001 Quality Pack	■ MC/ServiceGuard A.11.13 OPS Edition
■ PHCO_23792	■ PHSS_25915
■ PHCO_24148	■ PHNE_26177
<b>注意：</b> Oracle Real Application Clusters 環境で Oracle インスタンス間のインスタンス間通信に lowfat プロトコルを使用する場合に必須です。 lowfat プロトコルは、hyperfabric インターコネクトという特別なハードウェアに実装された、待機時間の少ないまたは高帯域幅プロトコルです。 詳細は、PHNE_26177 に含まれているドキュメントを参照してください。	
■ PHKL_24268	
■ PHKL_24729	
■ PHKL_25475	
■ PHKL_25525	
■ PHNE_24715	
■ PHSS_23670	
■ PHSS_24301	
■ PHSS_24303	
■ PHSS_24627	
■ PHSS_22868	

## 既知の問題および制限事項

不正なパスワードを入力すると、インストールがハングアップします (Bug#257443)

Oracle Collaboration Suite Middle-Tier のインストール中に、インストーラが Infrastructure のユーザー名およびパスワードの入力を求めるプロンプトを表示します。不正なパスワードが入力された場合、インストールはハングアップします。

## インストールの問題

この章では、インストールと移行の問題およびそれらの解決策について説明します。この章の内容は次のとおりです。

- [インストールの問題](#)
- [インストール後の問題](#)
- [削除の問題](#)

## インストールの問題

この項では、次のインストールの問題について説明します。

- [Infrastructure](#)
- [Oracle Internet Directory](#)
- [Single Sign-On](#)
- [Oracle9iAS Metadata Repository](#)
- [ulimit およびスワップ・ファイルの設定](#)
- [ドメイン名](#)
- [その他](#)

### Infrastructure

**Oracle Collaboration Suite Middle-Tier および Oracle9iAS Infrastructure のインストール後における、ホスト名および IP アドレスの変更の非サポート** Oracle Collaboration Suite Middle-Tier および Oracle9iAS Infrastructure のインストール後は、ホスト名および IP アドレスを変更できません。

**同一の Infrastructure インスタンスへの複数のインストール・タイプの入力による Portal の上書き** Web Cache に関連する複数の Oracle Collaboration Suite Middle-Tier のインストール・エントリは、Middle-Tier のインストールを実行するたびに、Portal インスタンスで上書きされます。

この問題を解決するには、次の手順を実行して、Oracle9iAS インスタンス内の Portal 用の Web Cache を使用不可にします。

1. Portal ランタイムにログインします。
2. 「ビルダー」をクリックして、Portal の設計時のホーム・ページを開きます。
3. 「管理」をクリックします。
4. サービス・ポートレット内の「グローバル設定」をクリックします。
5. 「キャッシュ」をクリックします。
6. 「Web Cache と Portal コンテンツ・キャッシュに対応させる」チェックボックスのチェックを外して、Portal コンテンツのキャッシュを無効にします。
7. 「適用」および「OK」をクリックします。

Middle-Tier をインストールするたびに、Portal ユーザーが Oracle Internet Directory (OID) から削除され、再作成されることに注意してください。Portal ユーザーのパスワードは、最後のインストール時の Middle-Tier インスタンス名になります。

**複数の Infrastructure に基づいた配置** Oracle Collaboration Suite は、複数の Infrastructure のインストールをサポートします。最初の（プライマリ）Infrastructure のインストールには、SSO、Oracle Internet Directory、Metadata Repository および Oracle Management Server（オプション）を含む必要があります。後続の（セカンダリ）Infrastructure のインストールには、次の注意事項があります。

- プライマリ・インストールの SSO を指す必要があります。
- プライマリ・インストールの Oracle Internet Directory を指す必要があります。
- 独自の Metadata Repository を含む必要があります。

- オプションで Oracle Management Server を含めることができます。

セカンダリ・インストールの目的は、プライマリの Metadata Repository に対する負荷が過剰な場合に、追加の Metadata Repository を提供することです。

セカンダリ Infrastructure をインストールするには、「カスタム・インストール」を選択し、「Oracle9iAS Metadata Repository」および「Oracle Management Server」（オプション）を選択します。SSO および Oracle Internet Directory の情報を入力するためのプロンプトが表示されます。ここでは、プライマリ Infrastructure の情報を提供します。

セカンダリ Infrastructure の後にインストールされた Middle-Tier アプリケーション・サーバーは、そのセカンダリ Infrastructure を使用できます。これは、既存の Middle-Tier アプリケーション・サーバーを変更して、セカンダリ Infrastructure を使用できないことを意味します。

Middle-Tier でセカンダリ Infrastructure を使用する場合は、インストール時にプライマリ Infrastructure の SSO および Oracle Internet Directory を指定します。使用する Infrastructure の Metadata Repository を指定するためのプロンプトが表示されると、セカンダリ・インストールの Metadata Repository を選択します。

### Oracle9iAS Infrastructure インストール中の動作

---

**注意：** 次の動作は、Infrastructure のインストールのみに該当し、Information Storage には該当しません。

---

コンピュータの Oracle ホーム・ディレクトリに、Oracle9iAS Metadata Repository に必要なデータベース・ファイルを作成するための十分な領域がない場合、それらをインストールする別の場所を選択するためのプロンプトが表示されます。

**Oracle9iAS Infrastructure にインストールを行う場合の依存コンポーネントの起動** 既存の Oracle9iAS Infrastructure に対して Oracle Collaboration Suite をインストールする場合、次の Infrastructure コンポーネントが実行されていることを確認します。

- Oracle9iAS Metadata Repository
- Oracle9iAS Single Sign-On
- Oracle HTTP Server
- Oracle9iAS Containers for J2EE

Oracle9iAS Infrastructure のコンポーネントをインストールしている場合、インストール・プロセスを開始する前に依存コンポーネントが実行されていることを確認します。たとえば、Oracle9iAS Single Sign-On をインストールする前に、Oracle9iAS Metadata Repository、Oracle Internet Directory および Oracle HTTP Server を起動します。

Infrastructure で Oracle HTTP Server が実行されていない場合、インストール中に Infrastructure を使用しようとする、次のエラー・メッセージが表示される場合があります。

ホストとポート番号の検証中にエラーが発生しました。このホストに接続できるかどうかホストとポート番号を検証するか、または新しい値を入力してください。ユーザーの出力文字列のリストは次の通りです。

```
<infra_host>:<port>
```

以下は SSORunning 関数からの戻り値です。

```
INVALID
```

**共通の Infrastructure を使用して同時インストールを実行した場合に発生する可能性があるエラー** 複数の Oracle Collaboration Suite Middle-Tier のインストールを実行する場合は、1 つずつインストールを実行する必要があります。共通の Infrastructure を使用して同時にインストールおよび構成を行うと、OC4J の配置中に障害が発生し、リソースのデッド・ロック・エラーが発生する可能性があります。

**同一のインストーラ・セッションを使用して複数のインストールを実行した場合に発生する可能性があるエラー** Oracle Collaboration Suite または Oracle9iAS Infrastructure のインストールの完了後は、インストーラを終了した後で、Oracle9iAS の別のインスタンスをインストールします。同一のインストーラ・セッションを使用して Oracle9iAS の別のインスタンスをインストールすると、セカンダリ・インスタンス

スで SQLJ、JAZN および Oracle JavaServer Pages アプリケーションに障害が発生し、「URL not found」というエラー・メッセージが表示される場合があります。

**追加の Infrastructure データベースの順次インストールの実行** 既存の Infrastructure が存在し、追加の Infrastructure データベースをインストールする場合、Infrastructure データベースのみのインストールを実行し、既存の SSO および OID に関連付けます。グローバル・データベース名を指定するには、Oracle Universal Installer (OUI) を使用して Oracle Internet Directory およびローカルの oratab ファイルで既存のデータベース名を検索します。その後、次のグローバル・データベース名を連番で指定します。たとえば、iasdb1 および iasdb2 という名前のデータベースを含む既存の Infrastructure が存在する場合は、iasdb3 が次のインストールのグローバル・データベース名に指定されます。この動作は、インストール・プロセス前半のダイアログ・フェーズ中に実行されます。

その後、インストール・プロセスの終盤に、Database Creation Assistant (DBCA) でディレクトリにそのグローバル・データベース名を登録します。これは、識別名 (DN) (cn=iasdb3、cn=oraclecontext など) を作成することによって行われます。この DN には、データベースの情報 (ホスト名、リスナー文字列、リスナー・ポート、Oracle ホームなど) が含まれます。

データベースの新規インストールを実行し、OUI で iasdb3 をグローバル・データベース名に選択したとします。また、DBCA でこのデータベースをディレクトリに登録する前に、別のホストに 2 番目のデータベースのインストールを実行したとします。2 番目のインストールでも、同様にインストーラを使用して iasdb3 をグローバル・データベース名に選択します。これは、2 番目のインストール時に、iasdb3 の DN が、最初のインストールの DBCA によってディレクトリに登録されていないためです。

この場合、2 番目のインストールの DBCA で、ディレクトリ内に同じ DN を持つ別のエントリが検出されても、エラーは通知されません。最初のインストールのエントリは 2 番目のインストールの値で上書きされます。これによって、同じ単純な名前を使用した最初のインストールは失敗します。

この問題を回避するには、追加の Infrastructure データベースのインストールを順次実行します。最初のインストールの完了後、2 番目のインストールを開始します。

**Infrastructure のインストール中の Infrastructure データベースの使用禁止** Infrastructure のインストールが完了するまで、Oracle9iAS の Infrastructure データベースは使用しないでください。インストールがハングアップする可能性があります。

**サービス・エラーおよび NoClassDefFound 例外** Oracle Collaboration Suite または Oracle9iAS

Infrastructure のインストールの完了後、一部のサービスに障害が発生し、service error が表示されます。ターゲットの JSP にアクセスすると、NoClassDefFound 例外が発生します。サーバーを再起動すると、問題が解決します。

アプリケーションを初めてロードする場合は、OC4J クラス・ローダーがライブラリの jar のクラス・バイトをメモリに読み込みます。クラスがインスタンス化されない場合でも (アプリケーションがメモリ内配列のクラスをインスタンス化するため) この動作は実行されます。

JSP ファイルのコンパイルの結果生成されたクラス・ファイルは、動的にロードされます。時間が経過すると、ヒープが一杯になるため、コンパイル済 JSP の新しいクラスは、メモリ配列内への読み込み、およびヒープでのインスタンス化に使用できなくなります。そのため、最上位のクラス・ローダーに障害が発生し、「NoClassDefFound」例外が発生します。後続の検索では、JDK クラス・ローダーの loadClass() 実装セマンティクスによって、以前ロードできなかったクラスは再ロードしないように規定されているため、「OutOfMemoryError」は発生しません。

このエラー (ヒープが一杯) が発生しているかどうかを判別するには、sys\_panama.log で OutOfMemoryErrors の数を確認します。この数は、サーバーが再起動された回数と同じです。

ヒープが一杯になった場合は、instanceName OC4J\_Wireless に対応する OC4J 要素の Java オプション・サブ要素を変更して、VM のヒープ・サイズを増やします。

1. ブラウザで、http://<host>:1810 を入力して、Oracle Enterprise Manager (OEM) にアクセスします。
2. ias\_admin/<インストール時に提供されたパスワード> で Enterprise Manager にログインします。
3. Middle-Tier インスタンスを選択します。
4. 「OC4J\_Wireless」を選択します。「OC4J\_Wireless」画面が表示されます。

5. 「サーバー・プロパティ」（「OC4J\_Wireless」ページの下部にある「インスタンス・プロパティ」の下）を選択し、「サーバー・プロパティ」ページを開きます。コマンドライン・オプションが記載されたページが表示されます。このページには、ヒープ・サイズの設定に使用する「Java オプション」の編集可能なフィールドが含まれます。
6. 「Java オプション」フィールドを使用してヒープ・サイズを設定します。
7. `-noclassgc` オプションを削除します。
8. 「適用」をクリックします。

**参照：**『Oracle9i Application Server パフォーマンス・ガイド』の「OC4J プロセスの JVM ヒープ・サイズの設定」の項を参照してください。

**Infrastructure の「サマリー」画面でのヘルプ情報の欠落** Infrastructure の「サマリー」画面のヘルプ情報が、Oracle Universal Installer に表示されません。ヘルプ画面には次の情報が表示される必要があります。

- Oracle9iAS インストールのホストが Oracle9iAS Infrastructure に関連付けられているかどうか。
- 関連付けられた Oracle9iAS Infrastructure のコンポーネントのホスト名およびポート番号。

## Single Sign-On

**SSO/mod\_osso の登録に失敗した場合に発生する Oracle HTTP Server の起動エラー** インストール中に、Oracle9iAS Infrastructure の Configuration Assistant が Oracle9iAS Single Sign-On Server /mod\_osso の登録に失敗した場合、Oracle HTTP Server は起動しません。この問題を解決するには、次の 2 つのいずれかの操作を行います。

1. Oracle9iAS Single Sign-On Server を使用するアプリケーションをインストールしていない場合は、`ORACLE_HOME/Apache/Apache/conf/httpd.conf` ファイル内の次の行をコメントアウトします。コメントアウトする行の先頭に `#` 文字を追加します。  
  

```
# include ORACLE_HOME/Apache/Apache/conf/httpd.conf/mod_osso.conf
```

  
Oracle Enterprise Manager を使用してファイルを編集します。
2. Oracle9iAS Single Sign-On Server を使用するアプリケーションをインストールしている場合は、SSOregistrar ツールを手動で実行し、有効な `osso.conf` ファイルを生成します。  
  
SSOregistrar が 0（ゼロ）以外の状態に戻るか、またはいくつかのエラーが発生していることを示す例外が発生した場合、`mod_osso` は使用しないでください。`mod_osso` を使用不可にするには、最初のオプションと同様に、`mod_osso` を含む行の先頭に `#` 文字を追加してコメントアウトします。

**Oracle9iAS Web Cache および mod\_osso の使用可能化** Oracle9iAS のインストーラが Oracle9iAS Single Sign-On に `mod_osso` を初期登録している場合、インストーラは Oracle9iAS Web Cache のポート番号ではなく、Oracle HTTP Server のポート番号を含む登録 URL を渡します。インストーラが不正なポート番号を渡したため、Oracle9iAS Web Cache はバイパスされます。

`mod_osso` を正常に動作させるには、Oracle9iAS Web Cache ポートを含む URL を使用して `mod_osso` を再登録します。

**参照：** ホスト名およびポートの変更が Oracle9i Application Server に与える影響（特に `mod_osso` および Oracle9iAS Single Sign-On が受ける影響）の詳細は、『Oracle9i Application Server 管理者ガイド』の「コンポーネント設定の依存性」の章を参照してください。

別の解決策は、SSO パートナを再登録するのではなく、Oracle9iAS Web Cache を停止する方法です。この場合、エントリ・ポイントは Oracle9iAS Web Cache ではなく Oracle HTTP Server になるため、エラーは発生しません。



---

**注意：** Oracle9iAS Web Cache ポートを使用して再登録する前に、前述の解決策を実行できます。また、この解決策を実行する場合は、Oracle HTTP Server ポートとともに入力する必要があります。たとえば、Oracle HTTP Server が 7779 で実行されていて、Oracle9iAS Web Cache が 7778 で実行されている場合は、次の URL を入力する必要があります。

`http://<host.domain>:7779`

---

変更後、Microsoft Internet Explorer でページを更新します。更新しないと、次のエラーが表示される場合があります。

Forbidden

You don't have permission to access /osso\_login\_success on this server.

## Oracle9iAS Metadata Repository

**Oracle9iAS Metadata Repository と他の Oracle データベースの共存** Oracle9iAS Infrastructure の一部としてインストールされた Oracle9iAS Metadata Repository は、既存の Oracle8i データベース リリース 8.1.7 または Oracle9i データベースのいずれかと共存できます。

Oracle9iAS Metadata Repository と既存の Oracle データベースの共存を可能にするには、次の手順を実行します。

1. 既存の Oracle8i データベース リリース 8.1.7 または Oracle9i データベースの管理グループのメンバーであることを確認します。
2. マシンが、Oracle9iAS Metadata Repository のインストールおよび共存に対する次の最小ハードウェア要件を満たしていることを確認します。
  - 6GB のディスク領域
  - 1GB の TMP またはスワップ領域
  - 1GB のメモリー
3. 選択した Oracle9iAS Metadata Repository の Oracle ホーム・ディレクトリが、Oracle8i データベース リリース 8.1.7 および Oracle9i データベースの Oracle ホームと異なっていることを確認します。
4. 既存の Oracle8i データベースの oraHome および oraInventory ディレクトリに対する読み込み、書き込みおよび実行権限が、グループとユーザーの両方に付与されていることを確認します。
5. Oracle8i データベース リリース 8.1.7 と共存させる場合は、既存の Oracle 製品の oraInventory ディレクトリに存在する oui.loc ファイルに対する書き込み権限が、管理グループに付与されていることを確認します。
6. ポートの競合を解決するために、既存の Oracle データベースが Oracle9iAS Metadata Repository のインストール中に実行されていることを確認します。

**参照：** 異なるポート番号の使用については、『Oracle9i Application Server インストール・ガイド』を参照してください。

## ulimit およびスワップ・ファイルの設定

インストールを行う前に、次の ulimit パラメータを設定することをお勧めします。

表 2-3 ulimit パラメータ

パラメータ	推奨値
time	無制限
file	無制限
data	1048576
stack	32768
memory	2045680

表 2-3 ulimit パラメータ

パラメータ	推奨値
coredump	無制限
nofiles	4096
vmemory	4194304

## ドメイン名

**ドメイン名の制限（先頭はアルファベット文字）** ドメインの先頭文字にアルファベット文字ではなく数字が使用されているマシンに Oracle Collaboration Suite および Oracle9iAS Infrastructure をインストールすると、次のエラーが発生し、インストールが失敗します。

無効なデータベース・ドメイン名です。データベース・ドメイン名は、アルファベットで始める必要があります。

ホスト名を指定する場合は、次のことに注意します。

- ドメイン名に空白文字は使用できません。
- 大 / 小文字は区別されません。
- 先頭の文字はアルファベット文字である必要があります。
- 末尾の文字はマイナス記号またはピリオドにできません。
- ゲートウェイとして機能させるホストには、名前の一部に「-GATEWAY」または「-GW」を含める必要があります。インターネット・ゲートウェイとして機能させないホストには、名前の一部に「-GATEWAY」および「-GW」を含めないでください。

**再起動後のドメイン名の変更問題に関する情報** マシンが『Oracle9i Application Server インストレーション・ガイド』にある「インストールの開始」章の「ホスト名ファイル構成」の説明に従って構成されていない場合、インストーラはインストール・プロセスを停止し、次のエラーが発生します。

Your /etc/hosts and other required files are not configured with the domain and the user may make the changes in the required files by following the docs.

ただし、マニュアルまたはインストーラのエラー・メッセージには、変更を加えた後にマシンを再起動する必要があることが記載されていません。Oracle Collaboration Suite をインストールする前にマシンを再起動してください。

再起動が必要であるにもかかわらず、マシンの再起動を選択しない場合でも、インストールは続行されます。ただし、インストール後、ホスト名を変更した後にマシンを再起動すると、Infrastructure および Middle-Tier に次のような問題が発生します。

- Oracle HTTP Server が起動せず、OPMN ログに次のエラーが表示されます。  

```
Syntax error on line 6 of OH/Apache/Apache/conf/mod_osso.conf:
Unable to deobfuscate the SSO server config file,
<ORACLE_HOME>/Apache/Apache/conf/osso/osso.conf, error
Bad padding pattern detected in the last block.
```
- メタデータ・リポジトリ API が動作せず、ほとんどの Middle-Tier コンポーネントが Oracle Internet Directory およびデータベースへの接続に失敗して、次のエラーが発生します。  

```
oracle.ias.repository.schema.SchemaException:Password could not be retrieved
```

再起動後に前述のエラーが発生した場合は、次の手順を実行します。

1. Infrastructure データベースを起動します。
2. Infrastructure の Oracle Internet Directory を起動します。
3. 環境変数 LD\_LIBRARY\_PATH を ORACLE\_HOME/lib に設定します。
4. 次のコマンドを実行し、Oracle Collaboration Suite のパスワードをリセットします。  

```
resetiaspasswd.sh cn=orcladmin orcladminpassword_given ORACLE_HOME
```

5. 次のコマンドを実行し、mod\_osso を再登録します。

```
ORACLE_HOME/jdk/bin/java -jar ORACLE_HOME/sso/lib/ossoreg.jar -site_name
iASInstanceName.FQDN -success_url
http://FQDN:ApachePort#/osso_login_success -cancel_url
http://FQDN:ApachePort# -logout_url
http://FQDN:ApachePort#/osso_logout_success -home_url
http://FQDN:ApachePort# -config_mod_osso TRUE -oracle_home_path
ORACLE_HOME -u root -apache_server_root ORACLE_HOME/Apache/Apache
-config_file ORACLE_HOME/Apache/Apache/conf/osso/osso.conf
-sso_server_version v1.2
```

- ORACLE\_HOME: Oracle ホームの絶対パス
- iASInstanceName: インストール中に指定されたインスタンス名
- FQDN: 完全修飾されたドメイン名 (foo.us.com)
- ApachePort#: Oracle HTTP Server リスニング・ポート

---

**注意：** 前述の手順を実行すると、SSO に追加の Oracle HTTP Server パートナ・アプリケーションが作成されます。このアプリケーションは無視できます。古いアプリケーションがわかっている場合は、SSO ページからそれらのアプリケーションを削除できます。

---

この解決策は、マシンがクラッシュし、Oracle Collaboration Suite のインストールを別のマシンにリストアする必要がある場合に使用できます。この場合、リストアに使用されるマシンには元のマシンと同じホスト名または IP アドレス（あるいはその両方）が指定されているとします。

## その他

**複数ユーザーのインストールに対する指示** ユーザー 1 が ORACLE\_HOME1 (Oracle Enterprise Manager が実行される Oracle ホーム) に Oracle Collaboration Suite をインストールし、ユーザー 2 が ORACLE\_HOME2 に Oracle Collaboration Suite をインストールしようすると、複数の Oracle Collaboration Suite のインストールは同じ OS ユーザーによって実行されることが推奨されているため、インストールは自動的に中止されます。

異なるユーザーが同じホストに複数のインストールを実行する場合は、2 番目のインストールを開始する前に、次のインストール前タスクを実行する必要があります。

1. アクティブな EMD を含む ORACLE\_HOME を検索します。この検索を行うには、/tmp/emtab に ACTIVE\_EMD\_HOME エントリがあるかどうかを確認します。
2. ユーザー 1 として、ORACLE\_HOME1 に ORACLE\_HOME/install/lockdir というディレクトリを作成します。
3. このディレクトリに対する書き込み権限をユーザー 2 に付与します。
4. ユーザー 2 として、2 番目のインストールを開始します。

---

**警告：** 前述の解決策を使用すると、インストールする新しいインスタンスに Oracle Enterprise Manager を使用できなくなります。

---

**インストール前の制限 (Oracle Enterprise Manager Web Site の停止)** Oracle Collaboration Suite インスタンスが含まれ、Oracle Enterprise Manager Web Site が実行されているマシンにインストールを実行する前に、Oracle Enterprise Manager Web Site を停止する必要があります。

Web Site を停止するには、次のコマンドを実行します。

```
ORACLE_HOME/bin/emctl stop
```

**インスタンス名を再利用すると発生するエラー** Infrastructure を使用するインスタンスを削除した場合、後続のインスタンスのインストール時に、削除したインスタンスの名前は再利用できません。

この問題を解決するには、Oracle Internet Directory 内の削除済インスタンスのエントリを手動で削除します。

**インスタンス名の一意性の確認** 1 台のマシンに複数の J2EE および Web Cache をインストールし、これらのインストールに Oracle9iAS Single Sign-On を使用しない場合は、インストール中に、各インスタンスのインスタンス名が一意であることを確認する必要があります。

この問題は、次の場合には発生しません。

- J2EE および Web Cache が Oracle9iAS Single Sign-On を使用する場合
- 他のアプリケーション・サーバーのインストール・タイプをインストールする場合

**16 ビット・カラーでの Oracle Universal Installer の制限** Java 1.1.n 以上のバージョンの Java では、モニター・コンポーネントが 16 色に設定されている場合、Oracle Universal Installer リリース 2.2.0.1.0 は起動されません。これは、16 色に設定されたモニターは、Sun 社が規定する Java 1.1.n 以上の JDK バージョンでサポートされていないためです。

**既知の問題および制限事項** 不正なパスワードを入力すると、インストールがハングアップします (Bug#257443)

Oracle Collaboration Suite Middle-Tier のインストール中に、インストーラが Infrastructure のユーザー名およびパスワードの入力を求めるプロンプトを表示します。不正なパスワードが入力された場合、インストールはハングアップします。

**インストール前の /tmp、TEMP および /var/tmp ディレクトリに対する権限の確認** Oracle Collaboration Suite のインストールを開始する前に、システムの /tmp、TEMP および /var/tmp ディレクトリに対する書き込み権限を持っていることを確認します。

**インストール時に発生する可能性があるスワップ領域の不足エラー** Oracle Collaboration Suite のインストールでは、必要なスワップ領域が存在する場合でも、インストールを続行するためのスワップ領域が不足していると通知される場合があります。

この問題を解決するには、環境変数 TMP の設定を解除して、インストールを再度開始します。

**X サーバーの要件** 任意の CABO/UIX インタフェースを実行するには、画面要素の表示を処理するように、X サーバーを構成する必要があります。Oracle Collaboration Suite をインストールするサーバー・マシン上で、X サーバーが実行されていることを確認します。また、X サーバーを指すように、OC4J インスタンスを構成できます。

OC4J インスタンスを構成するには、次の手順を実行します。

1. `$ORACLE_HOME/opmn/conf/opmn.xml` ファイルを開きます。
2. 関連の OC4J インスタンスを検索し、次のプロパティを確認します。  
`prop name=DISPLAY value=:0.0 /`
3. 値を `host name:0.0` に変更します。この場合の `host name` は、X サーバーが構成済で、実行中であるホストを指します。
4. 変更を保存します。
5. OC4J インスタンスを再起動します。

**HP-UX システムでの Oracle Universal Installer のエラー** HP-UX システムで JDK 拡張機能をコピーすると、Oracle Universal Installer は次のメッセージを表示します。

```
Unable to write to file <ORACLE_HOME>/jdk/jre/lib/ext/US_export_policy.jar
```

このメッセージは、インストール中に指定した JDK ホーム・ディレクトリに JDK 拡張機能がすでにインストールされている場合に表示されます。また、JDK ホーム・ディレクトリの所有者に `JDKHOME/jre/lib/ext` ディレクトリのファイルへの書き込み権限がない場合にも表示されます。

## インストール後の問題

この項では、次のインストール後の問題について説明します。

- 必須の Oracle Email パッチ
- localhost:0 に設定されている環境変数 DISPLAY
- 元の Java Authentication and Authorization Services のレルムの削除
- Oracle Internet Directory の oidstats.sh スクリプトの実行
- Oracle9i Application Server データベース用の spfile の作成
- Oracle スキーマの作成時に NetCA で発生するエラー（ユーザーの DN およびパスワードを入力するためのプロンプトの非表示）

### 必須の Oracle Email パッチ

この必須パッチは、Oracle Collaboration Suite Middle-Tier に適用する必要があります。（Bug#2525674）

次の手順を実行します。

1. Oracle Collaboration Suite Middle-Tier で、emailpatch.ldif ファイルを \$ORACLE\_HOME/oes ディレクトリにコピーします。
2. 次のコマンドを使用して、emailpatch.ldif ファイルを Infrastructure の Oracle Internet Directory にロードします。

```
$ORACLE_HOME/bin/ldapmodify
-Dcn=umadmin,cn=EEmailServerContainer,cn=Products,cn=OracleContext -w
<umadmin_password> -h <oid_hostname> -p <oid_port> -f
$ORACLE_HOME/oes/emailpatch.ldif
```

各オプションは次の内容を示します。

- `umadmin_password` は umadmin ユーザーのパスワードです。
- `oid_hostname` は Infrastructure の Oracle Internet Directory のホスト名です。
- `oid_port` は Infrastructure の Oracle Internet Directory のポート番号です。

パッチは、指定された Infrastructure に 1 回のみ適用します。パッチは、すべての Oracle Collaboration Suite Middle-Tier から実行できます。

### localhost:0 に設定されている環境変数 DISPLAY

インストール時に、`opmn.xml` の環境変数 `DISPLAY` が、デフォルトで `localhost:0` に設定されます。マシンにグラフィックス・カードが設置されていない場合、`opmn.xml` の環境変数を X Virtual Frame Buffer（XVFB）、Virtual Network Computing（VNC）などの仮想フレーム・バッファを指すように設定する必要があります。

### 元の Java Authentication and Authorization Services のレルムの削除

このタスクは、Oracle Internet Directory のインストールの完了後、Oracle Internet Directory 内のデフォルトのサブスクライバを変更した場合にのみ実行する必要があります。

たとえば、デフォルトのサブスクライバが Oracle Internet Directory のインストール時に `dc=us,dc=acme,dc=com` に構成され、インストール後に `dc=acme,dc=com` に変更された場合です。

Oracle Internet Directory に 2 つの Java Authentication and Authorization Services のレルム（`us` と `acme`）が存在するため、この Oracle Internet Directory を指す後続の Oracle9i Application Server のインストールは、Java Authentication and Authorization Services がデフォルトのレルムを認識できないために失敗します。

Java Authentication and Authorization Services がデフォルトのレルムを認識できるようにするには、Oracle Internet Directory から元の Java Authentication and Authorization Services のレルムを削除する必要があります。

Oracle Internet Directory から元の Java Authentication and Authorization Services のレルムを削除するには、次の手順を実行します。

レルム・コンテナの DN は次のとおりです。

```
cn=Realms,cn=JAZNContext,cn=Products,cn=OracleContext
```

このコンテナ内の次のエントリを削除します。

```
cn=us
```

この Oracle Internet Directory に対する後続のすべてのインストールが正常に実行されます。

## Oracle Internet Directory の oidstats.sh スクリプトの実行

新規インストールの最後に、oidstats.sh スクリプトを実行することをお勧めします。実行しない場合、ディレクトリ・サーバーのパフォーマンスが低下する可能性があります。次のコマンドを実行します。

```
$ORACLE_HOME/ldap/admin/oidstats.sh -connect Net_service_name -all -pct  
Percent_of_Data_to_sample
```

Percent\_of\_Data\_to\_sample は、100 などに設定できます。

アップグレードでサーバーのパフォーマンスが低下した場合、oidstats.sh ツールを実行する必要があります。

---

---

**注意：** このスクリプトがタスクを完了する時間は、ディレクトリ・サイズによって異なります。たとえば、100,000 のエントリを含むディレクトリの場合、スクリプトの完了には数時間かかります。

---

---

## Oracle9i Application Server データベース用の spfile の作成

init.ora ファイルから、spfile.ora を作成する必要があります。これを行うには、SYSDBA としてデータベースに接続し、次の SQL コマンドを実行します。

```
create spfile=spfile_name FROM pfile=source_init.ora;
```

各オプションは次の内容を示します。

spfile\_name は spfileORACLE\_SID.ora です。

source\_init.ora は initORACLE\_SID.ora です。

## Oracle スキーマの作成時に NetCA で発生するエラー（ユーザーの DN およびパスワードを入力するためのプロンプトの非表示）

NetCA を起動してディレクトリを構成すると、次のエラーが発生する場合があります。たとえば、次の手順を実行すると想定します。

1. NetCA を起動します。
2. 「ディレクトリ使用構成」を選択し、「次へ」をクリックします。
3. 2 つ目のオプション「使用するディレクトリ・サーバーを選択してください。ディレクトリ・サーバーの Oracle を使用するための構成がされている必要があります。」を選択し、「次へ」をクリックします。
4. 「Oracle Internet Directory」を選択し、「次へ」をクリックします。
5. ホスト名およびポート番号を入力し、「次へ」をクリックします。
6. 「ディレクトリ使用構成 -Oracle スキーマ以外」というタイトルの次のページで、次のメッセージが表示されます。

ディレクトリには必要な Oracle スキーマが含まれていません。正しい Oracle スキーマがないと、ディレクトリ使用構成を継続できません。ディレクトリ・スキーマを作成する権限がある場合は、必要な Oracle スキーマをすぐに追加できます。必要な Oracle スキーマをディレクトリに追加しますか？

ここで、「必要な Oracle スキーマを追加する。実行に必要な権限がある。」オプションを選択し、「次へ」をクリックします。

7. 次のウィンドウで、次のメッセージが表示されます。

Oracle Schema Creation Complete

このとき、ユーザーの DN およびパスワードを入力するためのウィンドウが表示されません。

この問題を解決するには、Bug#2190328 用のパッチを適用してください。

## 削除の問題

この項では、次の削除の問題について説明します。

- [削除前のすべてのプロセスの停止](#)
- [削除中インストーラによって行われるプライマリ・インストールへの要求](#)

### 削除前のすべてのプロセスの停止

削除を実行する前に、次の手順を実行してすべてのプロセスを停止します。

1. Oracle Enterprise Manager Web Site で、「stopall」を実行してインスタンスを停止します。OEM Web Site を終了します。
2. プロンプトで、次のコマンドを実行します。
  - `emctl stop`
  - `opmnctl stop`

### 削除中インストーラによって行われるプライマリ・インストールへの要求

システムへの Oracle Collaboration Suite または Oracle9iAS Infrastructure の最初のインストールによって、システムにアクティブ管理サービスが含まれます。プライマリ・インストールを削除し、ホスト上に Oracle9iAS または Oracle Collaboration Suite の他のインストールが存在する場合は、Oracle Universal Installer によって、残りのインストールのいずれかがアクティブ管理サービスをホスティングすることが要求されます。アクティブ管理サービスをホスティングするインストールには、システム上に存在する残りのインストールの構成情報が保持されます。

## 管理およびセキュリティの問題

この章では、Oracle9i Application Server に関連する管理およびセキュリティの問題について説明します。この章の内容は次のとおりです。

- [管理の問題](#)
- [セキュリティの問題](#)

### 管理の問題

この項では、次の項目について説明します。

- [Search](#)
- [グローバリゼーション](#)
- [Portal](#)
- [Oracle Internet Directory](#)
- [Oracle9i Application Server](#)

#### Search

この項では、Oracle Collaboration Suite の検索に関連する既知の問題について説明します。

- [検索が順次実行され、パラレルで実行されない](#)
- [Oracle Email または Web ページの検索時に検索がタイムアウトしない](#)
- [検索構成が UltraSearchFilePath および UltraSearchTablePagePath をサポートしない](#)

**検索が順次実行され、パラレルで実行されない** 一度に複数の検索を実行すると、検索がパラレルで実行されず、1 つずつ順次実行されます。最初の検索が完了するまで、2 つ目の検索の結果が表示されません。

解決策：ありません。

**Oracle Email または Web ページの検索時に検索がタイムアウトしない** 多くの結果を戻す検索条件を使用すると、Oracle Email または Web サイトの検索が完了するまでに、非常に長い時間がかかる可能性があります。この場合、検索はタイムアウトしません。その後どのような操作を実行しても、完了するまで検索は続行されます。これによって、データベース・サーバーで貴重な CPU タイムが消費される可能性があります。

解決策：ありません。

**検索構成が UltraSearchFilePath および UltraSearchTablePagePath をサポートしない** Oracle Collaboration Suite の Web 検索コンポーネントは、Oracle Ultra Search によってクロール済の Web サイトを検索するように構成されています。このコンポーネントは、Oracle Ultra Search によってクロールされた他のリポジトリ（汎用データベース表、Oracle Portal、電子メール・リポジトリなど）を検索するようには構成されていません。ただし、Oracle Collaboration Suite の検索は Oracle Email を検索します。

#### グローバリゼーション

この項では、グローバリゼーションに関連する既知の問題について説明します。

- [多言語サポート](#)
- [多言語配置](#)

**多言語サポート** Oracle Collaboration Suite は、多言語を使用するグローバル・ユーザー用の配置を完全にサポートしています。唯一の例外は Oracle Calendar Server です。これは、西ヨーロッパ言語のみをサポートしています。

Oracle Collaboration Suite のユーザー・インタフェースは、英語、ポルトガル語（ブラジル）、フランス語、ドイツ語、イタリア語、日本語、韓国語、簡体字中国語、スペイン語および繁体字中国語の 10 言語で使用できます。



**多言語配置** Oracle Collaboration Suite をグローバルに配置するには、次の手順を実行します。

## Infrastructure

1. インストール開始時に、すべての翻訳済みリソースをインストールします。  
runInstallerNLS
2. インストール中に、UTF8 を Infrastructure のデータベース・キャラクタ・セットとして選択します。
3. インストール後に、Single Sign-On 翻訳済みリソースを使用可能にします。

```
$ORACLE_HOME/jdk/bin/java -jar ORACLE_HOME/sso/lib/ossoca.jar langinst d 1 $ORACLE_HOME
$ORACLE_HOME/jdk/bin/java -jar ORACLE_HOME/sso/lib/ossoca.jar langinst e 1 $ORACLE_HOME
$ORACLE_HOME/jdk/bin/java -jar ORACLE_HOME/sso/lib/ossoca.jar langinst f 1 $ORACLE_HOME
$ORACLE_HOME/jdk/bin/java -jar ORACLE_HOME/sso/lib/ossoca.jar langinst i 1 $ORACLE_HOME
$ORACLE_HOME/jdk/bin/java -jar ORACLE_HOME/sso/lib/ossoca.jar langinst ptb 1 $ORACLE_HOME
$ORACLE_HOME/jdk/bin/java -jar ORACLE_HOME/sso/lib/ossoca.jar langinst ja 1 $ORACLE_HOME
$ORACLE_HOME/jdk/bin/java -jar ORACLE_HOME/sso/lib/ossoca.jar langinst ko 1 $ORACLE_HOME
$ORACLE_HOME/jdk/bin/java -jar ORACLE_HOME/sso/lib/ossoca.jar langinst zhs 1 $ORACLE_HOME
$ORACLE_HOME/jdk/bin/java -jar ORACLE_HOME/sso/lib/ossoca.jar langinst zht 1 $ORACLE_HOME
```

## Middle-Tier

1. インストール開始時に、すべての翻訳済みリソースをインストールします。  
runInstallerNLS
2. インストール後に、Portal 翻訳済みリソースを使用可能にします。

```
$ORACLE_HOME/assistants/opca/ptlasst.csh -mode LANGUAGE -s PORTAL -c
myhost.domain.com:1521:iasdb -lang d -available -silent -m portal -verbose
$ORACLE_HOME/assistants/opca/ptlasst.csh -mode LANGUAGE -s PORTAL -c
myhost.domain.com:1521:iasdb -lang e -available -silent -m portal -verbose
$ORACLE_HOME/assistants/opca/ptlasst.csh -mode LANGUAGE -s PORTAL -c
myhost.domain.com:1521:iasdb -lang f -available -silent -m portal -verbose
$ORACLE_HOME/assistants/opca/ptlasst.csh -mode LANGUAGE -s PORTAL -c
myhost.domain.com:1521:iasdb -lang i -available -silent -m portal -verbose
$ORACLE_HOME/assistants/opca/ptlasst.csh -mode LANGUAGE -s PORTAL -c
myhost.domain.com:1521:iasdb -lang ptb -available -silent -m portal -verbose
$ORACLE_HOME/assistants/opca/ptlasst.csh -mode LANGUAGE -s PORTAL -c
myhost.domain.com:1521:iasdb -lang ja -available -silent -m portal -verbose
$ORACLE_HOME/assistants/opca/ptlasst.csh -mode LANGUAGE -s PORTAL -c
myhost.domain.com:1521:iasdb -lang ko -available -silent -m portal -verbose
$ORACLE_HOME/assistants/opca/ptlasst.csh -mode LANGUAGE -s PORTAL -c
myhost.domain.com:1521:iasdb -lang zhs -available -silent -m portal -verbose
$ORACLE_HOME/assistants/opca/ptlasst.csh -mode LANGUAGE -s PORTAL -c
myhost.domain.com:1521:iasdb -lang zht -available -silent -m portal -verbose
```

このとき、Portal スキーマ・パスワードを入力するように求められます。このパスワードは、Internet Directory で DN を使用して取得できます。

```
OrclResourceName=portal_user,orclReferenceName=sid.myhost.domain.com,cn=IAS Infrastructure
Databases,cn=IAS,cn=Products,cn=OracleContext
```

myhost.domain.com:1521:iasdb は、Infrastructure データベースへの接続文字列を指定します。このフォーマットは、ホスト名:ポート:システム識別子 (SID) である必要があります。デフォルトのポートおよび SID は、それぞれ 1521 および iasdb です。

## Information Storage

インストール開始時に、すべての翻訳済リソースをインストールします。

runInstallerNLS

デフォルトのファイルまたは UM ストレージ・データベースを使用するか、または UTF8 キャラクタ・セットでカスタム・データベースを作成します。

---

**注意：** 今回のリリースでは、AL32UTF8 はサポートされていません。

---

## Portal

この項では、Oracle Portal に関連する既知の問題について説明します。

**GUID を参照できない場合、ログインできない** ユーザーが Portal アプリケーションから参照できない Global Unique Identifier (GUID) を持つグループのメンバーである場合、そのユーザーはログインできません。wwsec\_oid.update\_flat\_table のコール中に、数値エラーまたは値エラーが発生します。これは、プロシージャが dbms\_ldap\_util.get\_group\_membership によって戻されるすべてのグループに GUID が存在すると想定しているためです。その後の dbms\_ldap\_util.get\_property\_names のコールでプロパティ名が戻されない場合、プロシージャは数値例外または値例外を発生させます。

## Oracle Internet Directory

この項では、Oracle Internet Directory に関連する既知の問題について説明します。

**Oracle Internet Directory Server の停止または再起動時に Delegated Administration Service (DAS) がハングアップする** プロセスのクラッシュまたは管理メンテナンス・ルーチンが原因で Oracle Internet Directory Server が停止または再起動されるたびに、Delegated Administration Service (DAS) がハングアップします。

解決策：opmnctl ツールを使用して、Delegated Administration Service (DAS) を再起動します。

**Oracle Internet Directory Server がクラッシュする** Oracle Internet Directory Server は、高負荷時に断続的にクラッシュします。

解決策：Bug#2514005 用の RDBMS パッチを適用します。

**Oracle Internet Directory でのニックネームとしての電子メール・アドレスの使用** Oracle Internet Directory が電子メール・アドレスをニックネームとして使用するように構成されている場合、Oracle Files のユーザーは、Web フォルダを使用して Oracle Files にアクセスすることができません。

解決策：Common Name (CN) 属性を OrclCommonNicknameAttribute として使用するように Oracle Internet Directory を構成します。

**ユーザーと Oracle Internet Directory の同期化** Oracle Files の Oracle Internet DirectoryUserSynchronizationAgent は、Oracle Internet Directory のすべてのユーザーを問い合わせることによって、新しい Oracle Internet Directory ユーザーと Oracle Files を同期化します。Oracle Internet Directory の Query Entry Return Limit パラメータがサブスクリバ内のユーザーの合計数より小さい数値に設定されている場合、このエージェントは正常に実行されません。

解決策：Query Entry Return Limit パラメータをユーザー数より大きい値に設定します。

**Oracle Internet Directory のインストール中に作成されるデフォルトのディレクトリ情報ツリー (DIT)** 今回のリリースでは、デフォルトで、次のディレクトリ情報ツリー要素が作成されます。

- ルート Oracle コンテキスト：cn=OracleContext。これは、Oracle 製品が企業全体の構成データを格納するコンテナです。
- デフォルト・サブスクリバ：dc=dns\_domain\_of\_machine,dc=com。これは、企業の DIT 構造の近似です。Oracle 製品は、このコンテナに企業内のユーザーおよびグループが格納されていると予想します。たとえば、ホスト名が machine1.us.acme.com のマシンに Oracle Internet Directory をインストールする場合、Oracle Internet Directory のインストールによって作成されるデフォルト・サブスクリバ・ツリーは dc=acme,dc=com です。Oracle 製品は、コンテナ

cn=users,dc=acme,dc=com にすべてのユーザーが格納され、cn=groups,dc=acme,dc=com にすべてのグループが格納されていると予想します。Oracle Internet Directory Configuration Assistant は、デフォルト・サブスクライバ・エントリを作成する他に、他の Oracle Internet Directory 対応コンポーネントが自身をブートストラップできるように、デフォルト・サブスクライバ・エントリへのポインタをルート Oracle コンテキストに格納します。

すでにディレクトリをロールアウトした企業では、デフォルト・サブスクライバが実際の企業ディレクトリ情報ツリー要件を満たさない場合があります。たとえば、企業がそのすべてのユーザーを o=acme,c=us などの異なるコンテナに格納する場合、Oracle Internet Directory のインストールによって作成されたデフォルトのツリーでは不十分です。

Oracle Internet Directory で代替エントリをデフォルト・サブスクライバとして指定するには、次の操作を実行します。

- Oracle Internet Directory をインストールします。
- コマンドライン・ツールまたは Oracle Directory Manager を使用して、企業固有のディレクトリ・ツリーを作成します。
- oidca を実行して、企業固有のディレクトリ・エントリをデフォルト・サブスクライバとして構成します。これを行うには、次の引数を使用します。

```
$ORACLE_HOME/bin/oidca
/createDefaultSubscriber
[/help] - optional to show usage
/host oid_host
/port oid_port
/userDN bindDN
/userPwd bindDN_password
/subscriberDN subscriber_DN_to_be_turned_into_a_default_subscriber
```

**データベースの互換性** Oracle Internet Directory リリース 9.0.2.1.0 は、Oracle9i データベース リリース 1 (9.0.1.2.0) に対してのみ機能することが認証されています。

**クライアントの互換性** Oracle Directory Manager 9.0.2.1.0 は、Oracle Internet Directory リリース 9.0.2.1.0 サーバーに対して機能することが認証されています。Oracle Directory Manager の以前のバージョンも新しいリリースのサーバーに対して機能する場合がありますが、このような以前のクライアントからは新しい機能を使用できません。

**データベース・アクセス・メカニズム** Oracle Internet Directory のデータ・ストアとして使用するデータベースは、Oracle Internet Directory 専用である必要があります。Oracle Internet Directory 自身がバックエンド・データベースに通常のデータベース・ユーザーとしてアクセスするため、LDAP 対応機能を他の Oracle 製品で使用すると、循環依存の原因になる可能性があります。Oracle Internet Directory データベース接続に次のデータベース・アクセス・メカニズムを使用しないことをお勧めします。

- Oracle Net LDAP ネーミング。このメカニズムは、Oracle Net Services クライアントが LDAP サーバーを調べてデータベース・サービス名を解決できるようにします。Oracle Net Services を使用すると、Oracle Internet Directory の起動を回避できます。
- エンタープライズ・ユーザーおよびエンタープライズ・ロール。このメカニズムは、Oracle Advanced Security の機能であり、これによってデータベースがディレクトリ・サーバーを参照して、特定のエンタープライズ・ユーザーに付与されているエンタープライズ・ロールを確認できます。Oracle Internet Directory は、自身のデータベースにエンタープライズ・ユーザーとしてログインできません。

**ディレクトリ・サーバーの複数インスタンスの実行** 現在、それぞれが個別の ORACLE\_HOME ディレクトリに存在する、ディレクトリ・サーバーの複数のインスタンスを、同一コンピュータ上で実行することができます。たとえば、あるインスタンスを SSL モードで実行し、他のインスタンスを非 SSL モードで実行することができます（ただし、Oracle Internet Directory リリース 9.0.2.1.0 では、別々のインスタンスでこれを行う必要はありません）。

データベース・バイナリが配置されているコンピュータ以外のコンピュータで Oracle Internet Directory ソフトウェア・バイナリを使用する場合、特定のデータベース・インスタンスを使用するすべてのディレクトリ・サーバー・インスタンスが同じ場所に配置されている必要があります。

たとえば、あるディレクトリ・サーバー・インスタンスをコンピュータ A、別のディレクトリ・サーバー・インスタンスをコンピュータ B で実行する場合、両方が、コンピュータ C で定義されている共通の SID を使用することはできません。ただし、コンピュータ A 上の 2 つの個別ディレクトリ・サーバー・インスタンスをコンピュータ B 上のデータベースに対して実行することはできます。

これらの構成では、目的の LDAP サーバー・コンピュータおよびデータベース・コンピュータの両方に、完全な Oracle Internet Directory コンポーネントを 2 回別々にインストールする必要があります。LDAP サーバー・コンピュータでは、Oracle Internet Directory コンポーネントがインストールされているデータベースは使用されず、インストール後に安全に削除できます。また、データベース・コンピュータでは、LDAP サーバー・バイナリは使用されず、これもインストール後に安全に削除できます。

## Oracle Directory Integration Platform の問題および制限事項

### Oracle Directory Integration Platform およびレプリケーション

複数の Oracle Internet Directory ノードで構成されるレプリケート環境で Oracle Directory Integration Platform を使用する場合、DSE ルートの `orclldiprepository` 属性を 1 に設定する必要があります。これによって、サーバーは他の Oracle Internet Directory ノードからの変更の変更ログ・エントリを生成できるようになります。デフォルトでは、サーバーはこの変更ログ・エントリを生成しません。変更ログ・エントリは、ディレクトリ・データをサード・パーティのディレクトリおよびメタディレクトリと同期化するために必要です。

### バイナリ属性を同期化できない

バイナリ属性は、ディレクトリからインポートまたはエクスポートできません。

### iPlanet スキーマの同期化の制限事項

ユーザー・データを同期化するときに、iPlanet コネクタはスキーマの変更を自動的に同期化しません。この同期化を実行するには、`$ORACLE_HOME/bin/schemasync` を使用します。

リリース 9.0.2.1.0 では、Oracle Directory Integration Server と iPlanet Directory 間の SSL モードはサポートされていません。ただし、今回のリリースでは、Oracle Directory Integration Server と Oracle9i Application Server 間の SSL モードはサポートされています。Oracle Directory Integration Server は、あらゆる場所から実行できるため、iPlanet Directory と同じホストに配置できます。

iPlanet コネクタには、同期化に使用するデフォルトのインポートおよびエクスポート・プロファイルが付属しています。iPlanet エクスポート・コネクタを使用する前に、Oracle Internet Directory 変更イベントをサブスクライブする必要があります。サブスクライブしない場合は、iPlanet コネクタが変更イベントを使用する前に、変更イベントがページされます。

変更イベントをサブスクライブするには、デフォルトのエクスポート・プロファイルで `orclsubscriberdisable` フラグを `FALSE` に設定する必要があります。デフォルトでは、このフラグは `TRUE` に設定されています。`orclsubscriberdisable` フラグを `FALSE` に設定するには、`ORACLE_HOME/ldap/odi/conf/iplpurgedisable.ldif` 内の LDAP Data Interchange Format (LDIF) ファイルで `ldapmodify` コマンドライン・ツールを使用します。

---

**注意：** `schemasync` ツールは、SSL モードではサポートされません。

---

### iPlanet からの削除の同期化に対する制限事項

iPlanet コネクタが Oracle Internet Directory と iPlanet Directory Server 間で双方向に同期化するために配置されている場合、Oracle Internet Directory が作成元である iPlanet Directory 内のエントリを削除しても、その削除は Oracle Internet Directory に伝播されません。このようなエントリは、Oracle Internet Directory で削除する必要があります。

### Oracle Directory Integration Server の起動時に使用する configset0 は Oracle Provisioning Integration Service 用に予約済である

Oracle Directory Integration Server を (iPlanet Directory Server などとの) 同期化に使用する場合は、Directory Integration Server の起動時に `configset0` 以外の構成設定エントリを使用します。`configset0` は、Oracle Directory Integration Server を Oracle Provisioning Integration Service 用に実行するために予約されています。

## データ・インタフェース型 DB オプションがサポートされていない

Oracle Internet Directory と接続ディレクトリの間の同期化に使用されるインタフェースの型を示すデータ・インタフェース型では、ユーザー・インタフェースに DB オプションが提供されます。ただし、DB オプションを選択すると、このオプションがディレクトリ・サーバーでサポートされていないことを示すエラー・メッセージが表示されます。

## hostname 属性がエージェントの実行に影響を及ぼさない

ディレクトリ統合プロファイルの構成中に、エージェントを実行するホストを指定する hostname 属性が Oracle Directory Manager に表示されます。そのフィールドに指定された値は、エージェントの実行に影響を及ぼしません。

## 移行した Oracle Directory Integration Platform がデフォルトで起動されない

アップグレード・プロセスでは、Oracle Directory Integration Platform はデフォルトで起動されません。Oracle Internet Directory のアップグレード後に、Oracle Directory Integration Server を明示的に登録および起動する必要があります。

## コネクタ・プロファイルへのマッピングおよび構成情報のアップロード

Oracle Directory Integration Platform エージェントのマッピングおよび構成情報を Oracle Internet Directory コネクタ・プロファイル・エントリにアップロードするには、`ldapUploadAgentFile.sh` を使用します。引数およびその説明を次に示します。

表 2-4 `ldapUploadAgentFile.sh` の引数

引数	説明
<code>name</code>	情報のロード先である統合プロファイルの名前。
<code>config</code>	プロファイルが属する構成設定エントリ。
<code>LDAPhost</code>	ディレクトリ・サーバー・ホスト。
<code>LDAPport</code>	ディレクトリ・サーバー・ポート。
<code>binddn</code>	プロファイル・エントリの変更権限を持つディレクトリ・ユーザーのバインド DN。
<code>bindpass</code>	バインド DN に対応するパスワード。
<code>attrtype</code>	ロードするファイルのタイプ。マッピング・ファイルをロードする場合は、MAP を指定します。また、構成情報ファイルをロードする場合は、ATTR を指定します。
<code>filename</code>	アップロードするファイルの完全パス名。

## ディレクトリ・サーバーの制限事項 Oracle ディレクトリ・サーバーおよびデータベース・ツールを UTF8 以外のデータベースで実行できる

Oracle ディレクトリ・サーバーおよびデータベース・ツールは、UTF8 以外のデータベースでも実行できるようになりました。ただし、クライアント・リクエストのデータのキャラクタ・セットがディレクトリ・サーバーのデータベース・キャラクタ・セットと異なり、そのクライアント・データをデータベース・キャラクタ・セットにマップできない場合は、LDAP の追加 (`add`)、削除 (`delete`)、変更 (`modify`) または DN 変更 (`modifydn`) 操作中にデータが消失することがあります。Oracle ディレクトリ・サーバーの基礎となるデータベースが UTF8 でない場合、クライアントとデータベースに同じキャラクタ・セットを使用することをお勧めします。

## bulkload ユーティリティを使用してディレクトリを移入しない場合は、oidstats を実行する必要がある

`bulkload.sh` を使用してディレクトリを移入しない場合は、`$ORACLE_HOME/ldap/admin/oidstats.sh` を実行する必要があります。このスクリプトを実行しなかった場合は、検索パフォーマンスが大幅に低下することがあります。

`oidstats.sh` スクリプトのかわりに、PL/SQL パッケージ `DBMS_STATS()` を使用できます。

## 論理ホスト環境でのレプリケート・ディレクトリのインストール

Oracle Internet Directory は、『Oracle Internet Directory 管理者ガイド』に記載されている論理ホストを使用することによって、クラスタ環境でのフェイルオーバーをサポートします。レプリケーション環境で論理ホストを使用するには、Oracle Internet Directory を新規インストールする必要があります。また、レプリケーション承諾の構成中に論理ホスト名を使用する必要もあります。既存のレプリケーション承諾でのホスト名が論理ホスト名と異なるリリース 3.0.1 より前の既存のレプリケーション環境からアップグレードする場合、レプリケーションは正常に実行されません。

## 透過的アプリケーション・フェイルオーバー（TAF）が Real Application Clusters 構成で機能しない場合がある

Oracle Internet Directory リリース 9.0.2.1.0 では、接続時フェイルオーバーは機能しますが、透過的アプリケーション・フェイルオーバーは、正常に機能しない場合があります。ただし、障害が発生した場合、接続時フェイルオーバー時点の状態まで戻ります。

## 索引付けする属性の名前を 28 文字以内にする必要がある

属性名が 28 文字を超える場合、catalog.sh を使用してその属性に索引を作成することはできません。

## サポートされる一致規則が割り当てられた属性のみ索引付けできる

すべての新しい属性を索引付けする前に、Oracle Internet Directory によってサポートされる一致規則をその属性定義に割り当てる必要があります。catalog.sh ユーティリティの使用、およびサポートされる一致規則とその構文の詳細は、『Oracle Internet Directory 管理者ガイド』を参照してください。

## 索引付けする属性の等価の一致規則が整数一致の場合でも、文字列一致のように動作する

EQUALITY の値が integerMatch である属性を catalog.sh を使用して索引付けすると、その属性の一致規則が整数一致ではなく文字列一致のように動作します。

## LDAP 操作では属性別名が区別されない

Oracle Internet Directory リリース 9.0.2.1.0 は、LDAP 操作ではエントリ別名を区別しますが、属性別名は区別しません。

## ディレクトリ・サーバーでは構文検証がサポートされていない

Oracle ディレクトリ・サーバーは、エントリの追加または変更中にユーザーが入力した属性値の構文を検証しません。

## SSL V2 クライアントがサーバーに接続できない場合がある

SSL バージョン 2 を使用する LDAP クライアントでは、Oracle Internet Directory にバインドしようとすると、LDAP サーバーに接続できないというエラーが発生する場合があります。

## ディレクトリ・サーバーへのレプリケーション・サーバー接続用に新しい SSL がサポートされる

Oracle Internet Directory リリース 9.0.2.1.0 では、ディレクトリ・サーバーのレプリケーション・プロセスは、SSL（モード 1 - 認証なし）を使用して SSL ベースのディレクトリ・サーバー・プロセスに接続することができます。Oracle Internet Directory の以前のリリースには、この機能はありませんでした。

## Oracle Internet Directory のエントリ・キャッシュが複数サーバー・インスタンスおよびレプリケーション・グループで自動的に使用不可にされる

これは、配置におけるエントリのワーキング・セットが最大数百 KB のエントリで構成され、同時クライアント数が最大 1000 クライアントである場合（エントリのワーキング・セットが完全にキャッシュされ、単一サーバーがすべての同時クライアントを処理できる場合）に、エントリ・キャッシュのパフォーマンスが最も向上するためです。

## OIDCTL/ODISRV SSLAUTH フラグ

OIDCTL コマンドライン・ツールは、server=odisrv が指定されるときは常に SSLAUTH 引数を取ります。sslauth の正当な値は 0、1 および 2 であり、それぞれ次の意味を持ちます。

表 2-5 SSLAUTH の値

引数	意味
0	SSL は使用されません（非 SSL モード）。
1	SSL は暗号化のみに使用され、Public Key Infrastructure（PKI）認証は使用されません。
2	SSL は、一方向認証で使用されます。このモードでは、Wallet の位置のみを必要とする他の Oracle Internet Directory Tools とは異なり、Oracle Wallet の完全パス名（ファイル名自体を含む）を指定する必要があります。次に例を示します。 <pre>oidctl server=odisrv instance=instance_number configset=configset_number flags="host=myhost port=myport sslauth=2 wloc=file:/home/mydir/mywallet.dat wpass=welcome" (server/complete installations) odisrv host=myhost port=myport sslauth=2 wloc=file:/home/mydir/mywallet.dat wpass=welcome (client-only installations)</pre> <p>これに対し、他の Oracle Internet Directory Tools では、次のとおり指定します。</p> <pre>oidctl server=odisrv instance=instance_number configset=configset_number flags="host=myhost port=myport sslauth=2 wloc=file:/home/mydir wpass=welcome" (server/complete installations) odisrv host=myhost port=myport sslauth=2 wloc=file:/home/mydir wpass=welcome</pre> <p><b>注意：</b> Oracle Directory Integration Server の Wallet は、Oracle Wallet Manager の「Wallet のエクスポート」オプションを使用して作成されたテキスト Wallet である必要があります。</p> <p><b>参照：</b> Wallet のエクスポートの詳細は、『Oracle Advanced Security 管理者ガイド』の Oracle Wallet Manager に関する章を参照してください。</p>

## プレーン Wallet のサポートが廃止され、ローカル Wallet に置き換えられている

Oracle Internet Directory リリース 9.0.2.1.0 では、プレーン Wallet（暗号化されていない Wallet）のサポートが廃止されました。プレーン Wallet は、暗号化されたローカル Wallet（ファイル・システムで暗号化された cwallet.sso Wallet）に置き換えられています。プレーン Wallet は暗号化されていないため、ユーザー名およびパスワードを必要とします。これに対し、ローカル Wallet は、自身のパスワードを暗号化された形式で格納するため、その所有者がその Wallet を開くときにパスワードを必要としません。ローカル Wallet を作成したオペレーティング・システム・ユーザーがその Wallet を開くときに、Wallet のパスワードが復号化され、Wallet の内容を読み込むために使用されます。

ローカル Wallet は、オペレーティング・システム固有のデータ（ユーザー名やホスト名など）を使用して暗号化され、その Wallet を作成したシステム・ユーザーのみがそれを開くことができます。このため、SSL 構成セット・エントリ（または OIDCTL および ODISRV に渡されるフラグ）で指定する Oracle Internet Directory 側 Wallet は、Oracle Internet Directory 実行ファイルを所有する同じオペレーティング・システム・ユーザーによって作成されている必要があります。それ以外の場合、SSL 対応の Oracle Internet Directory リスナーがその Wallet を双方向 SSL 認証に使用することはできません。

## デフォルト・ポート 389

『Oracle Internet Directory 管理者ガイド』には、非 SSL の LDAP プロセスのデフォルト・ポートが 839 であると記載されています。これは、このドキュメントの他の箇所に記載するとおり、389 の誤りです。

## パスワード・ポリシーの制限事項

ルート Oracle コンテキスト下に存在するエントリは、すべてのパスワード・ポリシーの対象外です。

サブスクリバがそのユーザー・サーチ・ベースを指定しない場合、ルート Oracle コンテキストのパスワード・ポリシーが、そのサブスクリバのドメイン内に存在するすべてのユーザーに適用されます。サブスクリバがユーザー・サーチ・ベースを指定した場合は、サブスクリバ Oracle コンテキスト下に存在するパスワード・ポリシーがそのすべてのユーザーに適用されます。

Oracle Internet Directory のいずれの 9i バージョンからのアップグレード中も、既存のパスワード・ポリシーがルート Oracle コンテキストに移されます。

## Oracle Internet Directory の認証フレームワークの制限事項

Oracle Internet Directory のパスワード・ポリシーは、Oracle Internet Directory の authpassword および orclpasswordverifier という認証属性型には適用されません。

## Oracle Internet Directory と Oracle9iAS Portal および Oracle9iAS Single Sign-On の使用

Oracle9iAS Portal をインストールすると、デフォルト・サブスクライバのデフォルトのユーザー作成ベース `cn=PUBLIC,cn=users,o=mycompany,dc=com` の下にユーザー・エントリが作成されます。このエントリは、認証されていないすべてのユーザーを示し、Oracle9iAS Portal および Oracle9iAS Single Sign-On を正常に動作させるために必要です。このユーザー・アカウントは削除しないでください。このユーザー・エントリが欠落している場合、繰り返しそのエントリの検索が試行されるため、ディレクトリ・サーバーでパフォーマンスが大幅に低下する可能性があります。

既存のディレクトリ情報ツリー (DIT) を使用するように Oracle9iAS を構成している場合は、この目的のためにデフォルトのユーザー・サーチ・ベースに `PUBLIC` というユーザーが含まれていることを確認してください。 `cn=users,o=oracle,dc=com` というユーザー・ベースの場合、このエントリの定義は次のようになります。

```
dn: cn=PUBLIC,cn=users,o=oracle,dc=com
cn: PUBLIC
sn: PUBLIC
objectclass: top
objectclass: person
objectclass: inetOrgPerson
objectclass: organizationalPerson
objectclass: orclUser
objectclass: orclUserV2
```

---

**注意：** この定義では、`userPassword` 属性が指定されていません。Oracle9iAS Single Sign-On を介したこのユーザーとしてのログインを禁止する場合は、`userPassword` 属性を指定しないでください。

---

## OIDPASSWD ツールを使用するたびに新しい OIEMDPASSWD ツールを実行する

OIDpasswd ユーティリティを使用して Oracle Internet Directory データベース・ユーザーの ODS パスワードを変更するたびに、新しい OIEMdpaswd ユーティリティを実行します。これによって、Oracle Enterprise Manager デーモンが ODS パスワードを正常にキャッシュできるようになります。新しい OIEMdpaswd ユーティリティを実行しないと、Oracle Enterprise Manager デーモンは ODS スキーマにアクセスできず、Oracle Enterprise Manager から Oracle Internet Directory プロセスを監視できません。

## バルク・ツールを実行するには、エントリ・キャッシュを使用不可にする必要がある

任意のバルク・ツールを実行するには、まず、エントリ・キャッシュを使用不可にします。使用不可にできなかった場合は、後続の問合せで不正確な結果が戻されます。

## ディレクトリ・レプリケーションの制限事項 新しいディレクトリ・レプリケーション・グループ (DRG) の作成

『Oracle Internet Directory 管理者ガイド』の新規ディレクトリ・レプリケーション・グループ (DRG) の作成に関する項では、DRG に使用されるすべてのノードに既存のディレクトリ・データが存在しないと想定しています。

## 既存のディレクトリ・レプリケーション・グループへの新しいノードの追加

Oracle Internet Directory リリース 9.0.2.1.0 では、マニュアルに記載されている「ノードの追加」手順を実行して、レプリケートしない既存の単一の Oracle Internet Directory ノードからディレクトリ・レプリケーション・グループを作成することはできません。その手順は、既存の DRG が存在し、DRG に追加されるノードの数を 1 つ増やすことを想定しています。この場合、新しいノードに既存のデータが存在しないことを確認する必要があります。すべての既存データは、既存の DRG に追加されている他のノードにまでレプリケートされません。既存のデータをレプリケートする必要がある場合は、次の手順を実行します。



1. `-L` オプションを指定して `ldapsearch` を使用し、データを LDIF ファイルに抽出します。
2. エクスポートされたすべてのエントリを新しいノードから削除します。
3. 新しいノードが DRG に追加され、新しいデータを他のノードにレプリケートできるようになった後、`ldapadd` を使用して、エクスポートされたデータを再ロードします。

### bulkload.sh を使用して、アクティブなレプリケーション承諾にすでに含まれているノードにデータを追加しない

ディレクトリ・サーバー・インスタンスがレプリケーション承諾に追加されている場合は、`bulkload.sh` を使用してデータをそのノードに追加しないでください。かわりに、`ldapadd` を使用してください。

### ディレクトリ・レプリケーション・サーバーは、相対識別名（RDN）構成要素間の空白を保持しない場合がある

ディレクトリ・レプリケーション・サーバーは、エントリのレプリケーション中に、DN に含まれる RDN 構成要素間の空白を保持しない場合もあります。まれに、DN に含まれる文字の大 / 小文字の区別が保持されない場合もあります。

### ローカル・システム固有のメタデータがレプリケートされない

サーバー構成のデータ、レプリケーション承諾、監査ログ、ディレクトリ・サーバー統計、イベント、および DSE ルート固有のデータは、ディレクトリ・レプリケーション・グループのサーバー間ではレプリケートされません。

**ログ・ファイルの位置** Oracle Internet Directory コンポーネントは、そのログ情報およびトレース情報を `ORACLE_HOME` 環境のログ・ファイルに出力します。次の表に、コンポーネントおよびそのログ・ファイルの位置を示します。

表 2-6 コンポーネントおよびログ・ファイルの位置

コンポーネント	ログ・ファイル名
LDAP ディスパッチャ・プロセス (oidldapd)	<code>\$ORACLE_HOME/ldap/log/oidldapdXX.log</code> (XX はサーバーのインスタンス番号です。)
ディレクトリ (LDAP)・サーバー・プロセス (OIDldapd)	<code>\$ORACLE_HOME/ldap/log/oidldapdXXsPID.log</code> (PID はサーバーのプロセス識別子 (PID) です。)
レプリケーション・サーバー・プロセス (oidrepld)	<code>\$ORACLE_HOME/ldap/log/oidrepld00.log</code>
モニター・プロセス (oidmon)	<code>\$ORACLE_HOME/ldap/log/oidmon.log</code>
<code>bulkload.sh</code>	<code>\$ORACLE_HOME/ldap/log/install.log</code>
カタログ・マネージャ (catalog.sh)	<code>\$ORACLE_HOME/ldap/log/catalog.log</code>
レプリケーション設定 (ldaprepl.sh)	<code>\$ORACLE_HOME/ldap/admin/logs/ldaprepl.log</code>
Oracle Directory Integration Server プロセス (odisrv)	<code>\$ORACLE_HOME/ldap/log/odisrvXX.log</code> (XX は <code>oidsyncServer</code> サーバーのインスタンス番号です。)
ディレクトリ統合プロファイル・エージェント	<code>\$ORACLE_HOME/ldap/odi/log/Agent_Name.err</code>

### ldapsearch の制限事項

エントリの近似一致（ファジー・マッチングともいう）はサポートされていません。

### ldapsearch がデフォルトで LDIF 出力を生成しない

`ldapsearch` コマンドライン・ツールから LDIF フォーマットの出力を生成するには、`-L` フラグを使用します。

## カタログ管理ツールの使用方法

カタログ索引管理ツール (catalog.sh) を使用すると、次の操作を実行できます。

- 以前は検索不可であった属性を索引付けによって検索可能な属性に変換します。
- 新しい属性の索引を定義および削除します。

属性の索引が Oracle Internet Directory でインストールされたベース・スキーマによって作成されたものでないかぎり、catalog.sh -delete オプションを使用してその索引を削除しないように注意してください。ベース・スキーマ属性から索引を削除すると、Oracle9i Application Server の動作に悪影響を及ぼす可能性があります。索引付けされた属性についてのサーバー側の制限事項に関する項も参照してください。Oracle ディレクトリ・サーバー・プロセスのインスタンスを再起動して、新しくカタログ化された属性を認識する必要があります。

### -r オプション付きの ldapadd がサポートされていない

-r オプションを指定して ldapadd ユーティリティを使用すると、同じ DN を持つエントリがすでにディレクトリに存在している場合は、エントリが置換されます。同じ識別名のエントリがすでにディレクトリ情報ツリーに存在している場合は、オブジェクトがすでに存在しているというメッセージが表示されます。

**Oracle Directory Manager** Oracle Directory Manager では、Graphical User Interface を使用して、Oracle Internet Directory でデータおよびポリシーを簡単に管理できます。Oracle Directory Manager は、コマンドラインから oidadmin を介して起動できます。

## Oracle Directory Manager リリース 9.0.2.1.0 を使用した Oracle Internet Directory の以前のバージョンの管理

Oracle Directory Manager リリース 9.0.2.1.0 は、Oracle Internet Directory の次のバージョンでのみ機能します。

- 2.0.4.x
- 2.0.5.x
- 2.0.6.x
- 2.1.1.x
- 3.0.1
- 9.0.2.1.0

## Oracle Directory Manager を使用したサード・パーティのディレクトリの管理

Oracle Directory Manager を使用して Oracle Internet Directory 以外の LDAP ディレクトリを管理することはできません。

## Oracle Directory Manager の問題および制限事項

### Oracle Directory Manager が操作属性のタイムスタンプ・プロパティを不正確に表示する (Bug#1477787)

すべてのタイムスタンプ操作属性は、グリニッジ標準時 (GMT) タイムスタンプとしてサーバーに格納されます。ただし、Oracle Directory Manager は、タイムスタンプ操作属性をローカル・タイムゾーン・ベースで表示します。

### Oracle Directory Manager を使用してオブジェクト・クラスを既存のエントリに追加できない

Oracle Internet Directory を使用すると、オブジェクト・クラスを既存のエントリの objectClass 属性に追加することによって、そのエントリを拡張 (追加の属性をサポート) できます。Oracle Directory Manager を使用してこのようなスキーマ拡張を実行することはできません。このようなスキーマ拡張を実行するには、コマンドライン・ツールを使用します。スキーマの非一貫性 (必要な値を含まない属性など) を発生させないように注意してください。エントリ拡張時の非一貫性を回避するために、オプションの属性にのみ補助オブジェクト・クラスを使用してください。

## ヘルプ・ウィンドウでスクロールバーを移動させると、Oracle Directory Manager セッションがクラッシュする場合がある

簡体字中国語環境では、Oracle Directory Manager のオンライン・ヘルプでスクロールすると、Java Virtual Machine (JVM) がクラッシュする可能性があります。この問題は、一部のコンピュータでのみ発生します。この問題が発生した場合は、jar ファイルで中国語ヘルプの内容を英語に置き換えます。これを行うには、次のコマンドを入力します。

```
cd /tmp
jar xf $ORACLE_HOME/ldap/oidadmin/osdadminhelp.jar
mv -f oracle/ldap/admin/help/ldap/* oracle/ldap/admin/help/ldap_zh_CN/
mv -f $ORACLE_HOME/ldap/oidadmin/osdadminhelp.jar
$ORACLE_HOME/ldap/oidadmin/osdadminhelp.jar.bak
jar cf $ORACLE_HOME/ldap/oidadmin/osdadminhelp.jar oracle
jar tf $ORACLE_HOME/ldap/oidadmin/osdadminhelp.jar
```

## 委任管理の制限事項

- 「ユーザーの削除」確認メッセージの表示中、ブラウザを更新すると NULL 例外が発生します (Bug#2035381)。
- 「取消」ボタンを使用して、「ユーザーの編集」ページを終了する必要があります (Bug#2288441)。
- 「取消」ボタンを使用せずに Delegated Administration Service の「ユーザーの編集」ページを終了すると、「ユーザーの編集」ページが次に表示されたときに不正確なユーザー・データが表示される場合があります。
- Delegated Administration Service のホームページで使用可能なオンライン・ヘルプは、英語でのみ使用できます (Bug#2268393)。
- ユーザー名にマルチバイト・キャラクタが含まれている場合は、ユーザーの JPEG 写真のアップロードが正常に実行されません (Bug#2154745)。
- 「サブスクリバ・ログを使用可能にする」チェックボックスの選択解除は機能しません (Bug#2285575)。

## Oracle Directory Integration Platform の問題および制限事項 (Client-only インストール)

参照: 「[Oracle Directory Integration Platform の問題および制限事項](#)」を参照してください。

## Oracle9i Application Server

この項では、Oracle9i Application Server に関連する既知の問題について説明します。

**dcmctl を実行して、構成の手動変更後に構成を更新する** 次のコンポーネントの構成ファイルに手動で変更を加えたとします。

- Oracle HTTP Server
- OC4J

加えた変更は、DCM リポジトリに反映されません。

手動での編集を DCM リポジトリに伝播させるには、手動で編集するか、または Oracle Enterprise Manager を介して編集した後、次のコマンドを実行します。

```
dcmctl updateconfig ohs
dcmctl updateconfig oc4j
```

これは、DAD を作成、変更または削除したり、Oracle Enterprise Manager を使用して mod\_plsql キャッシュ設定を変更した場合にも同様です。

**emctl を使用した ias\_admin パスワードの変更** emctl を使用して ias\_admin パスワードを変更した場合、次のコマンドを使用して Oracle Enterprise Manager Web Site を再起動する必要があります。

```
> emctl stop
> emctl start
```

**OPMN がマルチバイトの OC4J インスタンスを起動できない** OPMN の構成ファイル (opmn.xml) は、UTF-8 エンコーディングで記述されます。 opmn.xml を解析するコードは C で作成され、opmn.xml のデータは UTF-8 バイトとして処理されます。このため、データが適切なエンコーディングに変換されなかった場合は問題が発生します。たとえば、オペレーティング・システムのデフォルトのエンコーディングが EUC-JP の場合に、ディレクトリが UTF-8 データを使用して作成されます。この場合、マルチバイトのインスタンス名はアクセス不可能になります。

この問題を解決するには、opmn.xml に含まれるインスタンス名や環境変数などの内容にマルチバイト・キャラクタを使用しないようにします。

**クロックの同期化** Oracle9iAS コンポーネントによっては、それらが稼働するマシン上のクロックを同期化する必要があります。クロックを同期化するには、これらのマシンで Network Time Protocol (NTP) デーモンを実行します。これを行うには、xntpd または類似のデーモン・プロセスを起動します。

**ポート・オプションを使用したアプリケーションのロードの構成** アプリケーションのロード方法を構成するには、いくつかの方法があります。

- 1 つは、最初のリクエストを受信したときにアプリケーションを動的にロードする方法です。この方法では、通信に Named Pipes を使用します。
- もう 1 つは、アプリケーションを起動時にロードする方法です。この方法を使用する場合、アプリケーションがポート・オプションまたは Named Pipes オプション（この場合は、ポートを指定する必要はありません）を使用するように構成できます。今回のリリースでは、ポート・オプションのみをサポートしています。

**Oracle Enterprise Manager ホームページに OC4J メトリクスが表示されない** Oracle Enterprise Manager のホームページを開くと、OC4J メトリクスが表示されません。メトリクスを表示するには、そのページを更新します。

**OEM の翻訳バージョンでの ias\_admin パスワードの変更** Oracle Enterprise Manager Web Site の翻訳バージョンを使用して ias\_admin パスワードを変更することはできません。これは、インスタンス・ホームページの「**設定**」リンクが無効になっているためです。

ias\_admin パスワードは、次のコマンドを使用して変更できます。

```
ORACLE_HOME/bin/emctl set password new_password
```

**opmnctl restart を実行すると表示されるメッセージ「Unavailable Hostname」は無視できる** opmnctl restart を実行するか、または他の方法で OC4J を再起動し、EMD が実行中の場合、ORACLE\_HOME/Apache/Apache/error\_log ファイルに次のエラー・メッセージが表示される場合があります。

```
[Wed Apr 3 12:09:50 2002] [error] MOD_OC4J_0082: Failed to call
gethostbyname() for host name: UNAVAILABLE.
[Wed Apr 3 12:09:50 2002] [error] MOD_OC4J_0019: Failed to resolve network
address of worker: home_15's host: UNAVAILABLE and port: 3003.
[Wed Apr 3 12:09:50 2002] [error] [client 130.35.92.190] MOD_OC4J_0138:
Failed to validate network worker: home_15 with host: UNAVAILABLE and port:
3003.
[Wed Apr 3 12:09:50 2002] [error] [client 130.35.92.190] MOD_OC4J_0141:
Failed to validate host: UNAVAILABLE and port 3003 for network worker:
home_15.
```

これらのエラー・メッセージは、問題を発生させないため、無視してもかまいません。

**パスを含む属性によってクラスタ・モデルに問題が発生する** パスを指定する属性では、そのパスが Oracle ホームへの相対パスであることを確認してください。相対パスでない場合、クラスタ・メンバーが正常に実行されない場合があります。

**Oracle Enterprise Manager は複数のロケールをサポートしない** Oracle Enterprise Manager は複数のロケールをサポートしません。次のコンポーネントでは、Oracle Enterprise Manager でページを表示するときに、ブラウザのロケールが使用されます。

- Oracle9iAS Portal

- Oracle9iAS Single Sign-On
- PL/SQL Properties
- Oracle9iAS Unified Messaging

その他のすべての管理ページでは、ページの表示時に Java のデフォルト・ロケールが使用されます。

**OEM を使用した BC4J JSP、UIX JSP および UIX XML アプリケーションの配置** Oracle Enterprise Manager の配置機能ランタイムを使用して JDeveloper から Oracle9iAS に BC4J JSP、UIX JSP および UIX XML アプリケーションを配置すると、ランタイム・レンダリング・データ・アクセス・エラーが発生します。このエラーは、データ・ソース情報が JDeveloper から生成された EAR ファイルに事前にパッケージ化されておらず、後で Enterprise Manager を使用して追加された場合にのみ発生します。

データ・ソース情報が JDeveloper から生成された EAR ファイルにパッケージ化されていないか、または「< 接続先 > に配布」オプションではなく「EAR ファイルへ配布」オプションが選択されている場合、その情報を後で Enterprise Manager を使用して「< データソース名 > の編集」機能によって追加すると、ランタイム・レンダリング・エラーが原因で UIX/JSP および UIX/XML アプリケーションを正常に実行できません。

このエラーを回避するには、EM を使用して配置した後、データ・ソース情報を追加しないでください。かわりに、EM を使用して配置する前に、EAR ファイルを JDeveloper からのデータ・ソース情報とともにパッケージします。JDeveloper から UIX/JSP または UIX/XML アプリケーションを作成するときは、EAR ファイルに配置するのみでなく、ダミー接続を含むすべての既存の接続に配置します。その処理によって、データ・ソース情報がパッケージされた EAR ファイルが作成されます。

ダミー接続に配置すると、その処理によって JDeveloper で配置エラーが発生しますが、Oracle9iAS に正常に配置可能なデータ・ソース情報を含む EAR ファイルが作成されます。

**ユーザー・マネージャが JAZN LDAP から JAZN XML に変更された場合の OC4J の再起動** OC4J のユーザー・マネージャが JAZN LDAP から JAZN XML に変更された場合、その変更は動的に反映されません。OC4J は、継続して JAZN LDAP をユーザー・マネージャとして使用します。

JAZN XML への変更を反映させるには、OC4J インスタンスを再起動します。

**Oracle Internet Directory のステータスが正常に表示されない** Oracle Enterprise Manager Web ページに、Oracle Internet Directory (OID) のステータスが正常に表示されない場合があります。実際には OID が起動して実行中であるときに、OID が停止状態であると表示される場合があります。この問題は、Perl 実行ファイルが /usr/local/bin ディレクトリに存在していないことが原因で発生します。この問題を解決するには、次の手順を実行します。

1. which コマンドを使用して、システムで Perl 実行ファイルの位置を確認します。次に例を示します。  

```
> which perl
```

フルパス名が表示されます。ここでは、フルパス名が /perl\_path/perl であると想定します。
2. 次のとおり、表示されたパスへのリンクを /usr/local/bin/perl に設定します。  

```
> ln -s /perl_path/perl /usr/local/bin/perl
```
3. Oracle Enterprise Manager の管理 GUI を再起動します。

## Oracle Enterprise Manager Web Site での JAAS の構成

---

**注意：** この情報は、『Oracle9i Application プラットフォーム共通』の「Oracle Enterprise Manager Web Site リリース・ノート」の「Oracle Enterprise Manager Web サイトにおける JAAS の構成」の説明より優先されます。

---

JAAS を構成するには、次の手順を実行します。

1. `ORACLE_HOME/sysman/j2ee/config/jazn.xml` をテキスト・エディタで開きます。
2. `jazn.xml` ファイルの次のプロパティをコメントアウトします。

```
<property name="ldap.service" value="ldap://localhost:389"/>
<property name="ldap.user" value="cn=oracldadmin"/>
<property name="policymgr.provider" value="LDAP"/>
```

ご使用の環境で `localhost` が機能しない場合は、それを Oracle Internet Directory (OID) Server の実際の名前で置き換える必要がある場合があります。同様に、OID Server がデフォルトのポート 389 を使用しない場合は、ポート番号を置き換える必要がある場合があります。

3. OID Server へのログインに使用したパスワードを入力して、`ldap.password` プロパティを変更します。パスワードの前に感嘆符 (!) を追加して、暗号化してください。次に例を示します。

```
<property name="ldap.password" value="!manager1234"/>
```

4. 変更した `jazn.xml` ファイルを保存し、Oracle Enterprise Manager Web Site を再起動します。

---

**注意：** デフォルトでは、OID Server は `ias_admin` パスワードを認識します。後でこのパスワードを OID 管理用に変更した場合は、OID を使用して JAAS を管理するために、`jazn.xml` ファイルの `ldap.password` プロパティを使用してそのパスワードを再入力し、Oracle Enterprise Manager Web Site を再起動します。

---

**OEM Intelligent Agent が英語以外の環境で正常に動作しない場合がある** 英語以外の言語環境で、Tcl 変換エンコーディング定義ファイル `/usr/local/lib/tcl8.2/encoding/*.enc` がノードにインストールされている場合、OEM Intelligent Agent は英語以外の文字を適切に処理しない場合があります。その結果、OEM ジョブが正常に実行されないか、または不完全な文字列を戻す場合があります。前述のエンコーディング定義ファイルが存在しない場合、この問題は発生しません。

この問題を解決するには、空の Tcl 変換エンコーディング定義ファイルを次の場所に作成します。

```
$ORACLE_HOME/lib/tcl8.2/encoding/*.enc
```

これを行うには、次の手順を実行します。

1. 次のコマンドを実行します。

```
% cd $ORACLE_HOME/lib
% mkdir tcl8.2
% cp -pr /usr/local/lib/tcl8.2/encoding tcl8.2
% cd tcl8.2/encoding
```

2. 実行しているシェルに応じて、次のコマンドを実行します。

- C シェルまたは TC シェルを使用している場合：

```
% foreach file (*.enc)
foreach? cp /dev/null $file
foreach? end
```

- Korn シェルまたは B シェルを使用している場合：

```
% for file in *.enc; do
> cp /dev/null $file
> done
```

3. 空のエンコーディング定義ファイルの作成後、Oracle Intelligent Agent を次のとおり再起動します。

```
% agentctl stop
% agentctl start
```

Oracle Intelligent Agent を再起動する前に、環境変数 `NLS_LANG` および `LANG` を適切な値で定義する必要があります。

**クラスタ上での同時管理操作がサポートされない** Oracle9iAS リリース 9.0.2.1.0 では、クラスタ上での同時管理操作はサポートされていません。クラスタの構成情報は、セントラル・リポジトリに格納されています。クラスタのすべてのメンバーが、このリポジトリにアクセスできます。これによって、クラスタ間で構成の一貫性が保持されます。セントラル・リポジトリ内のオブジェクトはクラスタ間で共有されるため、これらのオブジェクトへの同時書き込みアクセスは許可されません。

**セカンダリ・インスタンスの Oracle Enterprise Manager のログイン問題** 最初のインスタンスの削除中にセカンダリ・インスタンスの OEM をアクティブにした後で、その OEM にログインすることはできません。この問題を解決するには、次の手順を実行します。

1. 最初のインスタンスを削除し、セカンダリ・インスタンスの OEM をアクティブにした後で、`ORACLE_HOME/bin` に移動し、新しいパスワードを使用して「`emctl set password...`」コマンドを発行します。
2. `emctl` を再起動しないかぎり、新しいパスワードを使用して OEM にアクセスすることはできません。また、パスワードが受け入れられないため、`emctl stop` は機能しません。OEM サービスが起動され実行中である場合、`emctl start` を直接発行すると、次のオプションが表示されます。

```
An instance of EMD is already running. Do you want to shut it down first [Y or N]
```

「Y」を選択し、[Enter] を押します。

次のステータスが表示されます。

```
Waiting for EM to initialize... Started.
```

3. 新しいパスワードを使用して Oracle Enterprise Manager Web Site にアクセスします。

また、その後に同じホストでインストールを実行する前に、この解決策を実行します。

**中国語環境の DAS で Microsoft Internet Explorer に障害が発生する** 簡体字中国語環境で Microsoft Internet Explorer 5.5 を使用すると、次の手順に進んだり、「ユーザー属性の構成」ページで「属性」を編集または削除することができません。次に例を示します。

1. `http://<hostname>:<port>/oiddas/` にログインします。
2. 「構成」タブ>「ユーザー・エントリ」タブをクリックします。
3. 2 つ目の手順「ユーザー属性の構成」に進みます。
4. 「次へ」、「編集」または「削除」をクリックします。このページでは、対応するページにアクセスできず、このページが表示されたままになります。ブラウザのステータス・バーに「ページでエラーが発生しました」と表示されます。

この問題を解決するには、Netscape 4.7 を使用して簡体字中国語環境の DAS コンポーネントにアクセスします。

**日本語のヘルプ・モジュールが正常に表示されない** 日本語環境で実行中に、日本語テキストの文字化けが発生します。これは、次の 3 つのヘルプ・モジュールに影響します。

- OID Server の管理性
- BC4J
- ヘルプ

この問題を解決するには、次の手順を実行します。

#### Oracle Internet Directory Server の管理性に対する解決策：

1. 修正するファイルを解凍します。

```
jar xvf ORACLE_HOME/sysman/webapps/emd/online_help/oidsm/oidsm_help_ja.jar oidsm.hs
```

2. テキスト・エディタを使用して、次の行のキャラクタ・セットが "Shift\_JIS" に指定されていることを確認します。

```
<xml version='1.0' encoding="Shift_JIS">
```

3. oidsm.hs を EUC フォーマットから SJIS フォーマットに変換します。
4. 修正済ファイルを置き換えます。

```
jar uvf ORACLE_HOME/sysman/webapps/emd/online_help/oidsm/oidsm_help_ja.jar oidsm.hs
```

#### Discoverer Oracle Enterprise Manager ヘルプ・システムに対する解決策：

1. 修正する次のファイルを解凍します。

```
jar xvf ORACLE_HOME/sysman/webapps/emd/online_help/disco/disco_help_ja.jar disco.hs
jar xvf ORACLE_HOME/sysman/webapps/emd/online_help/disco/disco_help_ja.jar toc.xml
```

2. テキスト・エディタを使用して、次の行のキャラクタ・セットが "Shift\_JIS" に指定されていることを確認します。

```
<xml version='1.0' encoding="Shift_JIS">
```

3. disco.hs および toc.xml を Unicode フォーマットから SJIS フォーマットに変換します。
4. 修正済ファイルを置き換えます。

```
jar uvf ORACLE_HOME/sysman/webapps/emd/online_help/disco/disco_help_ja.jar disco.hs
jar uvf ORACLE_HOME/sysman/webapps/emd/online_help/disco/disco_help_ja.jar toc.xml
```

5. 同様の方法で、この .jar ファイルから 9 つすべての HTML ファイルを解凍し、各ファイルの <head> セクション内に次の行を追加します。

```
<meta http-equiv=content-type content="text/html; charset=Shift_JIS">
```

#### BC4J に対する解決策：

1. 修正するファイルを解凍します。

```
jar xvf ORACLE_HOME/sysman/webapps/emd/online_help/bc4j/bc4j_help_ja.jar bc4j.hs
```

2. 次の行を削除します。

```
<view>
  <label>index</label>
  <type>oracle.help.navigator.keywordNavigator.KeywordNavigator</type>
  <data engine="oracle.help.engine.XMLIndexEngine">index.xml</data>
</view> Add the following lines.
```

3. 次の行を追加します。

```
<view>
  <label>contents</label>
  <type>oracle.help.navigator.tocNavigator.TOCNavigator</type>
  <data engine="oracle.help.engine.XMLTOCEngine">toc.xml</data>
</view>
```

4. 修正済ファイルを置き換えます。

```
jar uvf ORACLE_HOME/sysman/webapps/emd/online_help/bc4j/bc4j_help_ja.jar bc4j.hs
```

**Oracle Enterprise Manager Web Site のログ・ファイルが大きすぎる** デフォルトのロギング・レベルでは、Oracle Enterprise Manager Web Site の一部のログ・ファイルが非常に大きくなります。

この問題を解決するには、ロギング・プロパティ構成ファイルを編集し、Enterprise Manager ソフトウェアが使用するロギング・レベルを高くします。ロギング・レベルは、INFO、WARN または ERROR に設定できます。ロギング・レベルを INFO に設定すると、すべての情報メッセージがログ・ファイルに保存されます。WARN に設定すると、すべての警告メッセージがファイルに保存されます。ログ・ファイルに必要なディスク領域量を削減するには、次の手順を実行します。

1. <ORACLE\_HOME>/sysman/config/logging.properties に存在する logging.properties ファイルを編集します。
2. このファイル内のすべての「INFO」および「WARN」を「ERROR」に変更します。



3. ファイルを保存し、Oracle Enterprise Manager Web Site を再起動します。

**参照：** Oracle Enterprise Manager の再起動については、『Oracle9i Application Server 管理者ガイド』を参照してください。

**デフォルトのユーザー・マネージャが principals である場合の OC4J へのアプリケーションの配置** 各 OC4J インスタンスには default というグローバル・アプリケーションが存在します。このアプリケーションは、そのインスタンスに配置されたすべてのアプリケーションの親アプリケーションです。このアプリケーションは、デフォルトで jazn.xml をユーザー・マネージャとして使用します。

このアプリケーションのユーザー・マネージャを「principals」に変更し、Oracle Enterprise Manager を使用してアプリケーションを配置しようとする、「ユーザー・マネージャ」ページで変更を加えたときにその配置が失敗します。

そのため、OC4J インスタンスのデフォルト・アプリケーションのユーザー・マネージャを「principals」に変更した場合、将来、Oracle Enterprise Manager を使用してアプリケーションを配置するときに、ウィザードの「ユーザー・マネージャ」ページにアクセスしないでください。アクセスしないことによって、principals がユーザー・マネージャとして設定された状態で、アプリケーションが正常に配置されます。ただし、配置ウィザードのサマリー画面には、jazn.xml がユーザー・マネージャとして表示されます。その後、アプリケーションのユーザー・マネージャを変更する場合は、アプリケーション・プロパティ・ページにドリルダウンします。

**APAC、OC\_4J および IASTOP\_HELP.JAR の言語ヘルプ・ファイルが欠落している** APAC、OC\_4J および IASTOP\_HELP.jar の言語ヘルプ・ファイルが欠落しています。日本語ファイルではなく、Enlist ヘルプ・ファイルが次の jar ファイルに含まれています。

```
ORACLE_HOME/sysman/webapps/emd/online_help/apch/apch_help_ja.jar
ORACLE_HOME/sysman/webapps/emd/online_help/oc_4j/oc_4j_help_ja.jar
ORACLE_HOME/sysman/webapps/emd/online_help/iastop/iastop_help_ja.jar
```

**クラスタ上での同時管理操作がサポートされない** Oracle9iAS では、クラスタ上での同時管理操作はサポートされていません。クラスタの構成情報は、セントラル・リポジトリに格納されています。クラスタのすべてのメンバーが、このリポジトリにアクセスできます。これによって、クラスタ間で構成の一貫性が保持されます。セントラル・リポジトリ内のオブジェクトはクラスタ間で共有されるため、これらのオブジェクトへの同時書き込みアクセスは許可されません。

**Oracle9iAS のホームページでメトリクスおよびロールアップ統計を参照できない場合がある** ホスト「xyz.oracle.com」で Oracle9iAS のホームページにログインした場合、ロールアップ統計が表示されない場合があります。また、Oracle HTTP Server および OC4J インスタンス・ページでメトリクスが表示されない場合もあります。

この問題を解決するには、targets.xml を編集し、「xyz」というホスト名のすべてのインスタンスを「xyz.oracle.com」などの完全なホスト名およびドメイン名に設定します。一度 EMD を再起動すると、メトリクスおよびロールアップ・データを参照できるようになります。

**dcmctl と EMD を同時に使用して 1 つのインスタンスを管理できない** dcmctl と EMD の両方を同時に使用するのではなく、どちらか一方を使用して、Oracle9iAS インストールを管理する必要があります。dcmctl と EMD の両方を使用して同じ Oracle9iAS インスタンスを管理すると、並行性の問題が発生します。

## セキュリティの問題

Oracle Collaboration Suite のセキュリティに関連する既知の問題は次のとおりです。

- 認証ポイントまたは信頼できる証明書のリストにユーザー証明書を追加できない
- Oracle9iAS Web Cache ユーザーへのルート権限の制限
- JAZN デモ・データを LDAP にロードする必要がある
- Java Security Configuration Assistant が障害状態を正常に表示しない
- ユーザー依存の IASOBF および SSO Wallet のサポート

### 認証ポイントまたは信頼できる証明書のリストにユーザー証明書を追加できない

Wallet にサーバーの認証ポイントとしてユーザー証明書が含まれている場合、ユーザーがそのサーバーに接続すると、コア・ダンプが発生します。

Oracle Wallet の認証ポイントまたは信頼できる証明書のリストにユーザー証明書を追加しないことをお勧めします。かわりに、認証局（CA）の署名者の証明書▽を認証ポイントとしてインストールします。

### Oracle9iAS Web Cache ユーザーへのルート権限の制限

Oracle9iAS Web Cache をインストールするユーザーは、`root.sh` を実行すると、`webcachectl` 実行ファイルが `setuid` をトリガーしてルート・アクセスを取得させるため、ルート権限を取得できます。

ルート権限を制限するには、`webcachectl` 実行ファイルから `setuid` を削除します。次の場合には `setuid` が必要であることに注意してください。

- 1,024 未満の専用ポート番号が Oracle9iAS Web Cache のリスニング・ポートに使用されている場合
- 1,024 を超えるファイル記述子が Oracle9iAS Web Cache への接続に使用されている場合
- 現行の `webcachectl` ユーザーが Oracle9iAS Web Cache Manager の「Process Identity」ページ（「Cache-Specific Configuration」>「Process Identity」）で構成されたユーザーと一致していない場合

### JAZN デモ・データを LDAP にロードする必要がある

OC4J インスタンスのデフォルト・アプリケーションのユーザー・マネージャが JAZN LDAP に変更された場合、JAZN デモ・データを指定された LDAP データベースにロードする必要があります（詳細は、`$ORACLE_HOME/j2ee/home/jazn/install` の README ファイルを参照）。さらに、デフォルトの @ レルムを「jazn.com」に指定する必要があります。

前述の操作を実行しなかった場合、EM または `dcmctl` を介したデモの配置は失敗し、`java:comp/ServerAdministrator` の検索でエラーが発生します。

### Java Security Configuration Assistant が障害状態を正常に表示しない

Oracle9iAS Infrastructure および Oracle Collaboration Suite では、Java Security Configuration Assistant が、その構成タスクを正常に完了した場合でも障害をレポートすることがあります。このエラーは無視してもかまいません。Oracle Universal Installer の「構成ツール」画面で、障害の発生した Java Security Configuration Assistant の確認を再試行して、構成が正常に実行されたことを表示させることができます。

次の手順を実行して、Java Security が正しく設定されていることを確認します。

1. `$ORACLE_HOME/j2ee/home/config/jazn.xml` ファイルを開きます。`jazn/` 要素のプロパティ・プロパティが LDAP に設定され、同じ要素の位置プロパティが Oracle Collaboration Suite アプリケーションに使用される Oracle Internet Directory のホストおよびポートに設定されていることを確認します。

`$ORACLE_HOME/j2ee/home/config/jazn-data.xml` ファイルを開きます。このファイルに定義されているユーザーの資格証明が無効になっていることを確認します。

## ユーザー依存の IASOBF および SSO Wallet のサポート

Oracle HTTP Server を Oracle9iAS にインストールした後に SSL サーバーで正常に実行するには、Wallet を作成し、その Wallet 内に適切な認証局の署名がある証明書を含める必要があります。httpd.conf 内の SSLWallet ディレクティブが、インストールで提供されるデフォルトの Wallet ではなく、この新しい Wallet を指していることを確認します。次のいずれかの操作を正常に実行できなかった場合は、Oracle HTTP Server が起動しません。

1. 次のコマンドを実行して、この新しい Wallet のパスワードを無効にします。

```
iasobf -p password root
```

また、Wallet Password ディレクティブ (WalletPassword obfuscatedPassword など) を使用して、この無効にしたパスワードを httpd.conf ファイルに含めます。Wallet のパスワードをクリアテキストで httpd.conf に含めることはできますが、この方法はお勧めしません。

2. ルート・ユーザーとして、この新しい Wallet を SSO Wallet にします。

**参照：**『Oracle9i Application Server セキュリティ・ガイド』を参照してください。

## コンポーネントの問題

この章では、Oracle Collaboration Suite に関連するコンポーネントの問題について説明します。この章の内容は次のとおりです。

- [Oracle Email の問題](#)
- [Oracle Files の問題](#)
- [Oracle HTTP Server の問題](#)
- [Oracle9iAS Portal の問題](#)
- [Oracle9iAS Web Cache の問題](#)
- [Oracle9iAS Single Sign-On の問題](#)
- [Oracle Internet Directory の問題](#)
- [Oracle9iAS Containers for J2EE の問題](#)

## Oracle Email の問題

### 添付ファイルとして転送されるメッセージ

Thin クライアントでは、添付としてのメッセージの転送はデフォルトでは行われません。

解決策: 「添付として」 オプションを選択する必要があります。

1. 「作業環境」 > 「電子メール」 > 「メッセージ・オプションの構成」 をクリックします。
2. 「添付として」 を選択します。
3. 「送信」 をクリックします。

### データベース・リスナー

HP-UX システムでは、外部プロシージャ・エージェントのコールアウトに `extproc32` を使用するよう  
に、データベース・リスナーを構成する必要があります。

1. データベース・インストールの `listener.ora` ファイルを変更します。
  - a. 次のとおり入力して、プログラム・パラメータを `extproc` でなく、`extproc32` に設定します。

```
(program=extproc32)
```
  - b. 次の行を追加します。

```
(ENVS="EXTPROC_DLLS=ORACLE_HOME/lib32")
```
2. 次のとおり入力して、環境変数 `SHLIB_PATH` を設定します。

```
export SHLIB_PATH=ORACLE_HOME/lib32 ( ksh )
setenv SHLIB_PATH ORACLE_HOME/lib32 ( csh )
```
3. リスナーを再起動します。

## Oracle Files の問題

Oracle Files に関連する問題は次のとおりです。

- 名前にマルチバイトを含むファイルまたはフォルダを検索できない
- マルチバイトのファイル名を持つファイルを Oracle Files にアップロードできない
- Netscape 4.7x では、Oracle Files にマルチバイトのフォルダを作成できない
- アンダースコア ( `_` ) を含むマルチバイト・キャラクタのユーザー名
- Oracle Enterprise Manager で Oracle Files ターゲットが表示されない

## 名前にマルチバイトを含むファイルまたはフォルダを検索できない

エンド・ユーザーは、Oracle Files ポートレットまたは Oracle Collaboration Suite Search ポートレットから、名前にマルチバイト・キャラクタを含むファイルやフォルダを検索できません。

解決策：エンド・ユーザーは、Oracle Files アプリケーションまたは Oracle Collaboration Suite Search アプリケーションに直接移動して、正常に検索を行うことができます。

## マルチバイトのファイル名を持つファイルを Oracle Files にアップロードできない

ファイル名にマルチバイト・キャラクタが含まれている場合、エンド・ユーザーは、Netscape 4.7x ブラウザ・インタフェースを使用して、そのファイルを Oracle Files にアップロードできません。

解決策：Microsoft Internet Explorer 5.x 以上を使用します。

## Netscape 4.7x では、Oracle Files にマルチバイトのフォルダを作成できない

エンド・ユーザーは、Oracle Files での新しいフォルダの作成時、フォルダ名フィールドにマルチバイト・キャラクタを入力できません。

解決策：Microsoft Internet Explorer 5.x 以上を使用します。

## アンダースコア ( \_ ) を含むマルチバイト・キャラクタのユーザー名

エンド・ユーザーは、アンダースコア ( \_ ) およびマルチバイト・キャラクタを含むユーザー名では、Oracle Files にログインできません。

解決策：マルチバイト・キャラクタを含むユーザー名を持つ必要がある場合、これらのユーザー名にアンダースコア ( \_ ) を含めないでください。

## Oracle Enterprise Manager で Oracle Files ターゲットが表示されない

Oracle Files をインストールして構成した後、Oracle Files ターゲットが不明になる場合があります。これは、targets.xml ファイルが、Oracle Enterprise Manager インタフェースにターゲットを含めないためです。ホスト名 1810 を使用して Oracle Enterprise Manager Web Site にログインすると、Oracle Files ターゲットが不明になる場合があります。

解決策：Oracle Enterprise Manager を停止して、Oracle Files Configuration Assistant を再実行します。

- Oracle Enterprise Manager Web Site を終了するには、次のコマンドを入力します。  
emctl stop
- Oracle Files Configuration Assistant を実行するには、次のコマンドを入力します。  
\$ORACLE\_HOME/ifs/files/bin/ifscs
- Oracle Enterprise Manager Web Site を再起動するには、次のコマンドを入力します。  
emctl start

## Oracle HTTP Server の問題

Oracle HTTP Server に関連する既知の問題は次のとおりです。

- [1024 を超える Oracle HTTP Server プロセスの実行](#)
- [インストール後の FASTCGI エラー・メッセージの無視](#)
- [1024 を超える Oracle HTTP Server プロセスの実行](#)
- [インストール後の FASTCGI エラー・メッセージの無視](#)
- [リダイレクト後にレポートされる不正確なホスト・ヘッダー](#)
- [2 つの OSSO 保護サーバーが同じホスト上に存在する場合に発生するエラー](#)
- [opmnctl stopproc コマンドがハングアップする場合がある](#)
- [OJSP が使用するメタデータ・ディレクトリの保護に関する情報](#)

- 仮想ホストを不適切に構成すると、DAD が破損する可能性がある

## 1024 を超える Oracle HTTP Server プロセスの実行

1024 を超える Oracle HTTP Server プロセスを OC4J インスタンスにアクセスしている同一のボックスで実行する場合、`mod_oc4j.conf` 内の `Oc4jCacheSize` ディレクティブを 0（ゼロ）に設定します。これによって、`mod_oc4j` と OC4J インスタンスの間の永続接続が使用不可になり、パフォーマンスが向上します。

## インストール後の FASTCGI エラー・メッセージの無視

Oracle9iAS のインストール後、次のエラー・メッセージが `$ORACLE_HOME/Apache/Apache/logs` 内の `error_log` ファイルに表示される場合があります。

```
[Fri Apr 5 15:17:50 2002] [error] (2)No such file or directory: FastCGI: access for server
(uid -1, gid 10) failed: read not allowed by group
[Fri Apr 5 15:17:50 2002] [error] (2)No such file or directory: FastCGI: can't create dynamic
directory "/tmp/fcgi_10258/dynamic": access for server (uid -1, gid 10) failed: read not
allowed by group
```

これらのエラー・メッセージは問題ではなく、FastCGI の動作にも影響しません。これらのエラー・メッセージは、インストール中に `httpd.conf` 内のディレクティブを再度順序付けすることによって発生します。これらのメッセージが発生しないようにするには、`httpd.conf` 内で、ディレクティブ `User` および `Group` をファイルの末尾から FastCGI サーバー・ディレクティブの前に移動させます。

## リダイレクト後にレポートされる不正確なホスト・ヘッダー

Infrastructure の Single Sign-On Server と Middle-Tier が同じマシン上（異なる Oracle ホーム）にインストールされている場合、Microsoft Internet Explorer がリダイレクト後に不正確なホスト・ヘッダーをレポートします。この不正確なホスト・ヘッダーが原因で、Single Sign-On Server から元のサーバーにリダイレクトした後、保護リソースにアクセスしようとすると、`mod_ossso` でエラーが発生します。Internet Explorer で「更新」をクリックすると、セッションは正常に続行します。この問題は、次のいずれかの条件が満たされている場合は発生しません。

- Microsoft Internet Explorer を使用しない。
- 保護リソースおよび Single Sign-On Server が、異なるサーバー名を持つか、または異なるホスト上の Oracle HTTP Server インスタンスの背後で実行している。これが最も一般的な配置です。
- Single Sign-On Server および保護リソースが、1 つの Oracle HTTP Server ポートの背後で実行している。

## 2 つの OSSO 保護サーバーが同じホスト上に存在する場合に発生するエラー

Oracle9iAS の Infrastructure インスタンスと Middle-Tier を同じマシンにインストールすると、Microsoft Internet Explorer が様々なエラーをレポートし、リダイレクト後に不正確なホスト・ヘッダーが渡される場合があります。特に、Single Sign-On Server を介して Middle-Tier インスタンスにログイン後、Infrastructure インスタンスにエラーをリダイレクトするリンクをクリックすると、OSSO エラー・ページが表示されます。「戻る」ボタンをクリックすると、元のページで操作を続行できます。

## opmnctl stopproc コマンドがハングアップする場合がある

プロセスが中断または異常終了した直後にそのプロセス内で `opmnctl stopproc` コマンドを発行すると、`opmnctl stopproc` コマンドがハングアップする場合があります。これによって、プロセスに関連する他のコマンドを発行できなくなる場合があります。

この場合、次のコマンドを発行します。

```
opmnctl reload
opmnctl stopproc
```

`dcmctl` を使用している場合、`dcmctl stop` コマンドはハングアップしませんが、失敗します。この問題を解決するには、次のコマンドを発行します。

```
dcmctl updateconfig opmn
dcmctl stop
```

## OJSP が使用するメタデータ・ディレクトリの保護に関する情報

OJSP が使用するメタデータ・ディレクトリを保護するには、次の手順を実行します。

1. 次の行を httpd.conf ファイルに追加します。

```
<DirectoryMatch /WEB-INF/>
Order deny,allow
Deny from all
</DirectoryMatch>
```

2. ojsp.conf ファイル内の次の行を◇確認◇します。

```
<Location /_pages/>
Order deny,allow
Deny from all
</Location>
```

これらの行を次のように変更します。

```
<DirectoryMatch /_pages/>
Order deny,allow
Deny from all
</DirectoryMatch>
```

## 仮想ホストを不適切に構成すると、DAD が破損する可能性がある

インストール後、EMD コンソールの「Advanced Server Properties」セクションを使用するか、または httpd.conf ファイルでテキスト・エディタを使用して、httpd.conf ファイルに仮想ホストを構成する場合、次の手順を実行します。

1. VirtualHosts のサーバー定義が Port、Listen および ServerName ディレクティブの後にあることを確認します。適切に設定された「Virtual Host」セクションの単純な例を次に示します。

```
#
# these are set at the end of the httpd.conf file after the IAS installation
occurs
#
Port 7778
ServerName someServer.mycompany.com
Listen 7779
#
# these lines were added manually to create a virtualHost
#
NameVirtualHost 1.2.3.4
<VirtualHost 1.2.3.4>
    DocumentRoot /u01/app/oracle/product/ias9020_portal/Vhost1.htdocs
    ServerName Vhost1.mycompany.com
</VirtualHost>
```

2. 通常のテキスト・エディタを使用してファイルに変更を加える場合、次の dcmctl ユーティリティを使用して変更を更新します。

```
<ORACLE_HOME>/dcm/bin/dcmctl updateConfig
```

変更の更新は、EMD コンソールを介してファイルを編集した場合は自動的に行われます。

## Oracle9iAS Portal の問題

Oracle9iAS に関連する既知の問題は次のとおりです。

- 同じホストに 2 つの Oracle HTTP Server が存在する場合に発生するログインの問題
- 英語以外の PL/SQL ファンクションおよびプロシージャの作成
- Portal Monitoring Services へのリンクが機能しない
- ASCII 以外の文字を使用した場合、NLS が認証されない
- Oracle Enterprise Manager を介した Oracle9iAS Portal の構成が失敗する

- Oracle Portal プロバイダの登録に失敗する
- テンプレートが 26 ページ以上で使用された場合、Oracle9iAS Web Cache のエラーが発生する
- Cookie 検証の IP チェックを無効にする
- フォーム作成時における表およびビューの LOV の表示に関する問題
- WebDAV クライアントを使用して項目またはページを作成できない

## 同じホストに 2 つの Oracle HTTP Server が存在する場合に発生するログインの問題

2 つの Oracle9iAS Oracle HTTP Server が 1 台のマシン上で実行されている場合（Infrastructure および Portal と Wireless の Middle-Tier の両方が 1 台のマシンにインストールされている場合など）、Microsoft Internet Explorer（MSIE）ブラウザを使用すると、Portal にログインできません。この問題は、MSIE バージョン 5.5 および 6.0 で確認されています。この問題は、ブラウザのリダイレクトが、Oracle9iAS Single Sign-On Server で使用されるポートから、Oracle9iAS Web Cache で使用されるポートに発行された場合に発生し、Oracle9iAS Portal に障害を発生させます。MSIE は、リダイレクトを受信すると、Host: header に誤って宛先ポートではなく最初のポートを設定します。この問題は、Netscape Navigator（バージョン 4.6 および 4.7）では発生しません。MSIE でこのエラーが発生すると、ログインの試行後に次のいずれかのメッセージが表示されます。

エラー：wwsec\_app\_priv.process\_signonde 予期しないエラーが発生  
(ORA-06502: PL/SQL: 数値または値のエラー（文字列バッファが小さすぎます。）が発生しました）  
(WWC-41417)

または

エラー：認証情報の解読に失敗しました。原因は、データが破損しているか、このアプリケーション構成の暗号キーが不正であるか、不正なアクセスが試みられたためと考えられます。管理者に通知してください。(WWC-41454)

MSIE は SSL モードまたは非 SSL モードのいずれかで不正な Host: header を設定しますが、この問題は SSL モードでのみ発生します。これは、非 SSL モードでは、Oracle9iAS Web Cache がポートを汎用のデフォルト HTTP ポートにマップするように設定されているためです。この問題を解決するには、2 つのインストール・タイプに 2 台の異なるマシンを使用します。

## 英語以外の PL/SQL ファンクションおよびプロシージャの作成

ブラウザから Oracle9iAS Portal を使用する場合、英語以外の言語で PL/SQL ファンクションおよびプロシージャを作成できません。これらを作成するには、SQL\*Plus を使用する必要があります。

## Portal Monitoring Services へのリンクが機能しない

Portal Monitoring Services へのリンク（「管理」タブに表示されるリンク）が機能しません。

この問題を解決するには、次のブロックを切り取り、PORTAL スキーマと同じデータベース上で、**sys** または **portal** として接続されている SQLPLUS セッションに貼り付けます。Portal スキーマ名が PORTAL ではない場合、スクリプトを適宜更新する必要があります。太字のテキストを参照してください。

```
/*
*
* This patch script inspects and updates the Portal Service Monitoring
* link (to the Oracle Enterprise Manager Portal Target) on the
* Portal Administer Tab. It strips the link of redundant extra host
* entries, if necessary i.e. the URL on 9.0.2 incorrectly has the
* following parameters:
*
$target=<iASName>.<host>%5F<host>%5FPortal%3Aportal%3A7778$ctxName1=<iASName>.<host>%5F<host>

* it should be of the form:
* $target=<iASName>.<host>%5FPortal%3Aportal%3A7778$ctxName1=<iASName>.<host>

*
* There is logic in the script to prevent it running twice.
```



```

* NOTE: if running against a PORTAL schema named something other than
* PORTAL please update the two PORTAL schema references accordingly
*/

DECLARE
    CURSOR c1 is
        SELECT url FROM PORTAL.wwptl_other_services_link$
            where NAME='MONITORING';
    workerURL VARCHAR2(2000);
    newURL VARCHAR2(2000);
    host VARCHAR2(1000);
    testIndex NUMBER;
    indexOfStartClip NUMBER;
    indexOfEndClip NUMBER;
    urlLength NUMBER;
BEGIN
    OPEN c1;
    FETCH c1 INTO workerURL;
    indexOfEndClip:= INSTR (workerURL,'%5FPortal%3',1,1) ;
    urlLength := LENGTH(workerURL);
    newURL := SUBSTR (workerURL, 0, indexOfEndClip-1);
    indexOfStartClip:= INSTR (newURL,'%5F',-1,1) ;
    /*****
    * Test to see if the patch has already been run
    * and if so don't do anything
    * if the ias$ string is present the extra host has
    * already been clipped
    *****/
    host := SUBSTR (newURL, indexOfStartClip+3, indexOfEndClip);
    testIndex := INSTR (host,'ias$',1,1);
    IF testIndex = 0
    THEN
        newURL := SUBSTR (newURL, 0, indexOfStartClip);
        workerURL := SUBSTR(workerURL,
            indexOfEndClip+1,urlLength-indexOfEndClip);
        indexOfStartClip:= INSTR (workerURL,'%5F',-1,1) ;
        workerURL := SUBSTR(workerURL, 0,indexOfStartClip-1);
        newURL := newURL||workerURL||'?event=doLoad';
        update PORTAL.wwptl_other_services_link$ set URL = newURL where NAME =
        'MONITORING';
        COMMIT;
    END IF;
    CLOSE c1;
END;
/

```

次に、不正確なリンクを含む既存のページをフラッシュするために、mod\_plsql キャッシュをクリアして Oracle9iAS Web Cache を再起動します。これを行うには、次の手順を実行します。

1. plsql ディレクトリの内容を削除して、mod\_plsql キャッシュを空にします。

---

**警告： plsql ディレクトリの内容のみ削除してください。**

---

```
rm -fr ORACLE_HOME/Apache/modplsql/cache/plsql/*
```

2. Web Cache を再起動します。

```
cd ORACLE_HOME/webcache/bin
./webcachectl restart
```

---

**注意：** 代替の解決策は、Oracle Enterprise Manager インタフェースに直接アクセスし、Portal Target を含む適切な Application Server を選択して Portal インスタンスに移動し、Application Server ページのコンポーネント・リストから Portal Target を選択することです。 URL は次のとおりです。

`http://host.domain:1810/emd/console/targets`

---

## ASCII 以外の文字を使用した場合、NLS が認証されない

ユーザー名に ASCII 以外の文字が含まれている場合、NLS が Oracle9iAS Single Sign-On によって認証されません。

ASCII 以外のユーザー名を使用するには、Oracle9iAS Syndication Server を実行している OC4J JVM のデフォルト・エンコーディングが、Oracle9iAS Single Sign-On Login Server のキャラクタ・セットと互換性がある必要があります。JVM のデフォルト・エンコーディングは、OC4J が起動されたロケールによって決定されます。Oracle9iAS Single Sign-On Login Server のキャラクタ・セットは、Oracle9iAS Single Sign-On Login Server が配置されたデータベースのキャラクタ・セットです。

たとえば、OC4J が日本語のロケール環境に配置され、そのロケールのキャラクタ・セットが Shift-JIS である場合、JVM のデフォルト・エンコーディングは SJIS (Shift-JIS キャラクタ・セットの Java エンコーディング名) となります。この場合、日本語のマルチバイト・ユーザー名を使用するために、Oracle9iAS Single Sign-On Login Server のデータベース・キャラクタ・セットは JA16SJIS (SJIS 用の Oracle のキャラクタ・セット) にする必要もあります。

## Oracle Enterprise Manager を介した Oracle9iAS Portal の構成が失敗する

Oracle9iAS Portal をインストール時に構成せず、後で Oracle Enterprise Manager を介して構成する場合、Portal の構成が失敗し、次のエラーが発生する場合があります。

"The component failed during the configuration operation. Correct any errors reported on this page and in the error logs and retry the operation."

この問題を解決するには、次の手順を実行して、インストール後に Oracle9iAS Portal を手動で構成します。

1. `ORACLE_HOME/assistants/opca` ディレクトリから `ptlem.sh` スクリプトを実行します。
2. OC4J 配置ツールを実行して Portal を配置します。OC4J 配置ツールを手動で実行する方法については、『Oracle Collaboration Suite 管理者ガイド』を参照してください。

## Oracle Portal プロバイダの登録に失敗する

Infrastructure と Middle-Tier の両方が同じマシンにインストールされており、そのマシンで実行する EMD が Infrastructure の Oracle ホームを参照している場合、Wireless サイトから「Wireless Web tool のための Oracle Portal プロバイダの登録」および「Wireless Customization のための Oracle Portal プロバイダの登録」を実行すると、「`java.lang.NoClassDefFoundError`」エラーが表示されます。

この問題を解決するには、Infrastructure インストールの `orion-web.xml` 内にある Oracle9iAS Portal の jar ファイル `pdk.java.jar` および `ptlshare.jar` が Middle-Tier インストールをさしていることを確認します。

たとえば、Infrastructure が `/private/ias20_infra/` にインストールされ、Middle-Tier が `/private/ias20_midtier/` にインストールされている場合、EMD の `orion-web.xml` 内のエントリは次のようになります。

```
<classpath path="/private/ias20_infra/portal/jlib/pdkjava.jar"/>
<classpath path="/private/ias20_infra/portal/jlib/ptlshare.jar"/>
```

これらのエントリを次のエントリに置き換える必要があります。

```
<classpath path="/private/ias20_midtier/portal/jlib/pdkjava.jar"/>
<classpath path="/private/ias20_midtier/portal/jlib/ptlshare.jar"/>
```

変更を反映するには、`opmn` プロセスを再起動します。

## テンプレートが 26 ページ以上で使用された場合、Oracle9iAS Web Cache のエラーが発生する

テンプレートが 26 ページ以上で使用された場合、次のいずれかのエラーが発生します。

- Web Cache 接続をオープンできません。Portal の「Web キャッシュ接続を開くことができませんでした。Portal の Web キャッシュ使用設定がオンになっていても、Web キャッシュがダウンしている可能性があります。」(WWC-40019)
- 一般的な無効性メッセージ処理の例外です。

ORA-06502: PL/SQL: 数値または値のエラーが発生しました (WWC-40018)

これは、無効性メッセージ処理での既知の例外によって発生します。この問題を解決するには、Oracle9iAS Portal で Web Cache を「OFF」にします。

Oracle9iAS Portal の Oracle9iAS Web Cache に関連する問題のトラブルシューティングの詳細は、Oracle9iAS Portal Configuration Guide の第 8 章を参照してください。

## Cookie 検証の IP チェックを無効にする

Oracle9iAS がインストールされているネットワーク構成によっては、Cookie 検証の IP チェックを無効にする必要がある場合があります。

この処置は、Portal サーバーへの HTTP アクセスが、Portal のコール時にそれぞれが同じ IP アドレスを使用しない一連のプロキシを介して行われている場合に必要です。この場合、セッションの Cookie を作成するログイン・リクエストは 1 つのプロキシを介してルーティングされ、後続のリクエストは他のプロキシを介してルーティングされる場合があります。これによって、IP チェック中にセキュリティ違反が発生し、ページへのアクセスが拒否されます。

Cookie 検証の IP チェックの状態を変更するには、Portal スキーマと SSO スキーマの両方のデータを、[表 2-7](#) に示すとおりに更新します。

表 2-7 IP チェックの有効化および無効化

処置	Portal スキーマ	SSO スキーマ
IP チェックの有効化	<pre>update wwsec_enabler_config_info set url_cookie_ip_check = 'Y'; commit;</pre>	<pre>update wwsec_enabler_config_info set url_cookie_ip_check = 'Y'; update wwsso_ls_configuration_info set cookie_ip_check = 'Y'; commit;</pre>
IP チェックの無効化	<pre>update wwsec_enabler_config_info set url_cookie_ip_check = 'N'; commit;</pre>	<pre>update wwsec_enabler_config_info set url_cookie_ip_check = 'N'; update wwsso_ls_configuration_info set cookie_ip_check = 'N'; commit;</pre>

## フォーム作成時における表およびビューの LOV の表示に関する問題

表またはビュー（Portal DB プロバイダ用）に基づいてフォームを作成する場合、フォームの基礎となる表およびビューを指定します。使用可能な表およびビューのリストを表示するために「LOV」アイコンをクリックすると、かわりに次のメッセージが表示される場合があります。

### No Response from Application Web Server

There was no response from the application web server for the page you requested. Please notify the site's webmaster and try your request again later.

この問題を解決するには、「表またはビュー」フィールドに SCOTT.EMP などの名前 (schema.objectname) を直接入力します。

## WebDAV クライアントを使用して項目またはページを作成できない

WebDAV クライアントを使用して項目やページを作成またはコピーすることはできません。この問題によって、同じ名前で内容がない（0（ゼロ）バイトの）項目が複製されます。Oracle Portal UI を介して作成したすべての標準ページおよびファイル形式の項目を参照することはできます。

## Oracle9iAS Web Cache の問題

Oracle9iAS Web Cache に関連する既知の問題は次のとおりです。

- クライアントのリクエスト URL のホスト名のバリエーションを定義する必要がある
- DAVOraWebCacheReadOnly パラメータが機能しない
- Web Cache Manager で Wallet のディレクトリを変更できない
- キープ・アライブ設定での Internet Explorer の制限
- EMD を使用した Oracle9iAS Web Cache の起動が失敗する

### クライアントのリクエスト URL のホスト名のバリエーションを定義する必要がある

リクエスト URL のホスト名が明確でない場合（`http://myhost:7777/ojspdemodemos/fragment.jsp` など）、Oracle9iAS Web Cache がクラッシュする場合があります。

この問題を回避するには、すべての可能なサイト名のバリエーションを、サイト別名とともに「Site Definitions」ページ（「General Configuration」>「Site Definitions」）に指定します。

Web Cache は、ドキュメントのリクエストを受信すると、次のいずれかを参照します。

- Host リクエスト・ヘッダー・フィールド
- リクエストされた URL のホスト部分
- 宛先サイトを判別するための `<esi:include>` タグ

次に、Web Cache は、構成されたサイト設定およびマッピング（別名）を調べ、サイトがサポートされているかどうかを判別します。リクエストにホスト情報が含まれていない場合、Web Cache はそのリクエストをデフォルト・サイトに送信します。

### DAVOraWebCacheReadOnly パラメータが機能しない

DAVOraWebCacheReadOnly パラメータは、`httpd.conf` ファイルに指定されている場合、Web Cache バージョン 9.0.2.0.0 では機能しません。

この問題を解決するには、『Oracle HTTP Server 管理者ガイド』の OraDAV モジュールの構成の章に示すとおり、`httpd.conf` ファイルの `<LimitExcept>` ディレクティブを使用します。GET、HEAD および OPTIONS リクエストを除くすべてのメソッドに、ある位置へのアクセス制限を適用すると、DAVOraWebCacheReadOnly パラメータを使用できます。ただし、エンド・ユーザーは、Web Cache が使用されていない場合でも、常に GET、HEAD および OPTIONS リクエストに制限されることに注意してください。

### Web Cache Manager で Wallet のディレクトリを変更できない

Oracle9iAS Web Cache Manager では、「System Default Location」から Wallet のディレクトリを変更できません。Wallet のディレクトリを変更するには、`ORACLE_HOME/webcache/webcache.xml` を次のとおり変更する必要があります。

1. ホストの CACHE 要素の位置を確認します。
2. OSWALLET 要素が `webcache.xml` に（要素または空の要素として）存在する場合、テキストを新しい Wallet のディレクトリに変更します。

OSWALLET 要素が存在しない場合、RESOURCELIMITS 要素と CALYPSONETINFO 要素の間に作成する必要があります。

例 2-1 に、OSWALLET 要素の例を示します。

**例 2-1 webcache.xml 内の OSWALLET 要素（抜粋）**

```
<CACHE NAME="myhost.us.oracle.com-WebCache" ORACLEHOME="/u1/ora9ias" ...>
...
<RESOURCELIMITS MAXINBOUNDCONNECTIONS="700" MAXCACHESIZE_MB="500"/>
<OSWALLET>/u1/ora9ias/webcache/wallets/default</OSWALLET>
<CALYPSONETINFO/>
...
</CACHE>
```

**キープ・アライブ設定での Internet Explorer の制限**

HTTPS リクエストの場合、Internet Explorer 5.5 は、Oracle9iAS Web Cache が接続のクローズを試行した後でリクエストを送信する場合があります。この問題を解決するには、Oracle9iAS Web Cache Manager の「Network Timeouts」ページ（「Cache-Specific Configuration」>「Network Timeouts」）で、「Keep-Alive Timeout」を 0（ゼロ）に設定することによってキープ・アライブを無効にします。これによって、ブラウザがレスポンスを戻した後、Oracle9iAS Web Cache とクライアントの間の接続がクローズされます。

**EMD を使用した Oracle9iAS Web Cache の起動が失敗する**

Oracle9iAS Web Cache をインストール時に構成せずに、後で EMD を使用して構成する場合、Oracle9iAS Web Cache が起動しない場合があります。この問題は、同じマシン上で実行している他の Oracle9iAS Web Cache とのポートの競合が原因で発生する場合があります。

この問題を解決するには、Oracle9iAS Web Cache 管理 GUI にログインして Oracle9iAS Web Cache を起動し、SSL および非 SSL 用の Oracle9iAS Web Cache リスニング・ポート番号を変更します。Oracle9iAS Web Cache がインストール中に構成されなかったため、httpd.conf 内の PORT ディレクティブを Oracle9iAS Web Cache ポート番号に変更するには、いくつかの追加の構成手順を実行する必要があります。

**参照：**『Oracle9i Application Server プラットフォーム共通』の「Oracle HTTP Server のディレクティブ」の項を参照してください。

また、サイトの構成によっては、ORACLE\_HOME/webcache/webcache.xml および ORACLE\_HOME/sysman/emd/targets.xml の Oracle9iAS Web Cache リスニング・ポートの値も変更します。

**Oracle9iAS Single Sign-On の問題**

Oracle9iAS Single Sign-On に関連する既知の問題は次のとおりです。

- [Oracle9iAS Single Sign-On 対応のアプリケーションからのログアウト](#)
- [ssocfg.sh スクリプトの更新情報](#)
- [Single Sign-On Server への GET 以外のリクエスト](#)

**Oracle9iAS Single Sign-On 対応のアプリケーションからのログアウト**

Oracle9iAS Single Sign-On 対応のアプリケーションからログアウトすると、Oracle9iAS Single Sign-On 非対応のアプリケーションがオープンしたままになります。また、Oracle9iAS Single Sign-On 非対応のアプリケーションからログアウトすると、Oracle9iAS Single Sign-On 対応のアプリケーションがオープンしたままになります。

すべてのアプリケーションが Oracle9iAS Single Sign-On に統合されているわけではありません。アプリケーションが Oracle9iAS Single Sign-On に統合されていない場合、そのアプリケーションのログアウト機能も統合されていません。これは、ユーザーがログアウト・ボタンをクリックすると、そのアプリケーションからのみログアウトすることを意味します。Oracle9iAS Single Sign-On に統合されたアプリケーションからはログアウトしません。ユーザーからは、すべての Oracle9i Application Server からログアウトしたようにみえますが、実際はログアウトしていません。反対に、ユーザーが Oracle9iAS Single Sign-On 対応アプリケーションのログアウト・ボタンをクリックすると、すべての Oracle9iAS Single Sign-On 対応アプリケーションからログアウトしますが、Oracle9iAS Single Sign-On 非対応のアプリケーションからはログアウトしません。

## ssocfg.sh スクリプトの更新情報

ssocfg.sh スクリプトは、Single Sign-On Server のホスト、ポートまたはプロトコルを変更するために使用されます（Oracle9iAS Single Sign-On Administrator's Guide の第 2 章を参照）。スクリプトは、環境変数 LD\_LIBRARY\_PATH に ORACLE\_HOME/lib 値が含まれている場合にのみ実行できます。

## Single Sign-On Server への GET 以外のリクエスト

Oracle9iAS では、認証のために Single Sign-On Server に転送されるリクエストに、HTTP GET メソッドのみを使用できます。OSSO を使用しているアプリケーションが GET 以外のメソッドを使用する場合、認証される最初のページは GET である必要があります。また、GET 以外の後続のリクエストが Single Sign-On Server に転送されないように、アイドル・タイムアウト機能を無効にする必要もあります。

## Oracle Internet Directory の問題

Oracle Internet Directory に関連する既知の問題は次のとおりです。

- [Oracle Internet Directory Server](#) が追加の情報をログに記録する場合がある
- [Oracle Internet Directory](#) ポート番号の更新情報
- [Portal](#) のインストールには権限が不十分

### Oracle Internet Directory Server が追加の情報をログに記録する場合がある

EMD の LDAP メイン・ページにアクセスすると、Oracle Internet Directory Server が、追加の情報をログ・ファイル oidldap00.log に記録する場合があります。このログ・ファイルは無視してもかまいません。

### Oracle Internet Directory ポート番号の更新情報

インストールの最後に、デフォルトの非 SSL ポート 389 および SSL ポート 636 で Oracle Internet Directory Server を起動するには、次の条件が満たされている必要があります。

- デフォルトのポート 389 および 636 が使用中ではない
- /etc/services ファイルに、これらのポート番号を含む行がない

これらの条件のいずれかが満たされない場合、Oracle Internet Directory Server は、ORACLE\_HOME/ldap/install/oidca.out ファイルに記録された異なるポート上で起動されます。

### Portal のインストールには権限が不十分

Oracle9iAS では、共有 Oracle Internet Directory に対して複数の Oracle9iAS コンポーネントをインストールできます。この場合、Oracle Internet Directory 管理者は、Oracle Internet Directory スーパー・ユーザー権限が必要ないように、Oracle9iAS 管理者として Oracle9iAS Portal をインストールします。現在、Oracle Internet Directory での Oracle9iAS 管理者権限があれば、ほとんどのコンポーネントおよび Oracle9iAS の Middle-Tier をインストールできます。ただし、Oracle9iAS Portal のインストールを実行するには、Oracle Internet Directory スーパー・ユーザー権限が必要です。これは、Oracle Internet Directory の不正確なアクセス制御ポリシーによって、Oracle9iAS 管理者としてのインストールが制限されるためです。

この問題を解決するには、Oracle Internet Directory のいずれかのノードでアクセス制御ポリシーを変更します。これは、Oracle Internet Directory のインストール後、Oracle9iAS 管理者として Oracle9iAS Portal のインストールを試行する前に行う必要があります。また、Oracle9iAS Portal のインストールを実行するために使用される Oracle Internet Directory の ID は、次のグループのメンバーである必要があります。

```
cn=OracleDASAdminGroup,cn=Groups,<DN of Default Subscriber Oracle Context>
# Ldif script to change the ACL policy on Groups container.
dn: cn=Groups, <Default Subscriber DN>
changetype: modify
replace: orclEntryLevelACL
orclEntryLevelACL: access to entry by group="cn=oracledascreategroup,
cn=groups,%s_OracleContextDN%" added_object_constraint=(objectclass=orclgroup)
(browse, add) by group="cn=iASAdmins, cn=Groups,<DN of subscriber Oracle
Context>" (browse, add) by * (none)
```

アクセス制御ポリシーを変更するには、次の手順を実行します。

1. 前述の `ldif` スクリプトの `<default Subscriber DN>` を、デフォルト・サブスクライバの実際の DN に置き換えます。
2. `<DN of subscriber Oracle Context>` を、サブスクライバ Oracle コンテキストの DN に置き換えます。通常、`cn=OracleContext, <default Subscriber DN>` です。
3. スクリプトを `temp.ldif` として保存します。
4. `ldapmodify` コマンドライン・ツールを使用して、Oracle Internet Directory に変更を加えます。次に例を示します。

```
ldapmodify -p <OID port> -h <OID host> -D <DN of OID Super User> -w <password of OID Super user> -v -f temp.ldif
```

## Oracle9iAS Containers for J2EE の問題

Oracle9iAS Containers for J2EE に関連する既知の問題は次のとおりです。

- [MERANT DataDirect Connect JDBC ドライバ](#)
- [XML ベースの JAAS デモの README.TXT が、存在しない README を参照している](#)
- [JAZN 管理ツールを使用した OC4J 管理パスワードの更新](#)
- [OC4J サブレットでキャッシュ・オブジェクトを共有するための更新](#)

### MERANT DataDirect Connect JDBC ドライバ

Oracle 以外のデータベースと接続するために、Oracle9iAS には MERANT DataDirect Connect JDBC ドライバのカスタマイズ・バージョンが付属しています。MERANT JDBC ドライバの技術情報は、標準 MERANT のドキュメントおよびリリース・ノートを参照してください。ただし、標準 MERANT JDBC ドライバと、このカスタマイズ・バージョンには、次の違いがあります。

1. カスタマイズされた MERANT ドライバの jar ファイルには、YM 接頭辞が付いています。Oracle9iAS に付属する MERANT jar ファイルを次に示します。  
  
`Ymbase.jar Yminformix.jar Ymserver.jar Ymutil.jar  
Ymdb2.jar Ymsybase.jar`
2. URL サブプロトコルの接頭辞は、「merant」ではなく「oracle」です。接続するときは、正しいサブプロトコルを使用します。次に例を示します。  
  
`jdbc:oracle:db2://server1:1433`
3. パッケージ名は、`com.oracle.ias` です（`com.merant.datadirect` ではありません）。
4. ベンダー・メッセージの接頭辞は `[oias]` です。
5. カスタマイズされた MERANT ドライバは、Oracle9iAS 製品内で実行するように構成されています。カスタマイズされた MERANT ドライバを Oracle9iAS 以外で使用しようとすると、次の例外が発生します。

```
java.sql.SQLException: [oias] [... JDBC Driver]
```

このドライバの使用は、埋込みアプリケーションのみに制限されています。

### XML ベースの JAAS デモの README.TXT が、存在しない README を参照している

`ORACLE_HOME/j2ee/home/jazn/demo/callerInfo` ディレクトリ内の `README.txt` に、存在しない `ORACLE_HOME/dcm/README` への参照が含まれています。JAAS の README は、次の位置にあるコア・インストールから参照できます。

`http:<servername>/J2EE.htm`



## JAZN 管理ツールを使用した OC4J 管理パスワードの更新

JAZN 管理ツールを使用して OC4J 管理パスワードを更新するには、次の手順を実行します。

1. 環境変数 `ORACLE_HOME` が設定済で、`ORACLE_HOME/jdk/bin` ディレクトリからの正しい Java を使用していることを確認します。
2. `ORACLE_HOME/j2ee/home` ディレクトリで次のコマンドを使用して、管理パスワードを `ias_admin` パスワードに変更します。（この場合、`ias_admin` パスワードは「welcome1」です。）

```
java -Doracle.security.jazn.config=ORACLE_HOME/j2ee/home/jazn/install/jazn.xml -jar
jazn.jar -setpasswd jazn.com admin welcome welcome1
```

3. 次のコマンドを実行して変更を確認します。

```
java -Doracle.security.jazn.config=ORACLE_HOME/j2ee/home/jazn/install/jazn.xml
-jar jazn.jar -checkpasswd jazn.com admin -pw welcome1
```

「ユーザー / パスワードのペアの検証に成功しました。」が表示されます。

変更された `jazn-data.xml` は、`ORACLE_HOME/j2ee/home/config` ディレクトリ内にあります。

## OC4J サブレットでキャッシュ・オブジェクトを共有するための更新

Java キャッシュの分散機能を利用したり、サブレット間でキャッシュ・オブジェクトを共有するには、アプリケーションの配置を変更する必要があります。サブレット間で共有されるユーザー定義オブジェクト、または JVM 間で分散されるユーザー定義オブジェクトは、システム・クラス・ローダーによってロードされる必要があります。デフォルトでは、サブレットによってロードされたオブジェクトは、コンテキスト・クラス・ローダーによってロードされます。これらのオブジェクトは、これらのオブジェクトをロードしたコンテキスト内のサブレットでのみ参照されます。オブジェクト定義は、他のサブレットまたは他の JVM 内のキャッシュには使用できません。オブジェクトがシステム・クラス・ローダーによってロードされた場合、そのオブジェクト定義は、他のサブレットおよび他の JVM 内のキャッシュに使用可能になります。

JServ では、これは、JServ プロセスが起動されたときに使用可能な `CLASSPATH` 定義にキャッシュ・オブジェクトを含めることによって行われていました。

OC4J では、システム `CLASSPATH` は、`oc4j.jar` ファイル、および `cache.jar` を含む関連する jar のマニフェストから導出されます。環境の `CLASSPATH` は無視されます。キャッシュ・オブジェクトを OC4J の `CLASSPATH` に含めるには、`.class` ファイルを

`ORACLE_HOME/javacache/sharedobjects/classes` にコピーするか、または jar ファイル `ORACLE_HOME/javacache/cachedobjects/share.jar` に追加する必要があります。クラス・ディレクトリと `share.jar` ファイルの両方が、`cache.jar` のマニフェストに含まれています。



## ドキュメントの誤記

この章では、次のドキュメントの誤記について説明します。

- 『Oracle Collaboration Suite 管理者ガイド』
- 『Oracle9iAS Single Sign-On 管理者ガイド』

### 『Oracle Collaboration Suite 管理者ガイド』

#### 環境変数 NLS\_LANG の元の値へのリセット

『Oracle Collaboration Suite 管理者ガイド』の手順 4 を実行する前に環境変数 NLS\_LANG の設定を解除すると記載されています。実際は、手順 4 を実行した後、環境変数 NLS\_LANG を元の値にリセットします。

### 『Oracle9iAS Single Sign-On 管理者ガイド』

#### National Language Support の構成

Oracle9iAS Single Sign-On Administrator's Guide の第 2 章の「National Language Support の設定」では、ユーザーは、Oracle9iAS のインストール時に言語を選択できると記載されています。言語は、Oracle9iAS のインストール後に管理者がその言語をインストールした場合にのみ使用可能であることに注意してください。29 か国語からの言語選択を許可できるように設定できます。デフォルトでインストールされる言語は、英語のみです。追加の言語をインストールするには、次のコマンドを実行します。

```
$ORACLE_HOME/jdk/bin/java -jar $ORACLE_HOME/sso/lib/ossoca.jar langinst lang make_lang_avail  
$ORACLE_HOME
```

変数 lang には、インストールする言語のコードを代入します。言語を使用可能に設定する場合は、変数 make\_lang\_avail に、1 を代入します。言語を使用不可に設定する場合は、0（ゼロ）を代入します。

**参照：** サポートされている言語の完全なリストについては、『Oracle9i Application Server グローバリゼーション・サポート・ガイド』の表 3-2 を参照してください。



---

# Oracle Collaboration Suite リリース・ノート 追加情報 1

原典情報 : B10244-01 Oracle Collaboration Suite Release Notes Addendum Release 1, Version 9.0.3

ここでは、Oracle Collaboration Suite の機能について補足説明します。内容は、この章では、以下の項目について説明します。

- [インストールの問題](#)
- [コンポーネントの問題](#)

## インストールの問題

インストールの問題点および解決方法について説明します。

必要な CD を 1 通り実行した場合でも、Oracle9iAS Infrastructure および Oracle Collaboration Suite Middle-Tier のインストール終了時に、ディスク 1 およびディスク 2 を再度挿入するように求められる場合があります。これは所定の動作です。

この問題の解決方法については、『Oracle Collaboration Suite for HP 9000 Series HP-UX, Linux Intel, and Solaris Operating System (SPARC) インストレーション・ガイド』の第 4 章「インストール・スタート・ガイド」の「ハード・ドライブからの Oracle コンポーネントのインストール」を参照してください。

## コンポーネントの問題

コンポーネントの問題点および解決方法について説明します。

- [Oracle Email](#)
- [Oracle Files](#)

## Oracle Email

### Oracle Enterprise Manager での Oracle Email 用オンライン・ヘルプについて

Oracle Enterprise Manager では、Oracle Email 管理ページ用のオンライン・ヘルプはありません。

### 標準 Fat クライアントを使用したパブリック電子メール配信リスト検索機能について

標準 Fat クライアント (Netscape Communicator など) を使用して、パブリック電子メール配信リストを検索できません。

解決方法：

1. 電子メール・リスト・コンテナのサブスクライバ・ベースから LDAP 参照を作成します。

```
ldapmodify -c -v -a -D"cn=orcladmin" -w password -h ldaphost -p
ldap port <<EOF
dn: cn=Lists,dc=oracle,dc=com
cn: Lists
ref:
ldap://
host:port/cn=List,dc=oracle,dc=com,cn=UM_
SYSTEM,cn=EMailServerContainer,cn=Products,cn=OracleContext
objectclass: top
objectclass: referral
objectClass: extensibleObject
EOF
```

2. Oracle Internet Directory の ACI を変更します。

```
ldapmodify -c -v -a -D"cn=orcladmin" -w password -h ldaphost -p
ldap port <<EOF
dn:
cn=List,dc=oracle,dc=com,cn=UM_SYSTEM,cn=EMailServerContainer,cn=Products,
cn=OracleContext
changetype: modify
add: orclaci
orclaci: access to entry by * (browse)
orclaci: access to attr=(mail,cn) by * (read,search)
EOF
```

3. 参照を削除します。

```
ldapdelete -M -h host -p port -D"cn=orcladmin" -w password
cn=Lists,dc=oracle,dc=com
```

4. リスト・コンテナから ACI を削除します。

```
ldapmodify -c -v -a -D"cn=orcladmin" -w password -h ldaphost -p
ldap port <<EOF
dn:
cn=List,dc=oracle,dc=com,cn=UM_SYSTEM,cn=EEmailServerContainer,cn=Products,
cn=OracleContext
changetype: modify
delete: orclaci
EOF
```

## Oracle Files

### 一部のボタンについて（Netscape 4.7x 使用時）

Netscape 4.7x の使用時、Oracle Files アプリケーション（表フィルタなど）の一部のボタンは機能しません。

処置：Microsoft Internet Explorer 5.5x 以上を使用してください。

### 電子メール・アドレスが無効な場合に発生するエラー

ユーザーの電子メール・アドレスが無効な場合、ワークスペースにそのユーザーを追加できません。

処置：すべてのユーザーが、有効な電子メール・アドレスを所有していることを確認してください。

### アンダースコア（\_）を含むマルチバイトのユーザー名でのログインの不可

ユーザー名がマルチバイトで、そのユーザー名にアンダースコアが含まれている場合は、Oracle Files にログインできません。

処置：ユーザー名がマルチバイトの場合、そのユーザー名にアンダースコアが含まれていないことを確認してください。

### 単層インストール時に Oracle Enterprise Manager から Oracle Files ドメインを起動した場合に発生するエラー

この問題は、Infrastructure および Middle-Tier の両方の製品が、同じホストにインストールされた場合に発生します。一部の起動スクリプトの位置の解決時に問題が発生するため、Oracle Enterprise Manager から Oracle Files ドメインの起動を試行すると失敗します。

処置：ノードおよびドメインの起動および停止には、Oracle Files のコマンドライン・ツールを使用してください。Oracle Enterprise Manager は、インスタンスの管理には使用できますが、製品の起動および停止には使用できません。Oracle Files のノードおよびドメインを起動および停止するコマンド（ifsctl）は次のディレクトリに格納されています。

```
$ORACLE_HOME/ifs/files/bin
```

コマンドの構文は次のとおりです。

```
ifsctl domain_name
```



---

# Oracle Collaboration Suite リリース・ノート 追加情報 2

原典情報 : B10556\_01 Oracle Collaboration Suite Release Notes Addendum Version 9.0.3

ここでは、Oracle Collaboration Suite の機能について補足説明します。この章では、以下の項目について説明します。

- [コンポーネントの問題](#)
- [ドキュメントの誤記](#)

# コンポーネントの問題

コンポーネントの問題点および解決方法について説明します。

## Oracle Email

### OESUCR コマンド

ユーザーがサーバー・サイド・ルールを持つ場合、oesucr filename -change コマンドは動作しません。

コマンドを有効にするには、oesucr コマンドを実行する前に、Thin Client を使用してサーバー・サイド・ルールを削除し、ユーザーの電子メール ID を変更します。電子メール ID を変更した後、Thin Client によってサーバー・サイド・ルールが再作成されます。

### Thin Client の割当て制限

Thin Client では、あるユーザーが割当て制限を超えた場合、削除されたメッセージをごみ箱フォルダに移動するために作業環境を使用可能にすると、メッセージを削除して割当て制限を下げることはできません。

この問題を解決するには、「作業環境」タブでごみ箱フォルダを使用不可にします。これによって、メッセージに削除済のマークを付け、フォルダを圧縮することによって、メッセージを削除できるようになります。

# ドキュメントの誤記

ドキュメントの誤記について説明します。

## 『Oracle Collaboration Suite for HP 9000 Series HP-UX, Linux Intel, and Solaris Operating System (SPARC) インストレーション・ガイド』

### 不正確なストア名

『Oracle Collaboration Suite for HP 9000 Series HP-UX, Linux Intel, and Solaris Operating System (SPARC) インストレーション・ガイド』で、Unified Messaging Store を誤って Oracle Email Store と表記しています。

### 不正確なデータベース・バージョン

『Oracle Collaboration Suite for HP 9000 Series HP-UX, Linux Intel, and Solaris Operating System (SPARC) インストレーション・ガイド』では、Oracle Files で Oracle9i リリース 1 (9.0.1.1.1) データベースがサポートされていると記載されています。

Oracle Files を Oracle Workflow と統合するには、Oracle9i リリース 2 (9.2.0.1.0) データベースまたは Files Store (Oracle Collaboration Suite Information Storage CD-ROM から使用可能) を使用する必要があります。

### 環境変数の設定および設定解除

『Oracle Collaboration Suite for HP 9000 Series HP-UX, Linux Intel, and Solaris Operating System (SPARC) インストレーション・ガイド』の 2-16 ページの表 2-14 の内容に誤記があります。正しい情報は次のとおりです。

表 4-1

タスク	C シェル	Bourne/Korn シェル
環境変数の設定	prompt> setenv VARIABLE value	prompt> VARIABLE= value;export VARIABLE
環境変数の解除	prompt> unsetenv VARIABLE	prompt> unset VARIABLE



---

# Oracle Email リリース・ノート

原典情報 : B10059-01 Oracle Email Release Notes Release 9.0.3

この章では、以下の項目について説明します。

- [このリリースでの新機能](#)
- [クライアント・ソフトウェア](#)
- [一般的な問題および解決方法](#)
- [構成上の問題および解決方法](#)
- [既知の問題点](#)

## このリリースでの新機能

Oracle Email は、Oracle Collaboration Suite リリース 1 (9.0.3) のコンポーネントとして統合されています。

このリリースには、次の新機能が含まれています。

- 拡張管理

Oracle Email は、グラフおよびサービス・プロバイダ機能の監視（1 ステップでのユーザー・プロビジョニングなど）を提供します。

- 拡張ウィルス・スキャン

Oracle Email サーバーには、拡張されたウィルス対策およびスパム対策機能が含まれています。

- 拡張サーバー側ルール

このリリースでは、SMS 通知のみでなく、ドメインおよびシステム全体でルールが使用可能です。

- 拡張ワイヤレス機能

Oracle Email ユーザーは、ユーザー自身の電子メールへのワイヤレス・アクセス専用、プロフィールおよびフィルタを設定できます。

- 電子メール・ポートレット

Oracle Email ユーザーは、ポータル・ページからメールボックスを参照できます。

- LogMiner 機能

Oracle Email では、Oracle9i データベースの LogMiner 機能に基づいたユーティリティが提供されます。管理者は、この機能を使用して、個々のフォルダ、受信ボックスおよびメッセージをリストアできます。

## クライアント・ソフトウェア

標準の POP/IMAP/SMTP プロトコル仕様に準拠の E-Mail クライアント・ソフトウェアならびに標準の Web ブラウザ。オラクル社にて動作確認済みソフトウェアは次のとおりです。

対応クライアント・ソフトウェアに関する最新情報は、日本オラクルのホームページの製品情報ページにあるシステム要件を参照してください。

- Outlook 2002
- Outlook Express 6.0
- Outlook Express 5.x
- Netscape 4.7.x for Windows
- Internet Explorer 5.5 (SP2) for Windows

## 一般的な問題および解決方法

Oracle Email の一般的な問題および解決方法について説明します。

- LogMiner を構成する前に、オラクル社カスタマ・サポート・センターから、最新のパッチをダウンロードしてインストールする必要があります。(Bug#249415)
- Thin クライアント管理ツールのオンライン・ヘルプは英語のみで使用できます。オンライン・ヘルプにアクセスするには、次の URL にナビゲートします。

```
http://<host:port>/um/admin/help/en/main.html
```

- Thin クライアントの作業環境に関するオンライン・ヘルプは存在しません。オンライン・ヘルプにアクセスするには、次の URL にナビゲートします。

```
http://<host:port>/um/help/en/The_All_Messages_Page.htm
```

- ガベージ・コレクタ (GC) を参照すると、常に、Housekeeping が表示されます。
- Middle-Tier ホストでのパッケージの再ロード

Middle-Tier ホストでパッケージを再ロードするには、次の手順を実行します。

```
cd $ORACLE_HOME/oes/install/sql
sqlplus es_mail/<es_mail_passwd>@<connect_string>
@loadpkg.sql
```

## 構成上の問題および解決方法

Oracle Email の構成上の問題および解決方法について説明します。

- [sendmail の停止](#)
- [複数の電子メール・ドメインを持つ Oracle Email の構成](#)

### sendmail の停止

多くの UNIX システムでは、sendmail はデフォルトで構成され、システムを起動すると起動されます。Oracle Email の SMTP サーバーを有効にしてデフォルトの SMTP プロトコル・ポート (ポート 25) をリスニングするには、sendmail を停止する必要があります。sendmail を停止するには、次のコマンドをルートとして実行します。

```
/etc/init.d/sendmail stop
```

システムの再起動時に sendmail が再起動されないようにするには、OS init ファイルから sendmail startup を削除します。同じサーバーで実行されている他のアプリケーションが sendmail startup を使用していない場合は、/usr/lib の下にある sendmail 実行可能ファイルの名前を変更します。

### 複数の電子メール・ドメインを持つ Oracle Email の構成

Oracle Email は、メッセージ・ストアの単一インスタンスで、複数の電子メール・ドメインをサポートします。

新しい電子メール・ドメインを追加するには、次の手順を実行します。

1. Oracle Internet Directory に、新しいサブスクライバ・エントリおよび関連付けられたディレクトリ情報ツリー要素を作成します。

新しいサブスクライバ objectclass およびネーミング属性は、ユーザーの要求に応じて構成できます。

---

**注意：** Oracle Email の名前空間に必要な Oracle Internet Directory の各サブスクライバは、電子メール・ドメインと同等のもので、この項では、電子メール・サブスクライバと Oracle Internet Directory サブスクライバを混同しないようにするため、オブジェクト・クラス・ドメインの Oracle Internet Directory サブスクライバをドメインと呼びます。

---

2. Oracle Email に新しい電子メール・ドメインを作成し、電子メール・アクセス用のユーザーをプロビジョニングします。

## Oracle Internet Directory での新しいドメインの作成

ディレクトリ管理者は、次の手順を実行して、Oracle Internet Directory に新しいドメインを作成する必要があります。

1. 配置固有ドメインのデフォルトを判別します。
  - ドメインのネーミング属性 (orclSubscriberNicknameAttribute)
  - ネーミング属性に関連付けられた配置固有のオブジェクト・クラス
  - DIT 内のすべてのドメイン共通の親エントリ (orclSubscriberSearchBase)

この情報は、次のコマンドを使用して、ルート Oracle コンテキストの `cn=common,cn=products,cn=oraclecontext` エントリを問い合わせることによって判別できます。

```
ldapsearch -h <host> -p <port> -s base \
-b "cn=common,cn=products,cn=oraclecontext" \
"objectclass=*" orclSubscriberSearchBase orclSubscriberNicknameAttribute
```

たとえば、`machine1.acme.com` という DNS 名を持つホスト上のディレクトリの配置に対する送信ボックスのデフォルトは、次のようになります。

```
orclSubscriberSearchBase: dc=com
orclSubscriberNicknameAttribute: dc
```

`dc` というニックネーム属性に基づく、ここで選択されている配置固有のオブジェクト・クラスはドメインです。

2. `create_subscriber.sh` スクリプトを起動してドメインを作成します。
  - a. Oracle Internet Directory が実行されている Infrastructure の `ORACLE_HOME` にログインします。
  - b. `ORACLE_HOME/ldap/schema/oid` に移動します。
  - c. `create_subscriber.sh` スクリプトを実行します。

たとえば、`machine1.acme.com` という DNS ホスト名を持つホスト上で実行されているディレクトリ・サーバーの送信ボックスのデフォルトを使用して、`NewCompany` と呼ばれるドメインを作成するには、`create_subscriber.sh` スクリプトを次のとおり実行します。

```
./create_subscriber.sh -host machine1.acme.com -port 389
-SubscriberName NewCompany \
-SubscriberNamingAttribute dc \
-SubscriberObjectclass domain \
-SubscriberParentDN dc=com \
-CurrentUserDN cn=orcladmin \
-CurrentUserPassword SuperUserPassword
```

この操作によって、`dc=NewCompany,dc=com` という DN で、Oracle Internet Directory に新しいドメインを作成できます。Oracle ソフトウェアでは、DN `cn=users,dc=NewCompany,dc=com` の下にこのドメインのユーザーが存在します。

## 新しいドメインでのユーザーによる電子メール・アクセスのプロビジョニング

Oracle Internet Directory に新しいドメインを作成した後、Oracle Email 管理ツールを使用して、関連付けられた電子メール・ドメインおよびユーザーを作成します。

**参照：**『Oracle Email 管理者ガイド』の第 3 章を参照してください。

## 既知の問題点

Oracle Email の既知の不具合について説明します。

- [コア・サーバー](#)
- [プロトコル・サーバー](#)
- [Thin クライアント](#)
- [サード・パーティ・クライアント](#)

## コア・サーバー

表 5-1

Bug#	説明
2515937	<p>OESCHART の \$JAR 環境が正しく設定されていません。正しい \$JAR 環境設定は、次のとおりです。</p> <pre>JAR=\$JLIB/esadmin.jar JAR=\$JAR:\$ORACLE_HOME/oes/jlib/chartbuilder.jar JAR=\$JAR:\$ORACLE_HOME/oes/jlib/graphbuilder.jar</pre>
2512661	拡張検索での日付書式がローカライズされていません。
2512372	メッセージの日付書式がローカライズされていません。
2510165	メッセージの返信では、マルチバイトの表示名のエンコーディングが、To 行に表示されます。
2507654	<p>Middle-Tier の構成では、ユーザーは、ドロップダウン・リストから有効なメール・ストアを選択できます。ただし、ドロップダウン・リストの最初の文字列は空です。</p> <p>解決方法：ドロップダウン・リストを拡張し、使用可能なメール・ストアを表示します。</p>
2503862	<p>次のフォルダ名は変換されません。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ INBOX</li> <li>■ Drafts</li> <li>■ Sent</li> <li>■ Sent Items</li> </ul>
2501016	<p>netca または dbca を使用して、メール・ストア・データベースを Oracle Internet Directory に登録する必要があります。dbca の不具合のため、データベースへの登録に失敗します。データベースを Oracle Internet Directory に登録しないかぎり、umconfig.sh は失敗します。この不具合は、HP 上で発生します。</p>
2495971	リリース 9.2.0.1 の LogMiner の制限のため、4KB を超えるメッセージはリカバリできません。
2482705	サーバー側ルールアクションがメッセージを受信ボックスに移動する場合、メッセージは処理されたとみなされず、後続のルールが再度そのメッセージを処理します。
2480480	<p>umconfig.sh スクリプトを使用して複数のメール・ストアを構成すると、\$ORACLE_HOME/oes/log/createmailstore.log に次のエラーが記録されます。</p> <pre>javax.naming.NameNotFoundException: [LDAP: error code 32 - No Such Object]; remaining name</pre> <p>このエラーは無視できます。</p>
2475304	<p>一部のルールは削除できません。</p> <p>API は、未定義のルールを受け入れます。ルールは、イベント別にグループ化されます。各イベントには、ルール・リストが含まれます。特定のイベントに対してルールが定義されていない場合は、そのイベントに対して定義されたルール・リストも存在しません。イベントが、空のルール・リストに関連付けられることはありません。</p>
2469603	システム、ドメインおよびユーザーのルールは、必ずしも特定の順序で処理されるとはかぎりません。

表 5-1

Bug#	説明
2465475	<p>メッセージが他のアクションの処理対象にもなっている場合、ルール of 「INBOX への移動」アクションを実行しても、受信ボックスにメッセージを保存できません。</p> <p>「INBOX への移動」アクションを実行するルールを作成すると、このアクションを実行するメッセージ（受信ボックスに格納されている）を他のアクション（「Move to folder1」など）によって移動できます。この操作は、メッセージが両方のアクションを保証する場合に実行できます。ただし、先に <code>move to folder1</code> を実行すると、メッセージは、すべてのルールの実行中に <code>folder1</code> に格納され、このメッセージに適用されるルールの数にかかわらず、その後の移動の対象となりません。</p> <p>解決方法：移動先には、受信ボックスを使用せず、通常のフォルダを使用してください。OJMA SDK ユーザーは、「INBOX への移動」アクションの直後に、プログラムによって「ブレイク」アクションを挿入し、その後のルールが実行されないようにすることもできます。</p>
2451771	異なるドメインで同じユーザー ID を持つ 2 人のユーザーが、同じ名前の共有フォルダを作成することはできません。
2445578	ポートレットでは、Oracle Internet Directory の SSO ユーザー DN を取得できません。
2410821	ネストされたフォルダの階層が深すぎる共有フォルダは作成できません。正常に作成できる共有フォルダの階層数は、様々な要素（ドメイン名の文字列長、ユーザー ID の文字列長、各フォルダ名の文字列長など）によって異なります。作成可能な共有フォルダ階層の最大数は、これらの要素に基づき、インストールごとに異なります。
2332107	<p>デフォルトで、SYSTEM 表領域に、メッセージ検索のための OracleText 索引が作成されます。</p> <p>次の例では、ユーザーが選択した表領域に索引を作成する方法について説明します。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>表領域を作成します。 <pre>CREATE TABLESPACE esoratext DATAFILE '?:/dbs/esoratext.dbf' SIZE 100M AUTOEXTEND ON NEXT 10M MAXSIZE UNLIMITED EXTENT MANAGEMENT LOCAL AUTOALLOCATE;</pre> </li> <li>OracleText 索引を削除し、手順 1 で作成した表領域を使用して索引を作成します。この表領域を使用するには、索引作成文のパラメータ・リストに <code>STORAGE your_desired_tablespace</code> 句を追加します。 <pre>CREATE INDEX es_ot_ix_search ON es_int_msgbody(text) indextype IS ctxsys.context parameters ('DATASTORE es_search_dsprof FILTER CTXSYS.NULL_FILTER SECTION GROUP es_search_sec_group STORAGE oratextstore');</pre> </li> </ol> <p><b>参照：</b>索引作成の詳細は、『Oracle Text リファレンス』を参照してください。</p>

## プロトコル・サーバー

表 5-2

Bug#	説明
2464528	プロトコル・サーバーは、データベース・セッションを作成できなくなると、ハングアップします。プロトコル・サーバーの <code>maximum connection pool</code> パラメータが、メール・ストア・データベースの最大許容セッション数を超える値に設定された場合、この問題が発生します。
2458945	デフォルトのドメイン・パラメータは、インストール時には設定されません。ログイン中、管理者が、完全に修飾されたユーザー ID およびドメイン名ではなく、ユーザー自身のユーザー ID のみをユーザーに指定させる場合は、デフォルトのドメイン・パラメータを IMAP サーバーに設定します。
2381308	IMAP サーバーの <code>timeout interval</code> パラメータを変更した場合、サーバーを、再初期化ではなく、再起動する必要があります。

表 5-2

Bug#	説明
2371911	Oracle Internet Directory が停止した場合、SMTP サーバーは、明確な説明付きの一時エラーではなく、無効な受信者エラーをクライアントに送信します。

## Thin クライアント

表 5-3

Bug#	説明
2517956	管理ツールの「ディレクトリのユーザー作成画面に戻る」リダイレクト・ボタンは機能しません。 管理者は、Delgated Administration Service (DAS) の URL を、手動で入力する必要があります。
2509833	リッチ・テキスト・モードのメッセージ作成の画面は標準 508 にコーディングされていますが、サード・パーティの依存コンポーネントのため、補助機能に依存するユーザーにユーザビリティの問題が認められます。  オラクル社では、依頼があれば、これらのユーザビリティの問題を回避するためのパッチを提供します。  これらの問題には、次のものが含まれます。 <ul style="list-style-type: none"> <li>■ メッセージの入力フィールドが応答しない。</li> <li>■ コンポーザ・ツールバーの編集アイコンでは、タブ編集ができない。</li> <li>■ キーストロークでは、書式設定機能が使用できない。</li> <li>■ ファイルのアップロード用の参照ボタンが応答しない。</li> </ul>
2508718	メッセージの数がページ・サイズを超えると、メッセージは 1 ページずつ表示されます。最後のページを表示しているときに、すべてのメッセージを選択して削除すると、ページ索引はリセットされず、メッセージ・エラー「このフォルダは空です。」が表示されます。ただし、フォルダの他のページを選択するためのドロップダウン・リストは正常に表示されます。  解決方法: 次のいずれかの操作を実行すると、メール・セッションが有効な状態に戻ります。 <ul style="list-style-type: none"> <li>■ フォルダの他のページを選択するためのドロップダウン・リストを使用して、メッセージを正常に表示する。</li> <li>■ 「10 行前へ」リンクを使用して、メッセージの元のページを正常に表示する。</li> </ul>
2505850	共有フォルダ・オプションのセクションは変換されません。
2503322	Thin クライアントの数ページで、スキップ・ナビゲーション・リンクが、補助機能では適切に動作しません。  解決方法: [Insert]+[z] を押して、仮想カーソル・モードを無効にします。この操作の後、スキップ・ナビゲーション・リンクは適切に動作します。
2501762	メッセージの優先順位オプション（標準および高）は変換されません。
2512659	無効な日付のエラー・メッセージは変換されません。
2512630	メッセージ・サイズのバイト値は変換されません。
2506364	送信日付の条件は、英語以外には適用できない場合があります。
2506161	英語とユーザー・インタフェース変換が一致していません。
2504058	デフォルトの SSO 言語が英語以外に設定されている場合、言語に英語は使用されません。

表 5-3

Bug#	説明
2478236	<p>新しい Oracle Collaboration Suite ベース・ユーザーの作成時、このユーザーの電子メール・アカウントがまだ作成されていない場合でも、DAS によって電子メール・アドレスをこのユーザーに関連付ける必要があります。</p> <p>この電子メール・アドレスは、このユーザーのベース・ユーザー・オブジェクト内の電子メール・アドレスの配列に、最初のエントリとして格納されます。このユーザーに対して電子メール・アカウントを作成すると、電子メール・アドレスもこのユーザーに対して作成されます。この新しい電子メール・アドレスは、電子メール・アドレスのベース・ユーザー・オブジェクトの配列にも追加されます。ただし、先頭に位置するように最初の項目と置き換えられたり、配列が再度並べ替えられるのではなく、配列に追加されます。</p> <p>以前のリリースでは、Thin クライアントは配列の最初のアドレスのみを参照し、そのアカウントへのログインを試行しました。このアドレスは、DAS ユーザーの作成時に指定されたため、有効な Oracle Collaboration Suite アカウントである保証はありませんでした。</p> <p>Thin クライアントは、サーバー API を使用して、すべての有効な電子メール・アドレスを問い合わせ、このサブセットの最初のアカウントへのログインを試行します。</p> <p>たとえば、DAS ユーザーの作成時に、管理者が Oracle Collaboration Suite に対して有効な電子メール・アドレスを指定し、指定した電子メール・アドレスに、Oracle Collaboration Suite インストール用の電子メール・アドレスでの適切なドメインが含まれている場合、電子メール・アドレスにアカウントが関連付けられていない場合でも、この電子メール・アドレスは、新しい API によって戻されるアドレス・セットの最初の項目になります。これが原因で、Thin クライアントは不適切な電子メール・アドレスにログインします。</p> <p>この問題を解決するために、管理者は、DAS HTML UI ユーザー作成ページを使用してユーザーを作成する場合、指定する電子メール・アドレスに注意して、指定したアドレスが最終的に電子メール・サーバーで使用されるアドレスと同じになるようにする必要があります。無効であるにもかかわらず有効に見える電子メール・アドレスがすでに指定されている場合、管理者は、Oracle Internet Directory Tools を使用して、手動で電子メール・アドレスのベース・ユーザー・オブジェクトの配列を更新する必要があります。</p>
2475379	「すべてのフォルダ」ページには、フォルダ・ツリーを拡張または縮小するためのアイコンが含まれています。この機能を実行すると、ページの先頭が表示されます。
2475308	受信ボックスは昇順または降順で格納できますが、これを示す矢印のリンクがはっきり表示されません。かわりに、スクリーン・リーダーに「javascript colon sort ...」と表示されます。
2452291 および 2452268	アドレス帳の拡張検索には、「エントリ」と呼ばれる検索属性が存在します。この属性は、エントリの接続名の配布リストまたは別名を示します。
2475188	自動的に生成された、不完全な内容のメッセージを含むメッセージを送信すると、添付ファイルを開くことができない場合があります。
2475139	フォルダ名を指定してフィルタを作成すると、その後フォルダ名を変更しても、ルールは更新されません。このルールは、存在しないフォルダを指します。
2474955	メッセージの削除時にユーザーに通知するルールを作成した場合、メッセージ削除の設定を、メッセージを完全に削除せずに、ごみ箱に送るように設定すると、2つの通知が送信されます。
2474514	フィルタでは、大/小文字を区別する検索が使用されます。大/小文字を区別する必要がない場合は、現在、複数のルール基準が必要です。
2473369	テンプレート・メッセージの添付ファイルは使用できません。
2473210	特殊文字を含むフォルダは開くことができません。この不具合は、フォルダ・リストのビューでフォルダを開く場合にのみ発生するため、ユーザーは他の方法でこのフォルダにアクセスできます。
2473164	挿入イメージを含むメッセージを転送すると、イメージが破損します。
2472988	ユーザーが割当て制限を超える場合、送信したメッセージは送信済フォルダにコピーされません。
2472917	不完全な HTML コンテンツが、自動的に生成された電子メール・メッセージに含まれる可能性があります。自動的に生成された、不完全な内容のメッセージを含むメッセージを送信した場合、Thin クライアントでそのメッセージを表示すると、エラーが表示される可能性があります。
2467945	アドレス帳の表を列ごとにソートすると、Internet Explorer 5 はクラッシュします。



表 5-3

Bug#	説明
2459070	共有フォルダを圧縮すると、エラー・メッセージが表示されます。
2455897	リストを作成する場合、名前を指定しないと、Java 例外が発生し、フォルダの説明ボックスに表示されます。ユーザーは、リストに名前を入力してリストを作成できますが、説明を編集して例外文字列を削除する必要があります。
2455819	重複するリストを作成したときのエラー・メッセージがはっきり表示されません。
2452135	アドレス帳の単純検索には、「番号」と呼ばれる検索属性（エンド・ユーザーには表示されません）が存在します。この番号は検索に使用する数値のため、「会社の電話番号」を指します。
2451875	重複する接続名を作成したときのエラー・メッセージがはっきり表示されません。
2449521	検索結果表では、未読メッセージが太字で表示されません。
2449396	検索結果リストから特定の項目を参照すると、軌跡リンクの不具合のため、検索結果リストに戻ることができません。
2446690	フォルダの変更時に生成される様々なエラー・メッセージによって、ビューを閉じて前のビューに戻る方法がない画面が生成されます。この問題を解決するには、ブラウザの「戻る」ボタンを使用し、前のページをリフレッシュします。
2445252	メッセージをサイズ順にソートすると、Internet Explorer 5 は断続的にクラッシュします。
2442794	メッセージ・ビューのメッセージを削除すると、メッセージが破損します。
2418506	割当て制限を超えるアカウントにログインすると、割当て制限を超えるメッセージは表示されません。
2378967	新しいディレクトリ接続を作成すると、フィールドの検証が行われません。
2510219	マルチバイトの表示名および件名は、通知内では破損します。
2510174	Thin クライアントによって、自動返信される件名およびテキスト行の両方が破損します。
2478206	マルチバイトのユーザー ID を持つ電子メール・ユーザーは、Thin クライアントにログインできません。

## サード・パーティ・クライアント

表 5-4

Bug#	説明
2515949	Netscape 4.7 x では、名前に空白が使用されているフォルダを拡張できません。 この問題を解決するには、フォルダの名前を変更します。
2503961	Netscape 4.75 では、リッチ・テキスト・エディタを使用する必要がある DHTML はサポートされていません。
2395631	Netscape Messenger 4.7 では、POP3 ユーザーはログインできません。



---

# Oracle Files リリース・ノート

原典情報 : B10050-01 Oracle Files Release Notes Release 9.0.3 for Solaris Operating System (SPARC)

この章では、以下の項目について説明します。

- [Oracle Files の概要](#)
- [対応クライアント](#)
- [一般的な問題点](#)
- [NLS の問題点](#)
- [Oracle Internet Directory の問題点](#)
- [クライアント固有の問題点](#)
- [ドキュメントの問題点](#)
- [NFS での Oracle Files の使用方法](#)
- [既知の問題](#)

## Oracle Files の概要

Oracle Collaboration Suite の主要コンポーネントである Oracle Files は、より生産的な共同作業が可能なコンテンツ管理機能（たとえば、バージョンング）を備えた企業のファイル・サーバーに代わるものとして設計されています。

Oracle Files には、次の特長があります。

- ファイルの共有および共同作業のサポート
- 大規模で、使いやすい配置のために設計された Web UI
- ワークスペース・ベースの共同作業
- カテゴリ、バージョンング、コンテンツ・ベース検索などのコンテンツ管理機能
- 承認とルーティングのためのワークフロー統合
- 単一ファイル・リカバリのためのユーザーおよび管理者オプション
- 拡張性、信頼性、セキュリティおよびプラットフォーム非依存

これらの機能によって、IT 管理者はファイル・サーバーの統合によってコストを削減でき、同時に従業員はより生産的に作業できるようになります。

## 対応クライアント

次の日本語版クライアント・ソフトウェアは Oracle Files で使用できることを確認済みです。対応クライアント・ソフトウェアに関する最新情報は、日本オラクルのホームページの製品情報ページにあるシステム要件を参照してください。

## Microsoft Windows

### Microsoft Windows クライアント・オペレーティング・システム（SMB を介した Oracle Files サーバーへのアクセス用）

- Microsoft Windows NT 4.0 Workstation または Server（Service Pack 6 以上）
- Microsoft Windows 98
- Microsoft Windows 2000 Professional および Server

### Web ブラウザ（Web インタフェース用）

- Netscape Communicator 4.72 以上  
今回のリリースでは、Netscape 6.x 以上はサポートされていません。
- Microsoft Internet Explorer 5.0 および 5.5  
Internet Explorer 6.0 以上は対応していません。

### FTP クライアント

- FTP コマンドライン

## Apple Macintosh

### Apple Macintosh クライアント（AFP を介した Oracle Files サーバーへのアクセス用）

- Mac OS 9.0.4、Mac OS 9.1 および Mac OS X:

## Web ブラウザ（Web インタフェース用）

- Netscape Communicator リリース 4.73 以上（今回のリリースでは、Netscape 6.x はサポートされていません。）

## UNIX

### NFS クライアント

- Sun Solaris 2.6、Solaris 7 および Solaris 8
- Red Hat Linux 6.2

## 一般的な問題点

Oracle Files を使用する前に、ここで説明する操作上および管理上の問題点に注意してください。

## Oracle Files のユーザー名へのマルチバイト・キャラクタの使用禁止

Oracle Files では、マルチバイト・キャラクタ・セットはサポートされていますが、マルチバイト・キャラクタを使用して作成されたユーザー・アカウント名はサポートされません。Oracle Files 用のユーザー・アカウントを作成する場合は、シングルバイト・キャラクタのみを使用して名前を作成する必要があります。アカウント名にマルチバイト・キャラクタが含まれている場合、コンテンツへのアクセスに使用できない Oracle Files プロトコル・サーバーが多数あります。

## NLS の問題点

ここでは、Oracle Files および National Language Support（NLS）の問題点について説明します。

## 太字 / イタリアン体の表示状態

日本語、簡体字中国語、繁体字中国語および韓国語の環境で実行している場合、Java アプリケーションでは太字またはイタリアン体は文字の輪郭が滑らかに表示されず、読みにくくなります。この問題は、すべての Java アプリケーション（Configuration Assistant、Oracle FileSync、管理ブラウザなど）で発生します。

この問題は、JDK のバージョン 1.3.1\_02b が原因で発生するため、JDK 1.3.1\_04 にアップグレードすることによって解決できます。この問題は、将来のリリースで修正される予定です。

「既知の問題点」の Bug#2377003、Bug#2293628 および Bug#2220343 を参照してください。

## キャラクタ・セットの制限

Oracle Files では、アジア言語の AL32UTF-8 データベースはサポートされません。Oracle Text では、AL32UTF-8 データベースで中国語、日本語および韓国語のレクサーはサポートされません。AL32UTF-8 データベースでは、中国語、日本語および韓国語のドキュメントは索引付けまたは検索できません。Unicode ベースのファイル・システムでは、UTF-8 が推奨キャラクタ・セットです。「既知の問題点」の Bug#2391425 および Bug#1926886 を参照してください。

## Oracle Internet Directory の問題点

すべての既知の問題点については、Oracle Internet Directory 関連マニュアルを参照してください。この項では、Oracle Files に固有の問題点のみについて説明します。「構成上の不具合」で説明する一部の不具合は、Oracle Internet Directory をサポートするデータベース・インスタンスを、Oracle9i データベース リリース 1 (9.0.1.3) に（入手可能になるとすぐに）アップグレードすることによって修正されます。

### 特定のプロトコル・サーバーでの Oracle Files 固有のパスワードの使用

多くのプロトコル（AFP、FTP など）で、暗号化されていないパスワードがネットワーク上を送信されます。その他のプロトコル（HTTP、SMB など）でも、一部の構成ではユーザー・パスワードがそのまま（暗号化されていない、クリアテキストとして）送信されます。

セキュリティ上、暗号化されていないパスワードの送信は、Oracle Files で Oracle Internet Directory を使用してユーザー・パスワードを管理する場合に問題となります。Oracle Files へのアクセスを可能にするパスワードで、認証を得るために Oracle Internet Directory を使用する他のすべてのアプリケーションへのアクセスも可能になるためです。

この問題点への対処として、Oracle Internet Directory では、各ユーザーに、アプリケーション固有の別のパスワードがサポートされています。Oracle Files では、Oracle Internet Directory でこの機能がサポートされています。この Oracle Files の別のパスワードは、「Oracle Files 固有のパスワード」と呼ばれます。この結果、Oracle Files の各ユーザーは、Oracle Internet Directory 共通のパスワードおよび Oracle Files 固有のパスワードの 2 つのパスワードを所有できます。

Oracle Files を構成して、Oracle Internet Directory 共通のパスワードまたは Oracle Files 固有のパスワードをプロトコル単位で使用できます。デフォルトでは、AFP および FTP では Oracle Files 固有のパスワードが使用され、その他のプロトコルでは Oracle Internet Directory 共通のパスワードが使用されます。したがって、Oracle Enterprise Manager または Oracle Files の Web ユーザー・インタフェースを使用して Oracle Files 固有のパスワードを設定するまで、AFP または FTP を使用して Oracle Files にアクセスすることはできません。詳細は、各ポート固有の Oracle Collaboration Suite インストレーション・ガイドを参照してください。

デフォルトの構成が適さない Oracle Files の配置もあります。Oracle Files の Credential Manager Configuration Assistant を使用して構成を変更できます。詳細は、各ポート固有の Oracle Collaboration Suite インストレーション・ガイドを参照してください。

### Oracle Internet Directory レプリケーション・サーバーを使用した Oracle Internet Directory の変更ログのクリーンアップ

Oracle Files では、Oracle Internet Directory で行われたユーザーおよびグループ変更の通知の受信に、Directory Integration Platform によって提供される Provisioning Integration Service が必要です。これらの変更は、Oracle Internet Directory の変更ログに格納され、Provisioning Integration Service によって適切にフィルタ処理された後で、変更イベントとしてアプリケーションに配信されます。レプリケーション・モードで Oracle Internet Directory Server を配置していない場合でも、ディレクトリ管理者がレプリケーション・サーバーを起動して変更ログの不要なエントリを定期的に削除することを確認してください。

この操作は、次のコマンドを使用してレプリケーション・サーバーを起動することによって実行できます。

```
$ oidctl connect=<net_service_name> server=oidrepld instance=1 flags="-p <ldapserver_port_number>" start
```

この定期的なクリーンアップを実行しない場合、Oracle Internet Directory の変更ログがファイル・システム全体を占有する可能性があります。その結果、Oracle Internet Directory サービスが使用不可能になる場合があります。変更ログのクリーンアップにレプリケーション・サーバーの起動が必要であることは一時的な制限事項で、将来のリリースではなくなる予定です。

レプリケーション・サーバーの起動および停止の詳細は、『Oracle Internet Directory 管理者ガイド』を参照してください。

## クライアント固有の問題点

Oracle Files を使用する前に、ここで説明するクライアント固有の問題点に注意してください。

### Oracle FileSync ユーティリティ

FileSync ユーティリティを使用すると、ローカル・マシンで自分が行った変更、および Oracle Files で自分または他のユーザーが行った変更を検出できます。また、通常、これらの変更の競合を解決できます。ただし、一部の変更の競合は、現在の FileSync では解決できません。この場合、FileSync によって提供されるオプションは、これらのファイル変更の同期化を「スキップする」オプションのみです。

現在、次のタイプの競合は解決できません（「ソース」は元のファイルを、「ターゲット」は結果のファイルを示します）。

- NEW/DELETE（NEW のターゲットが DELETE のソースと競合する場合）。たとえば、ローカル・フォルダと Oracle Files のフォルダが同期化されており、ローカル・フォルダに新しいファイルが作成され、Oracle Files でそのフォルダが削除されている場合です。現在、この競合は解決できません。
- NEW/COPY（NEW のターゲットが COPY のソースまたはターゲットと競合する場合）。
- NEW/EDIT（NEW のターゲットが EDIT のターゲットと競合する場合）。
- NEW/MOVE（NEW のターゲットが MOVE のソースまたはターゲットと競合する場合）。
- MOVE/EDIT（EDIT のターゲットが MOVE のソースまたはターゲットと競合する場合）。
- MOVE/DELETE（DELETE のソースが MOVE のソースまたはターゲットと競合する場合）。
- MOVE/MOVE（両方の MOVE のソースおよびターゲットが両方とも競合する可能性がある場合）。
- COPY/COPY（両方の COPY のソースおよびターゲットが両方とも競合する可能性がある場合）。
- COPY/DELETE（DELETE のソースが COPY のソースまたはターゲットと競合する場合）。
- COPY/EDIT（EDIT のターゲットが COPY のソースまたはターゲットと競合する場合）。
- COPY/MOVE（COPY と MOVE のソースおよびターゲットが両方とも競合する可能性がある場合）。

## ドキュメントの問題点

管理用のオンライン・ヘルプのテキストには、古い製品名が含まれている場合があります。この情報は、次のリリースで更新されます。

シングル・サインオンに関する情報は、Oracle Files のオンライン・ヘルプでは参照できません。この情報は、次のリリースで参照可能になります。

『Oracle Files 管理者ガイド』では、「Oracle Files Manager」という用語が使用されていますが、正しくは「Oracle Enterprise Manager」です。

## NFS での Oracle Files の使用方法

Oracle Files の配置によっては、構成後のタスクとして NFS サーバーの構成を実行する場合があります。このタスクを実行するために、Oracle Files を起動して実行しておく必要はありません。

### NFS サーバーの構成

Oracle Files の NFS プロトコル・サーバーには、次の異なる 3 つの構成変更を行う必要があります。

- [UNIX UID と Oracle Files ユーザー・アカウントのクライアント・マッピング](#)

UNIX ユーザー・アカウントへログオンした後、Oracle Files にアクセスできるように、UNIX UID と Oracle Files ユーザー・アカウント間のマッピングを作成します。

#### ■ トラストッド・クライアント・リストの設定

特定の IP アドレス（またはホスト・マシン）あるいはドメインへのアクセス権限の付与または取消しを明示的に行います。トラストッド・クライアント・リストは、NFS プロトコル・セキュリティを向上させるための Oracle 専用の機能です。

#### ■ NIS 認証の有効化

ご使用の環境でユーザー、グループおよびパスワード情報に NIS が使用されている場合は、NIS サーバーを使用してユーザーを認証できるように、Oracle Files の NFS プロトコル・サーバーを構成できます。

ほとんどの環境で、UNIX および Oracle Files のアカウントをマップする必要があります。ユーザー・アカウントのマップはドメイン・プロパティのため、動的に更新できます。マッピングを有効にするためにサーバーを再起動する必要はありません。また、サーバーを再起動した後でも、変更は有効です。

トラストッド・クライアント・リストまたは NIS 認証は、NFS サーバーの構成プロパティです。動的ドメイン・プロパティとしても表示されます。

### UNIX UID と Oracle Files ユーザー・アカウントのクライアント・マッピング

Oracle Files の NFS プロトコル・サーバーで、UNIX システムの認証プロセスを使用してユーザーを認証します。UNIX UID（ユーザー ID）番号が、Oracle Files の NFS プロトコル・サーバーに渡されます。

UNIX オペレーティング・システムへのログイン後は、UNIX アカウントが Oracle Files アカウントにマップされているかぎり、追加のログインを実行しなくても Oracle Files にアクセスできます。

UNIX-UID と Oracle Files 間のクライアント・マッピングは、IFS.DOMAIN.PROTOCOL.NFS.UidToUserMap ドメイン・プロパティで構成されます。

1. Web ブラウザから、次の URL にアクセスして、Oracle Files ドメイン・コントローラが構成されているマシンで実行中の Oracle Enterprise Manager Web Site に接続します。

`http://<hostname>:1810`

2. Oracle9iAS のログオン・ユーザー名およびパスワードを入力して続行します。Oracle9iAS インスタンス用のユーザー名 `ias_admin` と適切なパスワードを入力します。

インスタンスで実行中のすべての Oracle9iAS システム・コンポーネントが表示されます。このリストには、Oracle Files ドメインも含まれます。

`IFS_<hostname.companyname.com>:1521:<DBServiceName>:  
<FILESSchemaName>`

3. ドメイン名のリンクをクリックします。「一般」ページには、ドメイン・コントローラおよびドメインを構成するノードのリストが表示されます。このページの左下には、ドメインの構成オブジェクトへのリンクが表示されます。
4. （「構成」ヘッダーの下にある）「ドメインのプロパティ」のリンクをクリックします。「ドメインのプロパティ」ページには、一度に 25 のプロパティ・バンドルが表示されます。  
`IFS.DOMAIN.PROTOCOL.NFS.UidToUserMap` にスクロールします（2 ページ以上のスクロールが必要な場合があります）。
5. リスト内のハイパーリンクが設定された `IFS.DOMAIN.PROTOCOL.NFS.UidToUserMap` をクリックします。「IFS.DOMAIN.PROTOCOL.NFS.UidToUserMap の編集」ページが表示されます。  
デフォルトでは、このページに UID 60001（デフォルトの UNIX の `guest` アカウント）が表示されます。
6. 「追加」ボタンをクリックして UNIX UID を追加し、Oracle Files ユーザー・アカウントへのマッピングを作成します。
  - 「名前」フィールドに UID を入力します。
  - 「値」フィールドに Oracle Files ユーザー・アカウント名を入力します。
  - 「タイプ」の設定は「文字列」のままにしておきます。



7. Oracle Files の NFS プロトコル・サーバーにアクセスする UNIX クライアント・アカウントを持つすべてのユーザーを追加するまで、この方法でユーザーの追加を続けます。

サービス、ノードおよびサーバーの構成オブジェクト・プロパティとは異なり、ドメイン・プロパティへの変更は動的に更新されるため、サーバーを再起動する必要はありません。また、これらの変更は、再起動後も有効です。

## トラステッド・クライアント・リストの設定

Oracle Files のセキュリティを向上させるために、トラステッド・クライアント・リストを作成できます。オラクル社では、再起動後もこのトラステッド・クライアント・リストが使用できるように、構成オブジェクトでこれらの設定を変更し、変更した構成オブジェクトを使用してサービス上のサーバーをロードすることをお勧めします（オプションで、これらのプロパティを動的に変更できます）。

1. Web ブラウザから、次の URL にアクセスして、Oracle Files ドメイン・コントローラが構成されているマシンで実行中の Oracle Enterprise Manager Web Site に接続します。

`http://<hostname>:1810`

2. Oracle9iAS のログオン・ユーザー名およびパスワードを入力して続行します。Oracle9iAS インスタンス用のユーザー名 `ias_admin` と適切なパスワードを入力します。

このリストには、Oracle Files ドメインも含まれます。

`IFS_<hostname.companyname.com>:1521:<DBServiceName>:  
<FILESSchemaName>`

3. ドメイン名のリンクをクリックします。「一般」ページには、ドメイン・コントローラおよびドメインを構成するノードのリストが表示されます。
4. （「構成」ヘッダーの下にある）「サーバー構成」のリンクをクリックします。「サーバー構成」ページには、一度に 25 のプロパティ・バンドルが表示されます。NfsServerConfiguration にスクロールします。
5. NfsServerConfiguration オブジェクト・リンクをクリックします。「NfsServerConfiguration」の編集」ページが表示されます。
6. このページの「プロパティ」セクションの IFS.SERVER.PROTOCOL.NFS.TrustedClientList および IFS.SERVER.PROTOCOL.NFS.TrustedClientsEnabled プロパティにスクロールします（2 ページ以上のスクロールが必要な場合があります）。
7. IFS.SERVER.PROTOCOL.NFS.TrustedClientsEnabled プロパティ名の横にあるラジオ・ボタンをクリック後、「編集」ボタンをクリックして、このプロパティを選択します。このプロパティの「編集プロパティ」ページが表示されます。
8. （ドロップダウン・セレクトで）値を False から True に変更します。「OK」をクリックして変更を保存し、「NfsServerConfiguration」の編集」ページを再表示します。
9. IFS.SERVER.PROTOCOL.NFS.TrustedClientList プロパティ名の横にあるラジオ・ボタンをクリック後、「編集」ボタンをクリックして、このプロパティを選択します。各エントリは、次のフォーマットで指定できます。

- クライアント・アドレス

ホスト名または IP アドレス（smith.oracle.com、130.35.59.9 など）で指定します。

- ドメインの接尾辞

ピリオドで始まる文字列（.us.oracle.com など）で指定します。

- サブネット

@マークの後に IP アドレスを続けて指定します。オプションで、サブネットのビット長（/n）を続けて、サブネット・アドレス内の重要なビット数を指定できます。サブネット・アドレスの下位 0 バイトは省略される場合があります。

エントリの前にハイフンが付いている場合、その特定のクライアントは、iFS NFS サーバーを介したアクセスが拒否されます。

10. 「OK」をクリックして変更を保存し、「NfsServerConfiguration」の編集」ページを再表示します。

11. 「OK」をクリックして「サーバー構成」ページを保存し、終了します。  
NfsServerConfiguration オブジェクトの変更後、Oracle Enterprise Manager Web インタフェースを使用して、変更した構成オブジェクトをロードするノードに移動する必要があります。
12. NFS プロトコル・サーバー (NfsServer) が実行されているノードをクリックします。「一般」ページが表示されます。このページの最上部にサービスが表示され、その下にサーバーが表示されます。
13. 既存の NfsServer サーバーを停止します (すでに 1 つがサービスで実行されている場合)。
14. この NfsServer をアンロードします。
15. 変更した NFS プロトコル・サーバー・オブジェクトをロードします。
16. 変更した新しい NfsServer を起動します。
17. サービスを再起動します。

**参照:** 『Oracle Files 管理者ガイド』を参照してください。

## NIS 認証の有効化

Network Information System (NIS) は、UNIX のパスワード、グループおよびホスト・ファイル情報を統合する集中管理機能です。NIS は、基本的に、大規模な UNIX ネットワーク内の個々のファイル (/etc/group、/etc/passwd、/etc/hosts など) より管理が簡単な情報の分散データベースです。

1. Web ブラウザから、次の URL にアクセスして、Oracle Files ドメイン・コントローラが構成されているマシンで実行中の Oracle Enterprise Manager Web Site に接続します。  
`http://<hostname>:1810`
2. Oracle9iAS のログオン・ユーザー名およびパスワードを入力して続行します。Oracle9iAS インスタンス用のユーザー名 `ias_admin` と適切なパスワードを入力します。  
このリストには、Oracle Files ドメインも含まれます。  
`IFS_<hostname.companyname.com>:1521:<DBServiceName>:  
<FILESSchemaName>`
3. ドメイン名のリンクをクリックします。「一般」ページには、ドメイン・コントローラおよびドメインを構成するノードのリストが表示されます。
4. (「構成」ヘッダーの下にある)「サーバー構成」のリンクをクリックします。「サーバー構成」ページには、一度に 25 のプロパティ・バンドルが表示されます。NfsServerConfiguration にスクロールします。
5. NfsServerConfiguration オブジェクト・リンクをクリックします。「NfsServerConfiguration」の編集ページが表示されます。
6. このページの「プロパティ」セクションの `IFS.SERVER.PROTOCOL.NFS.NISEnabled` および `IFS.SERVER.PROTOCOL.NFS.NISServiceProvider` プロパティにスクロールします。
7. `IFS.SERVER.PROTOCOL.NFS.NISEnabled` プロパティ名の横にあるラジオ・ボタンをクリック後、「編集」ボタンをクリックして、このプロパティを選択します。このプロパティの「編集プロパティ」ページが表示されます。
8. (ドロップダウン・セレクタで) 値を `False` から `True` に変更します。「OK」をクリックして変更を保存し、「NfsServerConfiguration」の編集ページを再表示します。
9. `IFS.SERVER.PROTOCOL.NFS.NISServiceProvider` プロパティ名の横にあるラジオ・ボタンをクリック後、「編集」ボタンをクリックして、このプロパティを選択します。  
ご使用のネットワークで、ユーザーの認証に使用される NIS サーバー名を指定します。フォーマットは次のとおりです。  
`nis://<NIS-Server-Name>/<domain_name>`
10. 「OK」をクリックして変更を保存し、「NfsServerConfiguration」の編集ページを再表示します。

11. 「OK」をクリックして「サーバー構成」ページを保存し、終了します。

NfsServerConfiguration オブジェクトの変更後、Oracle Enterprise Manager Web インタフェースを使用して、変更した構成オブジェクトをロードするノードに移動する必要があります。

12. NFS プロトコル・サーバー (NfsServer) が実行されているノードをクリックします。「一般」ページが表示されます。このページの最上部にサービスが表示され、その下にサーバーが表示されます。
13. 既存の NfsServer サーバーを停止します (すでに 1 つがサービスで実行されている場合)。
14. この NfsServer をアンロードします。
15. 変更した NFS プロトコル・サーバー・オブジェクトをロードします。
16. 変更した新しい NfsServer を起動します。
17. サービスを再起動します。

**参照：**『Oracle Files 管理者ガイド』を参照してください。

## 既知の問題

今回のリリースの Oracle Files には、次の不具合が存在することが確認されています。必要に応じて、解決策を示します。これらの既知の問題は、プロセスまたはコンポーネントによって分類されています。

- [構成上の不具合](#)
- [管理上の不具合](#)
- [NFS の不具合](#)
- [AFP の不具合](#)
- [Oracle Files の一般的な不具合](#)
- [HTTP の不具合](#)
- [Windows / SMB / 印刷サービスの不具合](#)
- [Oracle FileSync の不具合](#)

## 構成上の不具合

<b>Bug#2391425</b>	<b>NLS: IFSCONFIG は、AL32UTF8 データベースの日本語環境では失敗します。</b>
説明:	Oracle Text が AL32UTF8 データベースで日本語レクサーをサポートしないため、Oracle Files は、アジア言語の AL32UTF8 データベースをサポートしません。
処置:	AL32UTF8 のかわりに UTF8 をデータベースに使用してください。
<b>Bug#2373885</b>	<b>複数の IP アドレスが存在する場合、デフォルト以外の IP アドレスは使用できません。</b>
説明:	この問題は、1 つのホストに複数の IP アドレスが存在する環境で発生します。別の IP アドレスが指定されている場合でも、サーバーの構成オブジェクトの作成にはデフォルトの IP アドレスが使用されます。
処置:	Oracle Files サーバーには、デフォルトの IP アドレスを使用してください。

## 管理上の不具合

<b>Bug#2408925</b>	<b>OEM では、サービス名に無効な文字を使用できません。</b>
説明:	サービスの構成オブジェクトの名前に「;」が埋め込まれている場合は、問題が発生します。
処置:	なし。この不具合は、ソフトウェアの基礎となる OC4J レイヤーでの問題が原因で発生します。
<b>Bug#2417005</b>	<b>NLS: IE 5.0 を使用した場合、OEM の Oracle Files ヘルプ・ページに動作しないリンクが存在します。</b>
説明:	IE 5.0 を使用した場合、動作しないヘルプ・リンクが OEM に存在します。この不具合は、すべてのページに影響するわけではありません。この問題は、Oracle9i Application Server リリース 2 (9.0.2) の一部である Web モジュール用の Oracle Help での制限のために発生します。
処置:	これらの問題が発生しないように、IE 5.5 に移行してください。
<b>Bug#2326481</b>	<b>「プロパティの編集」ページで「値の追加」が動作しません。</b>
説明:	ServiceConfiguration および ServerConfiguration で「string_array」という構成プロパティに項目を追加しても、システムには適切に保存されません。
処置:	項目の追加後、1 つ以上のエントリを並べ替えてください。その後、その変更をコミットしてください。

<b>Bug#2466795</b>	<b>LOB の管理に使用されるデフォルトのベース BFILE パスを変更できません。</b>
説明:	Content Agent が、ドキュメントのコンテンツを、LOB から指定時間後アクセスされていないドキュメントの BFILE に自動的に移動します。デフォルトでは、このエージェントは次のフォルダ・ツリーに BFILES を作成します。  \$ORACLE_HOME/ifs/bfile/<ifsschema>/<media>
処置:	次のパスから、任意のパスを指すシンボリック・リンクを作成します。  \$ORACLE_HOME/ifs/bfile/<ifsschema>/<media>
<b>Bug#2467651</b>	<b>ノード・リンクをクリックすると、HTTP 以外のノードがハングアップします。</b>
説明:	主要ドメイン・ページの「ノード」ページをクリックすると、アプリケーションがハングアップする場合があります。
処置:	<p>3. OH/ifs/&lt;prod&gt;/bin/system/ifsctl1launchnode を次のように編集します。</p> <pre> \${IFS_ROOT_HOME}/common/bin/ifsunixcmds \${DIR_NAME}/ifssetenv  insert these three lines:  # reset LD_LIBRARY_PATH LD_LIBRARY_PATH=/usr/lib/lwp:\${LD_LIBRARY_PATH} export LD_LIBRARY_PATH </pre> <p>4. OEM Web Site を開きます。iFS のドメイン・ページに移動し、「構成」セクションの下にある「ノード構成」リンクをクリックします。HTTP 以外のノードの NodeConfiguration オブジェクトをクリックし、 -XX:+OverrideDefaultLibthread を Java コマンドに追加します。この Java コマンドは、次のとおり表示されます。</p> <pre>.../jdk/bin/java -Xmx256m -XX:+OverrideDefaultLibthread</pre> <p>「OK」をクリックして変更を保存します。</p> <p>5. HTTP 以外のノードを再起動します。</p>

## NFS の不具合

<b>Bug#1749601</b>	<b>Oracle Files の NFS では chgrp を実行できません。</b>
説明:	chgrp を実行しても、ファイルのモードに影響しません。
処置:	なし。セキュリティ・モデルが異なるため、影響はありません。
<b>Bug#1749621</b>	<b>Oracle Files の NFS では chmod を実行できません。</b>
説明:	chmod を実行しても、ファイルのモードに影響しません。
処置:	なし。セキュリティ・モデルが異なるため、影響はありません。
<b>Bug#1750049</b>	<b>モードの属性を設定できません。</b>
説明:	Oracle Files の NFS を介してパーミッション・モードのビットを変更できません。
処置:	なし。セキュリティ・モデルが異なるため、影響はありません。
<b>Bug#1749778</b>	<b>Oracle Files の NFS を使用してリンクを作成できません。</b>
説明:	Oracle Files の NFS では、リンク（シンボリック・リンク、ソフト・リンクまたはハード・リンク）を作成できません。
処置:	なし。この問題は、基礎となる Infrastructure の特性が原因で発生します。

<b>Bug#2333774</b>	<b>名前の最初の文字が標準 ASCII 文字以外のファイルまたはフォルダはコピーできません。</b>
説明:	標準 ASCII 文字以外を最初の文字として使用しているフォルダおよびファイルは、NFS Maestro を使用してコピーできません。
処置:	他の NFS クライアントを使用してください。この問題は Maestro の制限事項と考えられます。

## AFP の不具合

<b>Bug#1990453</b>	<b>Mac OS Finder を使用して (AFP ボリュームとしてマウントされた) Oracle Files で ファイルを暗号化すると、File Encrypt が失敗します。</b>
説明:	Mac OS File-->Encrypt ユーティリティを実行すると、名前に * を含む一時ファイルが作成されます。ただし、Oracle Files ではファイル名にアスタリスクは使用できません。
処置:	Mac でファイルを暗号化しないでください。かわりに、ローカルでファイルを暗号化した後、AFP を介してその暗号化したファイルを Oracle Files にコピーしてください。
<b>Bug 2380571</b>	<b>Mac ファイルのサイズは、リソース・フォークのサイズを考慮しません。</b>
説明:	リソース・フォークのサイズがサイズの計算に含まれていないため、ドキュメントのサイズが正確ではない場合があります。
処置:	なし。
<b>Bug 2463376</b>	<b>ファインダでは、フォルダ表示がリフレッシュされません。</b>
説明:	ファイルの追加、削除、変更によってフォルダのコンテンツが更新されても、AFP ファインダでフォルダ表示がリフレッシュされません。
処置:	この問題を解決するには、ログアウト後、再度ログインします。

## Oracle Files の一般的な不具合

<b>Bug#2391425 および Bug#1926886</b>	<b>AL32UTF8 データベースのキャラクタ・セットを使用して日本語、中国語または韓国語で検索を行っている場合、コンテンツを検索してもドキュメントは戻されません。</b>
説明:	現在、Oracle Text は、AL32UTF8 データベースでは中国語、日本語または韓国語のレクサーをサポートしません。したがって、中国語、日本語または韓国語のドキュメントは索引付けされないため、これらのドキュメントでの検索はできません。  ご使用のロケール設定およびデータベースのセッション言語によっては、Oracle Text の索引作成時に Oracle Files の構成に失敗するか、あるいは構成が正常に実行されたにもかかわらず、中国語、日本語または韓国語のドキュメントでのコンテンツ検索が常に 0 ヒットを返す場合があります。
処置:	次のいずれかを実行してください。 <ul style="list-style-type: none"> <li>■ ご使用のデータベース・キャラクタ設定を AL32UTF から UTF8 に変更してください。</li> <li>■ キャラクタ設定が UTF8 である別のデータベースに Oracle Files をインストールしてください。</li> </ul>
<b>Bug#2442345</b>	<b>アーカイブ・フォルダでのページ操作で、作成した BFILES が削除されません。</b>
説明:	アーカイブ・フォルダでフォルダを BFILES に変換した後、サブスクライバ管理者がページ操作を実行しても、BFILES は削除されません。
処置:	ディスク領域が問題となる場合、システム管理者は、手動でオペレーティング・システム・ファイルを削除できます。
<b>Bug#2473166</b>	<b>参照表でのソートは、Netscape 4.7x では実行できません。</b>
説明:	Netscape 4.7x では、参照表の任意の列によってソートを実行しても、ソートは行われません。
処置:	IE 5.x 以上のブラウザを使用してください。

<b>Bug#2414889</b>	<b>検索で、AFP リソース・フォークが除外されません。</b>
説明:	Oracle Files の拡張検索では、検索結果に AFP リソース・フォークが含まれる可能性があります。これらのファイルに対して行われるすべての操作は、エラーとなります。
処置:	検索結果内のこれらのファイルは無視してください。
<b>Bug#2222609</b>	<b>Oracle Files では、IE 5.x 以上または Netscape 4.7x を介した Oracle Single-Sign-On のみがサポートされます。</b>
説明:	他の Web クライアントを使用して Oracle Files にアクセスすると、再度ログインする必要があります。
処置:	Oracle Single-Sign-On を使用して 1 回のみログインするには、IE 5.x 以上または Netscape 4.7x をブラウザとして使用してください。

## HTTP の不具合

<b>Bug#2337719</b>	<b>セミコロンが含まれている URL は、404 エラーを戻します。</b>
説明:	URL に「;」が埋め込まれている場合、問題が発生します。
処置:	なし。この不具合は、ソフトウェアの基礎となる OC4J レイヤーでの問題が原因で発生します。
<b>Bug#2386806</b>	<b>「%」が含まれている URL は動作しません。</b>
説明:	URL に「%」が埋め込まれている場合は、問題が発生します。
処置:	なし。この不具合は、ソフトウェアの基礎となる OC4J レイヤーでの問題が原因で発生します。
<b>Bug#2482876</b>	<b>パブリック・ファイルの Word ドキュメントへのアクセス時に、ユーザー名 / パスワードを求めるプロンプトが 3 回表示されます。</b>
説明:	ログインせずにパブリック・ファイルの Word ドキュメントへのアクセスを試行すると、ユーザー名およびパスワードを求めるプロンプトが 3 回表示されます。ドキュメントは、読み込み専用モードで開かれます。
処置:	なし。
<b>Bug#2355830</b>	<b>DreamWeaver 4 では、WebDAV ロックは実行できません。</b>
説明:	WebDAV を介して DreamWeaver 4 から Oracle Files のコンテンツにアクセスすると、正常に動作しません。最初の問題は、Dreamweaver 4 が、サーバーから戻される適切な XML をサポートしていないことです。これが原因で、サーバー上に格納されたコンテンツが、Dreamweaver 4 で正常に表示されません。この問題のため、Dreamweaver 4 によるドキュメントの暗黙的ロックはサポートされません。
処置:	Macromedia for DreamWeaver 4 からパッチをダウンロードすると、暗黙的ロックの問題以外のすべての問題が解決されます。ロックの問題は解決されていません。

## Windows / SMB / 印刷サービスの不具合

<b>Bug#1113581</b>	<b>バージョンングされたファイルの削除または名前の変更は SMB ではできません。</b>
説明:	SMB でバージョンングされたファイルの削除または名前の変更を試行すると、ファイル全体または一部がロックされる場合があることを示す障害メッセージが発行されます。特定のアプリケーション（Microsoft Word、Microsoft Excel など）では、古いドキュメントを削除することによって作業が保存されます。この操作を行うと、データ属性が失われ、Oracle Files のバージョンング機能が低下するため、Oracle Files の SMB サーバーでは、バージョンングされたファイルの削除または名前の変更はできません。
処置:	Web インタフェースを使用してファイルを削除してください。

<b>Bug#2472522</b>	<b>Windows で複数の印刷ジョブが生成されます。</b>
説明:	特定のバージョンの Windows では、1 つのドキュメントを印刷する必要がある場合に Oracle Files で複数の印刷ジョブが作成されます。これらの余分な印刷ジョブにはコンテンツがないため、実際には印刷されません。ただし、これらの印刷ジョブはしばらくの間キューに残ります。ドキュメントは適切に印刷されます。
処置:	なし。
<b>Bug#2344972</b>	<b>ユーザー名およびパスワードによって制限されているプリンタには出力できません。</b>
説明:	Windows NT/2000 のプリンタに接続している場合、ユーザー名およびパスワードを求めるプロンプトは表示されません。したがって、共有ファイルがユーザー名およびパスワードによって制限されている場合は印刷できません。
処置:	次のいずれかを実行してください。 <ol style="list-style-type: none"> <li>1. プリンタをマウントする前に、ネットワーク・ドライブを同じサーバーの共有ファイルにマップしてください。ユーザー名およびパスワードを求めるプロンプトが表示された場合は、プリンタへのアクセスに使用するユーザー名およびパスワードを入力してください。</li> <li>2. プリンタをマウントする前に、DOS プロンプトを開いて、次のとおり入力してください。  <pre>&gt; net use ¥¥&lt;server-name&gt;¥¥&lt;printer-name&gt; &lt;password&gt; /USER:&lt;username&gt;</pre> <p>次に、共有プリンタに同じ名前を使用して、プリンタをマウントしてください。</p> </li> </ol>
<b>Bug#2424896</b>	<b>印刷可能にするためのサーバー・プロパティが SMB の「サーバー構成」に表示されません。</b>
説明:	SMB からの印刷を可能にするには、Oracle Files の管理者がプリンタを共有できるようにプロパティを設定する必要があります。このプロパティは、自動的に SMB のサーバー構成プロパティの 1 つとして表示されません。
処置:	Oracle Files の管理者が、手動で IFS.SERVER.PROTOCOL.SMB.EnablePrinting プロパティを追加し、その値を TRUE に設定する必要があります。

## Oracle FileSync の不具合

<b>Bug#2439362</b>	<b>インストーラが、警告なしに既存の Oracle FileSync クライアントを更新します。</b>
説明:	Oracle FileSync インストール・プログラムでは、クライアントの更新の前に警告は発行されません。この新しいクライアントは、Oracle Collaboration Suite でのみ使用できます。
処置:	以前の Oracle Internet File System または Oracle Content Management SDK サーバーにアクセスするには、それらの製品に付属のクライアントを使用してください。
<b>Bug#2374879</b>	<b>名前にパーセント（%）が含まれているサーバー側のフォルダは、同期化されません。</b>
説明:	名前に「%」が埋め込まれているフォルダおよびファイルは、sync 処理を実行しても同期化されません。
処置:	なし。この不具合は、ソフトウェアの基礎となる OC4J レイヤーでの問題が原因で発生します。